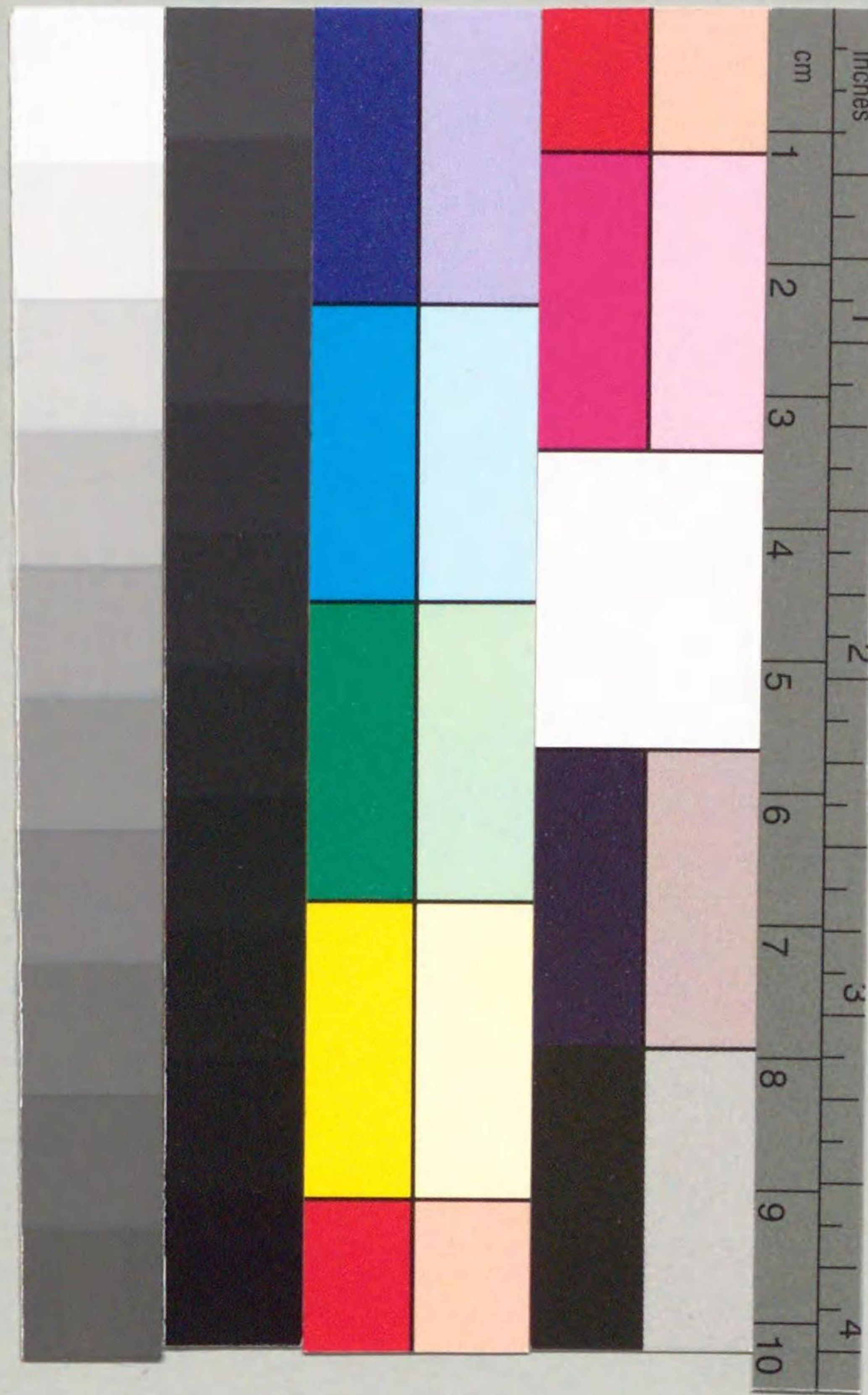
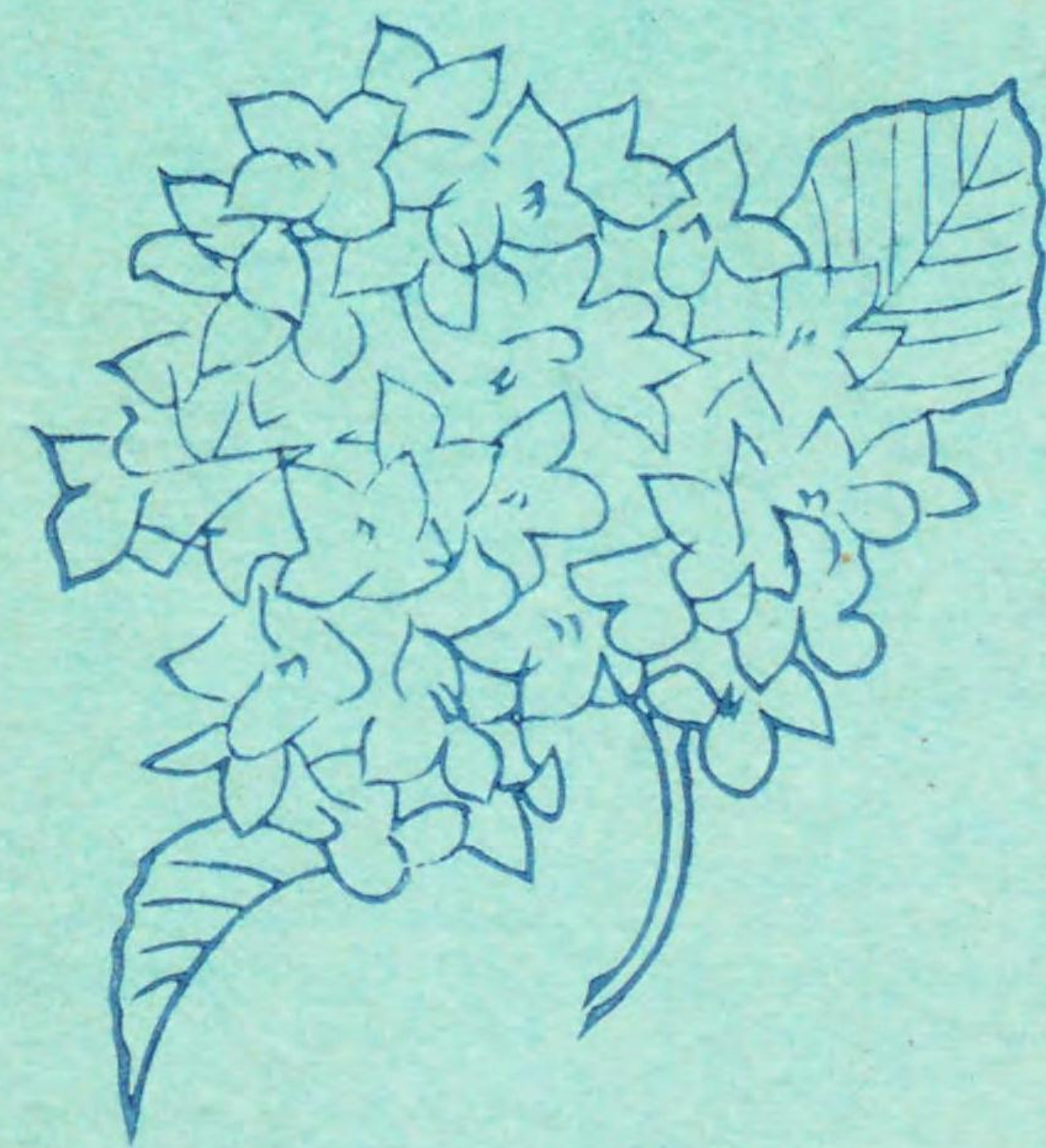
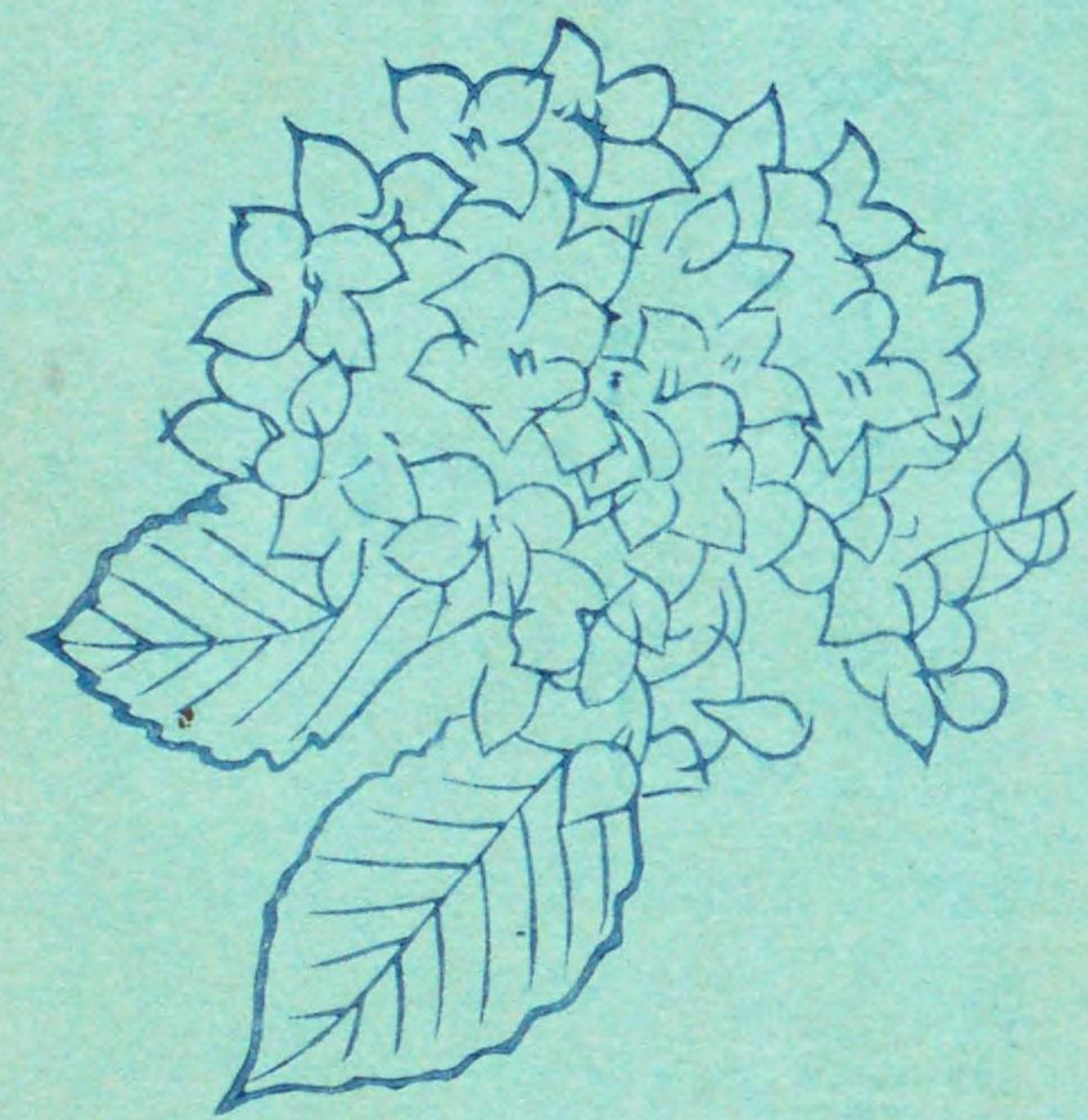


918.6
1989k



00252009





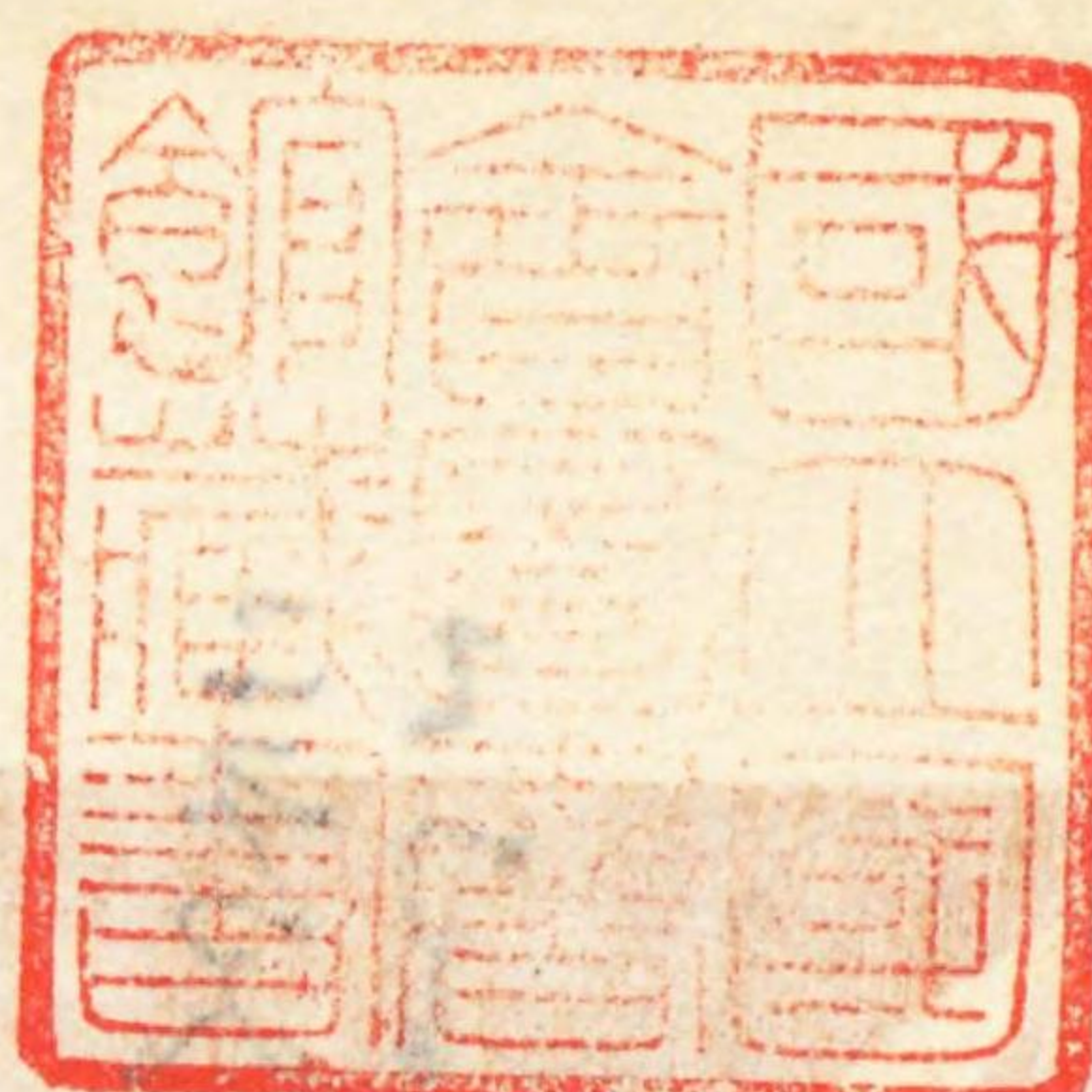


三友記

卷之六

三友記

卷之六



252009

目次

紅 葛 (大正三年十二月) 一

櫻 心 中 (大正四年一月) 六

櫻 貝 (大正四年一月) 一三

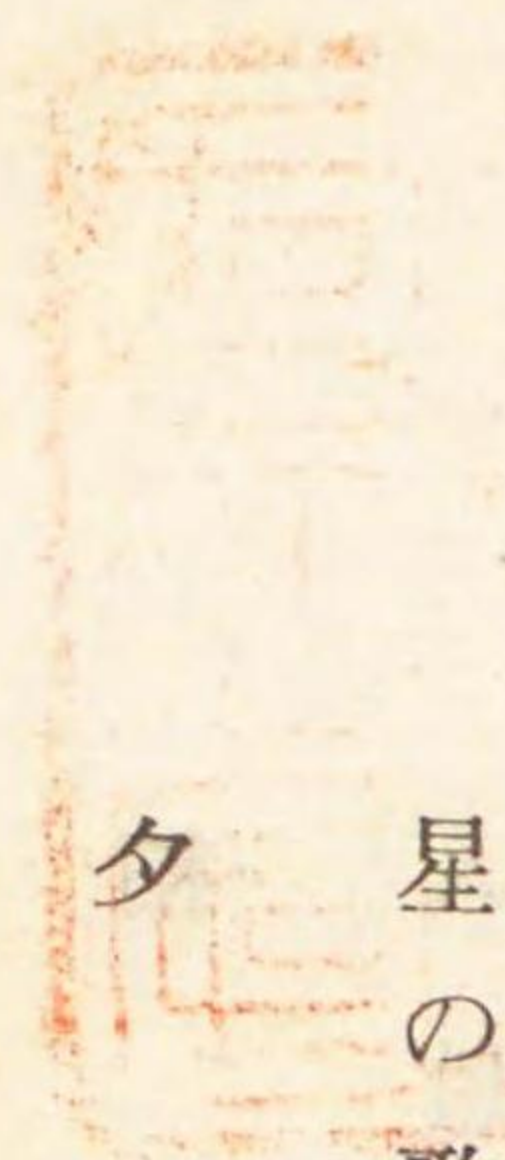
新通夜物語 (大正四年四月) 一六

星の歌舞伎 (大正四年五月) 二四

夕 顔 (大正四年五月) 三九

蒔 繪 も の (大正四年七月) 四六

懸 香 (大正四年九月) 四七



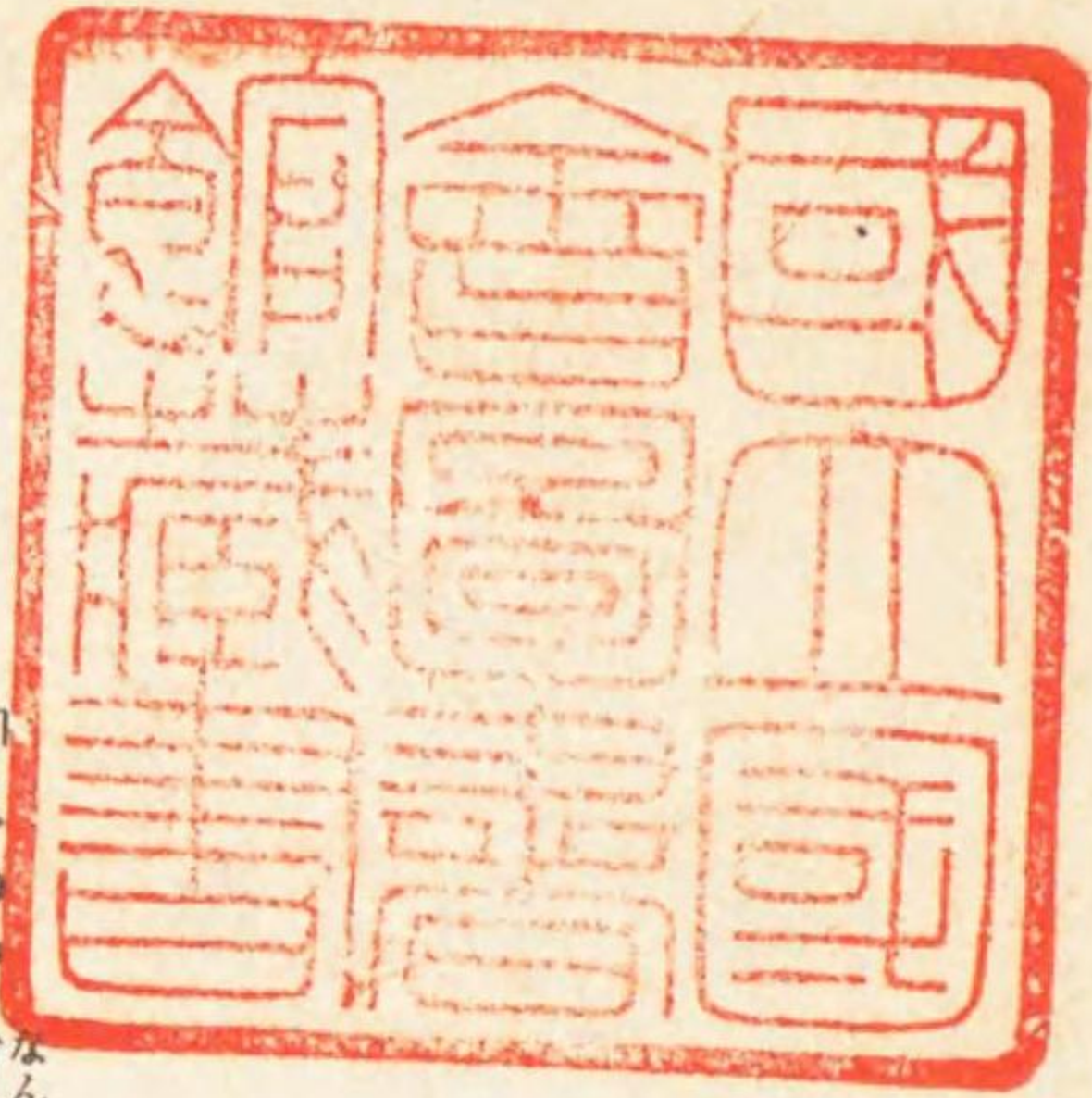
白金の繪圖 (大正五年一月) 五二

浮舟 (大正五年四月) 五七五

柏奇譚 (大正五年五月) 六二九

人魚の祠 (大正五年七月) 六六九

紅
葛



「はつ、何だ、何だ。」

と、怯えて、運轉手は忽ち自動車を翻然と下りると、崖路の暗闇の中を二筋眞蒼に流した、もの凄光に射られながら、慌しく背後を透かした。

其處へ、恰も大地獄から、硫黄の煙で吹上げられた、幽靈のやうに、ふら／＼と顯れた肩のさみしい影がある。

崖に生えた雜樹の根に、ぶら下りでもしたかと思ふ、腰はふら付くが、ひた／＼と忙しい蹙音、路を上りざまに駈寄つた。

「何だ、何か用か、何ですか。」

「助けて下さい。」

然矣、此の聲の爲に、夜の箱根を唯一人乗つて打つ車中の婦人が、電光よりも眞白な指で、激しく硝子越に其の運轉手の背を敲いて、車の進行を停めたのであつた。

「助けて。」

と云ふ聲よりも、婦人は彼を挽回したと思つたらう。……黒雲低き片岨の樹の根から、鳥が立つやうに衝と出て、殆ど自動車に縫着かうとしたのであるから。……云ふまでもなく颯と切る轍とともに、其の影は、恰もものの怪の消ゆるが如く取残されて背後に消えたが。

「馬鹿野郎！」

運轉手は、峰から哄と、石も雨も巻いて落す風と一所に、罵る聲を投げ飛ばして、一捻り昂然と胸を反らしつゝ、駈出す端を、強く窓を打つて引留めたのであつた。……

「願ひます。」

と切呼吸で、聲もやゝ震へたが、其の風體は、と見ると、縞柄は分らない、何處のか旅宿の貸廣袖らしいのに、青い浴衣を襲ねたのが、跣足で居る。

運轉手は一目見ると、

「何、何を助けるだい。」ともう一息、急込んだのは無理もない。

が丁どその時、上り坂を崖へ寄つた、左の窓が、音もしないでスツと下りた。此の窓の開いたのは、眞黒な大な巖が、四角な眼を睜いた風情である。そして、其處から覗いたのは、半輪の月かと思ふ、細面に鼻筋の透つたのが、薄いシヨオルを深々と掛けて、俯向く状に、頤を襟に埋め

た若い婦人。トきらりと電光が閃いて射て消えたのに、悽然とするほど美しい。
鈴を振るやうな聲で、

「何うなすつたんです。」

「御婦人。」

と唯呼ぶ途端に、巔を破る雷の響。

これが四つ五つめの激しいのであつた。

霜月の二十日前後、山は早や錦葉と云ふのに、——谿河に架けた橋に近い湯宿に居ても、雷の嫌ひなのが、あの、ごろ／＼と陰に響く車の音を、餘り氣にしないで可いくらる、箱根は夏も雷鳴が少いと云ふのに、——其の夜は雨に風さへ激しく、殆ど天變であつたと云ふ。

天變と云へば、人妖に庶幾かつたらう。……國府津の會社が自動車をはじめてから、こんな時間、若い女客の唯一人は。……

「宮の下まで。」

まだしも湯本と云へば近いのに。

會社員が恭々しく、其の時、

「御一名？」と聞くと、

「はあ。」

一寸したバッグを持つたなりで、其の美しいのが誰も居ず、すらりとイむ。

——いなさ參らう——と云ふ——古釘で祝ひましょ、と答ふる。手石浦の物語を思出す。……

風もいなさの、時ならず生暖く、折から大粒なのが、ぼつ／＼と來た頃であつた。……沖には難

破船でもありさうな、波は白く、樹は黒く、風の中空に噛合ふ時。

薄紅梅の地に一重櫻の咲亂れた長襦袢の袂を、と捌いたと見ると、自動車の裡に姿を消した。

此處からは五里あらう、箱根峠の眞中へ雨を切つて、黒雲に乗つて行く……と思ふと、旅客に

馴れた停車場の驛員等も、怪しい音と凄い燈の、唸を生して、並木へ飛ぶのを、風に吹かれて見

送つた。

剩へ、夜目に莫大な海月の泳ぐ、暴風雨の山の、峰と峰とが、頂きの石を摺り合せて、火を切

る如く、チカ／＼と電光が頻であるから。

葛 和
小田原はまだ宵だつたが、生蕎麥の行燈も、廓の電燈も、町の柳も、白壁も、たゞ波の如く揺る／＼中を、鐵の船に車輪の舞ふ通魔が、と軋つて通つて、風祭から湯本に行く間、渦巻く黒雲の

雙子を前途に、太閤の一夜城が高く鯨の背を浮かせて、海が一枚、青く颯と翻るのが窓に映るとともに、はじめて雷が轟いたのであつた。――

「助けて下さい。……」

其の事の起つたのは、塔の澤に、早や遠く、大平臺もまだ遙な、上りの半途の、崖の樹の根の、破簾のやうな中だつた。

「何うなさいました。」

「貴女、貴女。」

婦人は、其の若造の怪しい風采を視て、一寸言葉を途切らした。が、電光の又閃めく影に、沈んだ落着いた様子である。

運轉手は腕を組んで、斜に肩を聳かした。

「お見掛け申してお願があります。」

「何うなさいましたの？」

「お車へ乗せて下さい。」

と、差寄せて面を上げた時、其の若造を熟と視る……婦人の瞳は大きかつたが、

「お乗んなさいまし。」

「御免を！」

と忽ち威勢よく、

「お差支へございせんか？」

と猶豫ひつ、戸を開く、運轉手の注意には答へないで、

「宮の下へ行くんです、構ひませんか。」と婦人が言つた。

「え、何處へでも、地獄へでも。」

山中には人も知つた、大湧谷、小湧谷、硫黄の地獄の名どころがある。其があるからまだしもであらう。婦人の面影が車の裡へ隠れるに連れて、若造の頭は斛斗返る如く、足を宙に飛込むのを見て、激しい雷鳴とともに、運轉手は、フツと唾吐く如く禁厭の息を風のまゝに吹散らした。

「此方へお掛けなさいましな。」

若造が進路を逆に、向うの隅へ小さく成るのを見て、婦人は姿を細うしつ、颯と薫る其の片袖を教へたのであつた。

「決して、何うぞ。」

「否、一人だと腰が浮いて跳上げられさうで危くツて不可いの、丁ど可いのよ。」

と言葉も解けつ、

「附着いて居て頂戴。」

と聲も涼く云ふ。

運轉手は、直ちに把手に手を掛けた。峰と峰とが笈を籠めて、風雨に雷火を取交はす。……輝く草樹は白き骨の縋る、如く、谿川の暗闇に血の走る、暴風雨の山を、音なき、大車輪は軋り行く。

やがて、燈火の店を開け連ねた、路傍に、籬に、軒に、紅い花を選つて植た、大平臺を駈抜けるときは、ダリヤ、サルビヤの流る、紅が赫と照つて、珊瑚の枝の亂る、中へ、藍碧の雨の潮の如く注ぐを視た。

三

「其の男は何うしたい。」

「まあ、其の人には、私ども吃驚してしまひましてございますよ。……御前……自動車が入りましたから、此方様がお着き遊ばしたと存じまして、……」

宮の下、新屋の女中、お民と云ふ、銀杏返しの膨りした、中年増が、敷居越に膝を置いて、(此方様。)と云ふ。……箱根の夜道も旅である。……若い婦人は、廻縁を硝子戸で取廻した廣室の眞

中に置いた卓子の前に、金茶の地に、花白く蔓青く、葉を黒で鐵扇葛を刺繡した、恰も燻んだ黄金に、銀と烏金で象嵌をしたやうに見える、幽に輝く丸帯を、薄く、太鼓に締めた細腰。絹蒲團に無造作に預けたが、黒地に雪輪崩しの大島お召、年の若さに派手な柄も、撫肩の姿をしめて織りして、八口を透く其の薄紅梅の、枝ならぬ花の袖にはらくと降積るか、と撓弱に見えて嫺娜である。片脰を軽く卓子に掛けて、女中に見向いた顔は、花やかな電燈の下に、やゝ……蒼みを帯びた。

斜に向合つて、書架兼帯の白木の置棚を背にして、洋装した榮花物語を読さしたま、頬杖ついた、三十四五の、品よく眉の秀でたのが、温泉の夜を、廣袖ともなく、平御召に巻着帯で、寛ぎながら、威儀の正しいのは……即ち(御前)と呼ばれたのである。

女中は支いた手を膝へ引き、
「……それお着き、と申しまして、何でございますよ。私ども番頭たち、ばらく玄關へ、揃つてお出迎ひをいたしますと、丁どあの、篠を突くとか申します大雨に、又激しい電光でございまして、宛然あの(千筋の瀧が一齊に眞蒼に燃上りましたやうな中へ、(此方様)がまぶしいやうに、お美しくお立出で遊ばします。……」

實際それは冷艶なものであつた。

「難有う。」と婦人は、やゝさました體に、一寸會釋しつゝ、微笑んで云つた。
 「否、眞個でございます。然う致しますと、御前、其の直ぐ後へ、あの方でございます。一所に鳴りました雷様の音よりか、皆が吃驚したではございませんか。轉がるやうに玄關へお駈込なすつたと思ふと——何處か人の居る所はないか。大勢人の居る所はないか。——ツて、私も、其處に居ります頭の上から、がらん堂のやうに、家中を眊して、突然、帳場前を横飛に、あの門の傍に、……内へ入ります取着きに、駕籠屋ですの、車夫でございますの、出入のものの部屋がござります。」

「あゝ。」

と殿は頷いて、をかしく聞惚れたらしく頤に手を添へる。

「ちやうど、篝のやうに、火鉢の火を焚いて居りました、そこへ駈込んで駕籠昇たちの胡坐の間へ、突伏してお了ひなすつたんでございます。すぐに、あゝ、雷様が嫌ひなんだ、と、氣が付きました。……もう、目が据つて、顔色つたらないんでございますもの。——何處か人の居る處はないか。」

「然うかい、變つてるね。」と軽く卓子を指で敲いて、

「いや、變つてるね。と云つては濟まないが、然うまで不自由でも氣の毒だね、きぬちゃん。……」

……と婦人を見て、

「お前も餘り好きな方ではなかつたつけ。」

「でも、まさか。私は普通ですわ。」

「それが顔の色が大層悪いよ、蒼いくらるだよ。」

「夜汽車にめした上、山の中を、お一人で暴風雨にお逢ひ遊ばして、お身體に觸りましたのではござりませんか。」

顔の曇りは薄舞の煙の香……黄金煙管を細く吸つて、

「否。」

四

「唯電光で顔を見たばかり、見ず知らずの人を、助けてくれ、と云つたので、自動車の中へ入れたは可いが、大分瘦我慢の女俵だつてな、……實は可恐かつたらう。何うかされやしないかと思つて。」

葛 紅 「何うするものですか、……又何うかしようたつてさせやしないわ。第一そんな人相ぢやないんですもの。……でも凄かつたわ、眞蒼になつてゐて、雷様が可恐いんだつて事は、一目で知れて

よ。……」

「貴女、お寒いのではございませんか。ばつたり雷様が止みますと、急に冷く成つて参りまして
ございますから。……眞個お色艶が。」

「實際、蒼いよ。」

「大體が黒い處へ電光の鍍金をかけた所爲でせうよ。……崖縁の草と一所に身體へ浸透るほど光
りましたもの。」

と空色鼠に藤の縫ある半襟に掌を外らして當てて、俯向いて胸を見て、

「遙々推掛けて参つたのが、そんなで濟みませんね。これでも湯へ入れれば玉のやうですつてさ。」

「ほんに、早速お召し遊ばしては如何でございます。お心持がさつぱりとなさいませう。」

「入つておいで。」

と卓子に腕を組直して、

「其の内に御馳走が整然と出來ます。」

「ですが、今の人が來ます時、私が居ないぢや、跋を悪がるでせうから、お兄さんにお引合せを
して置いて、それからの事にしますわ。」

と優しさが瞳に籠る。

「大きに、然うだね。お民さん、……何うだい。」

「見て参りませう。松がお迎ひに行きました。何うなさいましたか知ら。」

立たうとした時、廊下へ梵音。雷の後は、がらんとして一層響く、障子へ半身でお民が覗いて、

「あゝ、お見えに成りました、貴方、此方。」

「これは御苦勞です。」と件の若造は、前へ立つた島田鬚に入交る、と其の女は、悪く澄して一つ
お辭儀をしながら、ばた／＼と引返す。笑を忍んで居たらしい。

「さあ、貴方、もうお待兼ねで在らつしやいますよ。」

此を聞くと然も繼穗を得たらしく、

「それはどうも。」

と元氣よく云つたが、向つて衣桁に掛つた婦人の羽織を見て、其にも挨拶をしたさうに目を配
りつゝ、襖際へ。

「失禮。」

と面を向ける。其處に二人青疊に繪に描いたやうな對座を見て、不意を啖つたやうな、又心得
たやうな、執方附かすの敷居の上で、廣袖の膝を眞四角に坐つて、

葛 紅
「申譯のない事をいたしました。」

「何です、言譯なんかすつて。」

と、居坐が一寸動いて、

「あの、此の方なんですよ。」

「はじめまして……途中御難儀をなすつたさうですね——誰しも嫌はあるものです。お察ししますよ。しかし、最う此處へ在らつしやれば御安心です。それに、可い鹽梅に、すつかり鎮まりました。」

若造は心から頭を下げた。

「お言葉で汗が出ます。生命とも、何とも、夢中で御禮をいたしました。眞個お庇で助りました。ですが、申譯がありません。」

「あ、お堅い。こんな場所で然う御懇勤では困ります。お互に遠慮なしに……なぞと云つて、高い處で失禮です。さあ、すつと寄つて、貴方もお敷き下さいませんか。」

座蒲團は、卓子に洲濱形に。

「さあ、でないと窮屈で困ります。裸體でお附合をする處ですから。」

ふと婦人を見て莞爾して、

「いや、此は誰方がお在でだつて。」

「構ひませんわ。」

五

女中が附いて、二人温泉に行く……寗音の通ふのを耳を澄まして聞くやうだつた。また其の時まで、席を進めないで、畏つた此の若造の旅藝人、秋山謙介、と、それは彼が自ら名告つた。

其の名告つた時、次の室に鐵瓶の下へ炭を繼いで居た女中が、旅藝人と聞くと、振向いて濃い眉毛を額へ離した。

「何をなさいます。」

殿が問ふと……衣紋に白いハアト形の腕の腕で、艶々と前髪を斜に支へて、瞳を大きく打傾いて美人が見た時、若造は猶豫ひつゝ、俯向いて、唯苦笑したのである。

「琵琶ですか。」

此の問は當を得たものと云つて可い。怪しげな廣袖に襯衣を着込んで、紺木綿を尻帯にして居るのであるから。

紅 葛 「そんな！ そんな名のついた藝ぢやありません。さのさ節と、阿呆陀羅經です。」
女中の呆れた事。

「結構よ、お酒の時に聞かして下さい。……ちやお兄さん……お湯へ。」

女中が、不斷の浴室は、男女兩方とも、晩方から、遠足の學生たち四十人ばかりに貸切りに成つて居る。平時は狭いのでお嫌ひだけれども、貸切の方へお召しをと云つた。

「猿の湯だね。」

「へい。」

「何うして？」

「階下の突當りの、奥の一番隅。窓から赤い顔のものが覗くとさ。」

「可厭だ。……氣味の悪い。」

「貴女、嘘でございますよ。」

「でも一人ぢや可厭、お兄さん、一所に行つて頂戴。」

紳士は爽に笑つた。

「其處を狙つて威したのさ。」

「何うせ、おのろけの維也納とやらの侯爵夫人のやうには参りませんよ。……珍らしくもない癖に。」

もう次の室の衣桁の前に、する／＼と帯を解く、片端をお民の手に受けさせながら、

「秋山さん……一寸、一所に入りませう。」

お民が三度吃驚した。

「飛んでもない。」

「構ひませんよ。」とまた殿の心易さ。

「まだ胸がどき／＼します。雷も止みましたばかりの處、裸體で湯處ぢやあないのですから。」

「餘程お嫌ね。」

「ぢや、お心任せが可からう。」

で、誰も居なく成つた時、旅藝人——阿呆陀羅經の秋山は、一人でぼかんとしたやうに突立つて、

「はてな。」

……次の室へ出ると、其の壁際と廊下の隅なる、鉢形の眞鍮の火鉢の前に、骨を抜いたらしく頽然と成つて、茶盆に半ば掛けた布巾を摺らすと、吸子を取つた、が一寸重い。

茶碗を仰向けて、打まける如く注いで、湯氣は白く火は赤いのに、冷めたいのを一呼吸に啣と飲んだ。吻と呼吸して、

葛 紅
「あゝ、助つたぞ。」

と目の覺めた體して、もの珍しげに、澄透つた空の如き廣い座敷を眇した。衣桁に靡く月夜の虹。沈める黄金、浮出る紫。

「龍の如し。」

颯と血の通つたらしい生氣付いた、片頬に寂しい微笑、懷中へ手を突込むと、敷島の箱を出したが、残つて、四五本ある、一本抜くと吸口の繼目が切れて、ぐんなりで、次のも、次のも、折れて居たり破れたり、暴雨に夢中だつた、しとりが透つて、ものの用には立つべくもなかつたので、

「ちよツ此方は蚯蚓だ。」

一掴みにして投げたが、掌を火鉢に拂いた。

「召上りましな。」

お民が引返して入つて來ると、其處へ、盆に五個ばかり卷蓑を積んだのを、渠は片膝立てて熟と視て、

「姐さん、一體、誰方なんだい。」

お民は薄目で一寸見て、

「廣澤様、御華族様。」

「然うか、貴族院の。——伯爵廣澤頼基さん。」

「御存じでせう。」

「名は知つてる。御婦人は。」

「直接にお聞きなさいまし。おほ、……貴方、……御酒は召上りますでせうね。」

「飲んでも可いか知らん。」

「え、ちゃんと、然う御申付けに成りましたよ。……」

六

「これはお樂み最中。」……

前後して湯殿から續いて歸る、伯と婦人に入交はつて、秋山は遁ぐるが如く入浴に。自稱旅藝人の謙介が、頃刻して濡手拭を提げて戻つた。——欄干は晴れて硝子戸越の雲かと思ふ、黒い明星ヶ嶽の頂きに、青く星が見えるやうに成つた……怪しい龍は姿を消した、帯はもう其處にはない……衣桁に手拭を掛けて、座敷へ入ると、先刻の榮花物語で黒檀の大食卓の三分一を仕切つて、對向で、小形のランプを弄んで居た。

「食事を御一所にと思つてお待をする間に——」

然う云つて、伯が、さら／＼と雪を散らす。骨牌を捌くのが、音のない、聲のない、一種の虞美人草の譜を、手尖で巧に奏づるかと思える。記號の黒いのは、ちら／＼と、それは蕊である。紅なるは、其の花片である。と。そして、扱ふのが捲るのではない、摘むのである。摘んで散らすのではない、織るのである。

唯、あの二重に合す吉野紙、湯上りの霞を籠めた兩の手に、ほんのりとした顔載せて、若い婦人は熟と視ながら、フト忘れたやうにトランプの彼方此方に指さしをするのが、齊しく温泉に露つた唇の色が手に染んで、骨牌の記號の紅にこぼれて、囁いて揺れて、ものを言ふ。……すると、黒い艶やかな點々は、伯の清らかな瞳が無言の聲に答へて動くやうであつた。

其の唇と瞳が頷くらしく見て取られて、骨牌は、一絡めに重ると齊しく、婦人の伏せた掌の中へ隠れて、すぐに洋装した榮花物語に違つた。

「食事をはじめませう。」

伯は投げるやうに書棚へ納め、謙介に振返つて、

「さあ、此方へ。」

と軽く言つた。

「此處で結構です。」

と謙介は、舊の座を尙ほ一腰引いたが、トランプの後を覗くやうにして、

「まるで素人には分りません、執方がお勝ちです。」

伯は無邪氣な微笑で、

「合戦と見えましたか、何、勝負ではありません。二人で話をして居たのです。」

「お話し。」

「え、貴方のお噂を。」

と莞爾する、婦人の唇はハートの一。

「私の噂を。」

と睜つた瞳は、疑に稜つて、可笑しなクラブの形と言ふべし。

「口で饒舌つて、湯へ入つて在らつしやるのに、噓をなすつて、風邪をめすと不可ないと思ひましたから。」

「温室の花の、夢に蝶がものを云ふのを聞いて居ますやうな心持です。……トランプの記號でお話が出来ますか。」

葛 紅

「あの、維也納とかで、侯爵夫人のお仕込ですとさ。私のは、ほんの、スベイトとハートの平假名、ダイヤとクラブの片假名まじりで、どれも、ほんの、いろはなのよ。……お兄さんの方は、

此でどんな秘密な込入った事でも、主人の居る前で、其の奥さんと、忍び場所の約束でも、お政事ごとでも。」

「お黙り！……酒は何うしたい。」

「一寸お燗を直させました。」

其處へお民が、廊下が長いのに、悠然と。

七

「御辭退しないで、推参します。」

謙介は、ものの興奮した景色で、正面に直つて、まだ杯も手にしない、白面に色をのぼせて云つた。

「實は中學校の教師です。」

それは、膳に向ふやうに、伯と婦人に座に請ぜられた時、直には敢て膝をも進めなかつた後である。

「旅藝人の門附風情が御同席さへ。……此で、結構です。」

別にお座敷を言附けませうかね。」

謙介が頑として膝を疊に着けたのを視て、廣澤伯は婦人に言つた。

「然うね、懃かお構ひだてをして、お氣詰だと不可ませんわ。」

伯が一寸向直つて、

「秋山さん——でしたね。」

「いや、石山でも、草原でも、禿山でも、そんな事は些とも構ひません。」

「お座敷を別に差上げませう。實は初めから其の方がお窮屈でなくつて可いかとも思つたのですが、女がお伴ひ申しただけに、お隔てをするやうで厭ですから入込みに願ひました。——お民さん、しかし、お近い處が可いね。」

「畏りました。では、一寸お支度を。」

謙介の傍に、つい居た女中は、膝を一つ退らして起つ。

「相濟みません。」

葛紅 謙介が會釋する時、婦人が薄紅梅に、簾を雨の如く白で霞めた博多の伊達巻で、すつと襖を深く素足で起つと、卓子の周圍、あの置棚へ。中の棚にあつた、蒔繪の硯箱に、用意がしてある紙包。蓋を裏返しにして、中に入れて、留南木の薰、近々と伯の肩に引添ひながら、と膝を謙介に向けつ、斜に胸を浮かすやうに、ついと出す。……中に据ゑた、其の包に、此は伯の手で、（御

酒)としてあつたのである。

「ほんのお印までですよ。」

「實に輕少。」と伯が言つた。

謙介は目を睜つた。

「失禮ですけれども、貴方、藝人衆でおいでなさるなら、お腹立もないでせうと思つて……何うぞ、お納め下さいまし。阿呆陀羅經を聞かして頂戴。」

と笑が皓齒に細く透る。

「唯今、讀みます、後とは申さず……」

(實は旅藝人ではない、中學の教師である、と則ち名告つた。——)

で、當人は爾く興奮したらしい態度であつたか、伯と婦人は澄して一寸領き合つた。

「故とお褥を頂戴しませう。」

「何うぞ。」

「お次手に其方へ行らしつて下さいな。然うでないと、私が又一廻りしなければ成りませんもの。

……」

早速に身近な蒲團へ。

「さあ、先生。先刻、貴方、自動車に召す時、一所に地獄へでもツておつしやつたわね。」

「御免下さい。」

擡ぐる腰に力を入れたが、膝は投げるやうに、へたくと褥に着くと、床しくもある哉、留南

木の餘波が、絹より、綿よりも柔い。謙介は宙に浮く、心を沈めるやうに、確と額に手を當てて、

「まだ夢を見てゐるやうです。」

「今お讀なすつたのは、勸進帳と云ふ處で、大分苦しうでしたな。」

「いや、實に阿呆陀羅經です。が決して、其の御包は頂戴しません、其だけは何うぞ、平に御容

赦に預りたいんです。」

「でも、お兄さんが折角……可ござんす、私が。」

と蓋を取る、蒔繪の萩の玉章を、忍ばす狀に、襟の中へ。白紙の端は、伊達卷に媚かしい。湯

上りの髪は、早や何時か、櫛巻に解かれて居た。すなほに丈に餘るほど、散らすも解くも、結ぶ

のも、綾とりの絲より早い、櫛の捌きが想はるゝ。

廣澤伯は唯受けたばかりである。あひは二ツ三ツ婦人がした。酒を飲む男の、猪口を手にしたのは、悄れた草の、甘く且つ芳しい露に甦るが如きもので。分けて、温泉を浴びて、意味ある美人に對したれば、月に向つて流るゝ光を、根に、莖に、颯と注がれたに異ならず、怪しく黒い花も咲きかねぬ。特に心細く膽の小さな男の、情の激した、病めるものの如き折の此の注射は、猶更である。謙介の態度は宛然此であつた。

「私なんぞは、事實此が旅藝人でありますよりか、尙ほ、さがつてゐるかも知れませんが、教師だつて……其がです。」

謙介は追掛の酌を、婦人のしなやかな手で受けて、

「……其の中學の學生に、日の暮方の路を教へる、化けた案山子とも行かないので、實は圖畫科のお雇、畫の教師なんです。」

銚子を婦人が引寄せると一所に、伯の注意で女中は席には置いてなかつた。

「で、更まつて、申しますのも變ですし、慙うまで御迷惑を掛けますのに、まだ何か、貴方がたに、自分と云ふものを、此以上結びつけますやうで恐縮ですが、實は一度、以前に、お目に掛つた事があるやうに思はれます。今夜がはじめてとは思はれない氣がしますんですが。」

「私たち、二人ともでせう。」

と伯は怪む色もなく、一寸箸を休めて笑つた。

婦人も此を待つたやうに、仇氣なく流眇して、

「先生、私が當てませうか。」

「はあ。」

「近い事ね、向島の奥、白鬚の、もつと先……」

「何うして貴方がた……」

とやゝ狼狽へて、何方を見ようか迷つたらしい、左右の瞳を杯に注ぐ。ト恥ぢたる色して、

「何うして貴方がた……」

「お忍びで、先生、着流で、頬被をなすつて、一寸意氣だつたわね。柄にお似合なさらななささうな。」

「馬鹿な。」

伯爵は微笑ながら、

「柄にないとは何だい。」

「だつて、繪を遊ばすんだつて、學校の先生だとおつしやるんぢやないの。」

謙介は又上氣たらしく、肩を聳やかした手を、膝に落したと思ふと、懷を狭く身を緊めて、首

垂れた。

「一言もありません。その了簡なればこそ、自分で門附だと言はなければ成らないやうな羽目に立至りました次第なんです。(千三百石から馬追)と言ひますが、こんな畫工から旅藝人ぢや、雀が箱根山で蛤です。執方が下落だか分かりません。鰻にならない山の芋です。はじめから、目鼻の分らないやうなものを、しかし何うしてお見覚えがありました。」

伯は卓子の端に手を置いて、

「此女はね、目が凄い。露西亞あたりだと、國事探偵でもしさうなんです。」

「酷い事、お兄さん。」

「そのかはり祕密はよく守る質です。……お見受するのに、御様子に何か隠れた仔細がおあんなさりさうです。……祕密は守ります。事情を御話なさいませんか。……」

私は些とも知りませんが、覚えても居なかつたんですが、此の女はね、先刻、山の半腹で、電光で御顔を見た時から、多分、向島の其の方だらうと思つたと言ひます。そして、ランプで話合つたのも、貴方のお身の上で就て、其等の種々の事でしたよ。」

知らず、星も、花も、目のあたり我に囁く。……風も、山も、……折から谷川の音が響いて、謙介は悚然とした。

「お惚氣なさいな、聞きたいわ。鬱がないでさ。」

衝と銚子に向けた婦人の手も、月が送つた雁の雪の頸に似る。

九

「忘れもしません、彼の晩は十五夜でした。が、當人血眼の女童と云ふので、自家廣告のペンキ塗に……電燈を通して、上野の空へ、仁丹ぐらるに顯さうと、其の展覽會の繪を、青やら、赤やら、七面鳥で塗つてます最中で。」

隅田堤へ月見などと、そんな餘裕のあるのぢやありません。此體裁で。それだけは憚りますから名は申ませんが、故人に成りました師匠の墓が、木母寺の傍にあるんです。道は遠し、世帯にかまけて、御無沙汰勝の處を、苦しい時の神だのみで、其處へ墓参しました歸途だつたんです。ですから、紋着の羽織を、勿論怪しげな。でも、團子が五つで、月夜には目に立ちますから、貴方がたが月見をなすつた、あの紅夢園の萩の中へ忍ぶ……いや、潜込みました時は、引丸げて帽子と一所に懐中へ捻込んで頬被をしました。此が不心得だつたんです。悪く下町の人氣のよくない所で育つたもんですから、小雨の夜なぞ、錢湯へ行くのに、遣りつけて居ますので、一廉顔も隠したつもり。そして、あの時は手拭ぢやありません、手巾でしたよ。

良い月でしたな。」

謙介は背見らるゝ状して廊下を覗いた。

「それ、そんなに星が出ました。もう、雷は大丈夫、安心してお話し下さい。」

と伯が云つた。總硝子の連る戸は、星影に山を透かして霧の幕が座敷を包む。遙に湯殿に人聲の響くのが、大池に鶴の鳴く氣勢。行く秋の夜が身に染みる。

婦人も美しく猪口を含んだ。

「ぶら／＼土手を行くと、道が橋か、橋が道かと云ふ、薄靄のかゝつた夕月。あの、白鬚橋を渡つて見よう。丁ど雨上りの水が眞白で、潮がたつ／＼と満ちて来る、それは、明月を迎ふるための流るゝ街道。橋に乗つたら船のやうで、嘸ぞ……佳い景色だらうと思ひましたが、最う渡ると橋場は町です。歸るに惜しい。

で、土手には薄、田には蘆で、明い欄干を附けた、月夜の橋かと思ふ畦道らしいのを歩行いて居ますと、ふと、足許の草の上へ、ひらく／＼と映つた、と思ふと、薄へかゝつて、穂摺れに颯と薄墨を散して、そして空へ消えて行く、五つ七つ斜に連つた影があります。あゝ、雁が渡ると、思つたんです。

が空を仰ぐと、高い樹も、遠くの森も何にもない。……其の鳴く聲も聞えないで、却つて、鐘ヶ淵あたりのポーと云ふ汽笛の音が、刈田の水に響くんです。萩も蘆も、さら／＼と戦いで心細いつたらないんです。

又はらりと映りました。矢張り草に散つて、薄に亂れて、すつと消えます。其の影を辿つて、空を見れば月ばかり。ひらく／＼と直ぐ影が映します。ついでに誘はれ、誘はれて、紅夢園の門の、小川まで行つて、あの薄白い船の底を渡したやうな橋の上へ、其の影が、又はら／＼と映つた時、女の袖が六つ七つ月に描かれた風情でした。

尤も、其處を紅夢園、とも、貸席とも、お茶屋とも、別荘とも、大な植木屋の庭とも知らないんです。

私は、夢のやうに誘はれて、其の影の映りました小橋の中ほどへ、……崖の釣橋を踏んだ氣で立ちました。

又、映りました。今度は向うの木戸の處……袖が揃つて招くやうです。勿論、其の招くのは月でせう。が、私は浮り渡りました。

葛 紅
草が數へられます。三味線草も犬蓼も、猫じやらしの穂も、裏へ銀を染めて、すつきりと、露に伸びて居ました。其の雑草の路が、やがて兩側の萩に代つて、其の花の中に門、葉がくれに扉がある、それが、開いて居たんです。

幽に木の葉、草の根を透して、露に濡れた灯の影が遠くに見える、萩の葉を渡つて、優しい鳥の歌ふと思ふ、若い女の聲がする。遙に飮するやうに。

それが、唯、聞えるのに調子があつて、四五人で調子を取つて、唄を唄つてゐるらしいと思ふと、軽く砧を打合す足拍子が、近く白玉の露を轉がしました。

見たくつてなりません。素面です。怪しい支度です。右の面目もない手巾のすつとこ被。……自分申譯をすれば、魔に魅されたものかも知れません。雁の影、袖の影は、もう其切、目に遮らなく成りました。

が、當人は潜込んだ。樹よりも高い萩がある。時々、はつと顔に蓋して、驚かすのは大輪の芙蓉の花で、關守らしい大木の松が一株。月の築山の峠を越すと、蘆を透して池が見えて、鏽びて居ました。緑青色の萍へ、鯉か、鯉か、白い水足を引くたびに、月影が、處々眞青に結ばれるんです。

渺と広い。其の水の向うに、霧を研澄したと云ふ燈の障子が長く、咲亂れた秋草を浮模様に戻に裏透く中を離れ、藤棚がありました。葉は落ちたが竹が明るい。其の間を汀へ掛けて、月を前にし、背後にし、影を透し、光を浴びて、同じくらるな春恰好、腰の細いのが髪を、黒く、爪尖を眞白に、庭下駄のなりで、すらりと七人、ものは知りませんが、袂を揃へて踊つて居ました。

此だ、此の影が、流る、白銀の絲のやうな月の光に誘はれて、雁の姿に宿つて、萩、薄、蘆を渡つて靡いたんだ。

私は見惚ながら、人の居ない、灯もない、一棟離座敷の、開いたまゝの濡縁へ、腰を掛けて茫然して視めて居ました。

目の前に梅の樹があつて、仙人が杖を投げたやうな其の差出た枝に、武藏野をのぼる明月は、摺々に、其處へ来てイむ……臺に成る。……金色の薄雲は、枝に袂紗を掛けて居る。向うに踊る女たちは袖の運びの一人々々、順に胸へ、影染む乳へ、其の月を抱く。……縋る。……招くんです。……あ、何の唄も戀であらう。慙うした時は遺瀬がなからう。春の花に結んだ心は、秋の月に解けて、白銀の光に流れて、膚も消えて、大空に魂ばかりあこがれる、其の魂が雁の影を遠くへ映して、萩より柔に、薄よりも細く靡く。帯ばかり、袖ばかり、衣服ばかりが踊ると見える。風が吹いて、ふつと消えはしないだらうか。いや、然う云へば自分は何うした。夢を見て居ないかと心付く、と枯枝の中に落葉が掛けた四阿が、草深い中に見えて、其處を池なりに廻つて、あの藤棚へ續くらしい。其の四阿の中に——ふつと立つて、大なる兎の影が見えたんです。

葛 紅
「兎の影を……待つて頂戴。」

婦人は一寸言を入れた。

十

「あゝ、貴方。」

と向きかへて一膝寄つて、

「それは、四阿に洒落に置いてある、張子の大きな招猫なんですわ。ねえ、兄さん。」

「しかし、お話の様子だと、其が兎で、池の波を渡つても差支へありません。——當夜の主人で、

現に、その藤棚の中に、一人で立つて視めてゐた私ですが、今伺ふと、何うか、其の時、月の中

にでも入つて居たやうです。お庇で、おもしろい月見をさして頂く、貴方、お杯を。」

「まるで召上らないやうですが。」

「少しも飲けません。が、杯を持つべき處です、きぬちゃん酌をすべき處だね。」

「はい、はい。……先生それから。」

「いや、後は貴方がた御存じの通りです。」

突然わつと云つて絶叫したものがあつた。私も驚いたが、先方は其處へ尻持をついた。慌てて遁

げようとすると、蹶然立つて、や、此の泥棒、——で獅嚙着く。瘦せては居るが、逞い、脊の高

い爺様で。」

「紅夢園の風呂番の嘉一爺や、夜廻をした處。ほゝゝ。」と笑ふ。

「親爺は幽霊だと思つたさうですよ。」

「幽霊?……」

と謙介は興覺めた顔をする。

伯は微笑んで、

「それはね、紅夢園がまだ現在の女主人の手に入らなかつた以前、ある人の別荘だつた頃、月の

い、晩、秋草の中を二人で忍込んで、然も、あの亭の壘を裏返して、其處で情死をしたのがあり

ます。爾時——お座敷を拜借する。相濟まない次第ながら、お庇で、いゝ心持に死ねます。舞臺

の氣がする、蟲の聲は清元の出語りだ——つて意味の遺書を残しましてね。情死は眞個に了つ

たんです。

其の遺書が傳はつて居ますのを、今の女主人が、……悟つてるから、額にして、あの亭に掛け

て置きます。しかし、女どもは薄氣味を悪がります。

其處の縁に、貴方が月あかりで薄りと描いた繪のやうに……なぞつて素人の癖に……まあ繪の

やうにです。蒼白く、さうして、寂しく、胸を暗く、腰を掛けておいでだつたさうで、的切、幽

「靈。」

「ぢや、立直つて組着いた時は、狸と見分けが付いたでせうな……」

と謙介も苦笑して、

「二つ三つ揉む間もなく、頸首を壓へられて、梅の根へ膝を支いた時、いまの、あの兎の幻に、驟然と重なる女の姿。袖が、薄い雁の影で。池を廻つて、駈出して來なすつた。其の時ちらりと見た顔は。……此方は、すぐ俯向いて了ひましたが、忘れはしません、此處においでで……なんですよ。」

婦人の瞳は艶かに輝いて、ふと俯目になる謙介を見た。

「續て——危いよ——危いよ——響いた聲は、清い男性——それは伯爵、貴方だつたと今思ひます。」

ト腸に月の雫の染むやうな、爽に、うるほひある、優しい言葉がかゝつて、冷いが、軽く、もろい、霧の袂が、此の肩に。」

と身をしめて、謙介はやり違ひに、しつかりと。坐つた丈も高く見えて、

「其の人の手に、ほんのりと籠の雪洞があるので、頬被の上へ、袖を被つて窺ひました時、——

(草の花は咲きましても、月に枯野の一軒家、枝折戸も結びませんから、道にお迷ひなすつたのです。出口をお知らせ申ませう。女郎花、刈萱も折添へて持ちません。風情のない、草刈女が、山路の御案内、さあ、おいでなさいまし。——)

で、ひよろくと成る奴に、茂つた萩と、衝丈の肩を貸して、支へるやうに引添つて、籠雪洞の棲摺れに、はらく白露を別けながら、蜘蛛手の池の落口を月影に渡つて迎ると、入つた時より近路で、

——お静に——

此方は、とぼくとしながら、空の月より、蘆葉がくれの、雪洞を、抜出した自分の魂かと思ふ、振返りく、……やがて一散に駈出して、白鬚橋の欄干に、どうと成ると太息を吐いたんです。が。——

あゝ、矢張り、助けて下さつたのは貴方でせう。」

「否」と細い煙管を膝へ、

「口惜いけれども、其の立女形は私ぢやないの。……私の姉さん、……」

「紅夢園の女主人でしたよ。」

「即ち……でせう。兄さんのお氣に入り、……」

「きぬちゃん、お黙んなさい。あわてものの、お先ばしりで困ります。ですから、一はながけに、亭へ駈出したのは此女でしたよ。」

「仕出されたわね、……尤もお月様に浮かれ出して、出たらめ踊の音頭取は私だつたの、なほ悪いのね。」

と仇氣ない。

十一

「一晚、死んだもののやうになつて寝ると、さあ、目が覺める。朝日と一所に、昨夜の雁が金色の翼を擴げて、引窓から飛込むばかりで。」

感興神來と云ふ勢です。……其の癖、商賣往來で、筋骨を刻込んで、次手に女房の衣類を殺して、半年ばかりかゝつて居ました。もう出来上らうと云ふ、其の展覧會の畫が、忽に可厭に成つて、打棄つて、あの雁の影に誘はれて、女の魂が月に流れて、姿が冷かな光に溶けて、氷蠶の錦、袖六尺。五つの木の薫を散らして、空蟬の衣ばかり。七ふり揃つて、花野の中に舞ふ處、天の意をうけたと思ふ。其が描きたくつて成りません。

氣が狂つたと、人には笑はれ、魔が魅した、と女房には泣かれながら、目を瞑つて遺直しの仕

事にかゝつて、其のかはり、寢食も忘れしました。お恥しいが、此は事實です。」

と冷く成つた猪口を嚙んで、惘然として、

「身も魂も、紫に赤く、血を白く青く注込んで、前の試は半年滯り滞つたのを、これはたゞ十日くらの。其處で描上げたんです。——今更其の畫も語りませんが、口で言ふと尙ほ馬鹿々々しい。

手も足もない。衣類ばかりで七つ舞ふ。これを墨で淡く、月夜にひらくくと映る雁の羽が、舞踊る衣類の影に成る。此の影の方を極彩色で、首は雪よりも白く翼は虹よりも濃いのです。蒼空の月は、舞ふ女の、戀です、愛です、憧憬です。薄雲の靈變く、それ等一つ一つは、女の七つの魂でした。

空腹に杖を支いて、車のあとに引摺られて、ポンチですな、締切の日に持込む途中、雨に逢つたが、暴風雨のはじまり。——いや、素晴らしく落第です。

打棄つてくれるのが情だけれども、落第した絹地は、會場の芥埃で、掃除をする小使が迷惑します。仕方なしに骨を拾つて、塔婆握りに上野の山から掴んで歸ると、——女房は里へ遁げました。

葛 紅

媒妁人と云ふ橋があれば、箆笏を提げても渡られます。仔細はない。尤も、よく、それまで辛

抱したと思ふくらる。」

「お小兒のは。」

と婦人は急に聞いた。

「僥倖にないのです。但し子がないからつて、別にお腹のたしにならない。餛飩ばかりぢや凌げませんし、第一、世間に面目なし、丁ど世話をするものがありましたから、其處で地方へ駈落です。教師にお雇を被りましたのは、千葉縣の或中學校です。」

——雁先生が粟を喰ひにござつた。——

生徒が黒板に白墨で、れい〜と書いたもんです。

餘り馬鹿げた晝だつたので、何か新聞でも冷評したんでせう。風説はもう知れて居ました。…

…寧ろ名譽です！」

と、魂が抜けたらしく、落膽、卓子に胸を折る。

「噫、口惜かつたでせうね。」

思ひきや！ 衝と薄紅梅の、袖口が目を蔽うて、雪なす頬が、半襟の藤に差俯向く。

思はず此方も、誘はれて、ほろりとしたが、やがて、膳を衝と除けて、

「何うなすつた！ 何う？」

謙介は、自分では婦人の瞳を晴させ得ないで、顧みて伯に迫つた。

伯はそれでも微笑みながら、

「いやお察し申します。それと一所にしては失禮かも知れませんが、此女もね、矢張、藝の事で舌を嚙切りたくらる口惜い事があつたと云つて、それがために自棄半分に、此處へ飛出して来たんださうです。先刻トランプの前に、一寸愁歎場がありましたよ。…否。まあ、それは後で。」

貴方は、で何うなすつたんです、貸廣袖の形で、箱根の夜道をなすつたと云ふのは？…」

十二

實際、彼は性の知れない、廣袖に三尺で居たのである。

「此の上の強羅の丘の家、…昔の建場と云つた宿で、借着をしたのを、着遁をしました。勿論、洋服を着換へたのです。小田原へ出たら、古着の袴でも買込んで、そして、送り返さうと思ひました。」

と謙介は言つた。

「實は、學校の上級生が、此の箱根へ秋季の遠足、武装して行軍と云ふに附いて参つたのです。」

今朝塔の澤を出發して舊道をつつと……蘆の湖から、權現の御宮を廻つて、大涌谷を越えたのは、午後二時頃でした。

猛者も健兒も英雄も多い中に、私なんぞ衛生隊です。左の腕へ青い切を巻いて白十字をつけたんでしてな、同僚の會計が一人、學生の中から一人、と都合三人。大涌谷から先發して、晩の舎營の準備のために、すた／＼岨路を故道つたひに此の宮の下をさして下つて來ました。

山家二三軒、柿の實の色着いたのが霧の中に遠く山の端に見える。一箇所、路傍に古池を取巻いて、なぞへに滑つこい柔かな窪地がありました。實に……其處の薄ほど美しいのを見た事はありません。白い膚が光ります。月の宮の蠶の絹を、銀の箴で雪に織つた羅で、二本揃つたのがあります。一本分れたのがあり、三穗摺合つたのがあり、すらく／＼と手許に靡く、ちら／＼と揺れる、揺れるのが、ものを云ふ、靡くのが、歩行くらしい。……で一つづつ、生きて、呼吸して、豊艶したのが乳かと思へば、滑らかなのが胸かと思へば、細りとしたのは、咽喉です、頸です。長みを持つたのは圓い肩です。そして残らず顔です。皆裸體です。

中には白粉刷毛を持つたのがあり、紫の花を翳したのがあり、眞紅の玉を飾つたのがあり。……或は、手を組み、背を合はせ、抱き合ふ、絶る、縫合ふ、離れて下草の石に伏して寝たのがあり。追つかけるのがある。遁げるのがある。腰をついて蒼空の雲を見るのがある。瑠璃色の天に、

折から薄曇つた、白い一團の雲は、此の女達の影が倒に大きく空に映つたやうです。

池の水を浴びるのでせう。それへも、ちら／＼と姿が映つて、その膚に、湯の煙かとも思ふ、冷たい、薄い靄が靡いて見えました。が、どの姿も濡れたとは見え、涼い山氣と、透通つた、空氣の中に、唯艶々としたものだったのです。

——あ、彼處に綺麗なものがある——私は思はず聲を出した。會計と學生が引返しました。

其の池の縁に、薄の根に、いましがた何の胸を迂つたらうかと思ふ、扱帯が一條。燃ゆる錦、眞紅な蔓で、池の影に紅を解きます。

——やれ……それを取つては成りませぬぞ。……
笏かと思ふ大聲に呼掛けて、上の岨に肩を見せたが、背負梯子の薪の山で、觀音經を手に讀みながら、山爺が顯れました。

息杖をかつて、えんや、と仰向けに腰を伸すと、赧ら顔の口を開いて、……
伯と婦人は言合したやうに、目を注いで見た。謙介はや、酔つたらしい。

「其處で其の爺が話した所説があります。爺が、現に見て知つて言ふのですよ。——」

「三年前の秋の末だと言ひます。同じ此の間道を、大涌谷の方へ、之は宮の下から駕籠で上る、五人連があつたさうです。……」

其の三つ目の眞中の駕籠に、美しい娘が乗つたが、石ころ路を仰向けに、眞俯向けに、急な上り下りで駕籠が揺れて、着崩れがしたのか、斜違に雁に行く乗物を落ちて、緋縮緬に菊の花の縫模様が、長襦袢の片袖が、まるで八つ口から這つて、しつとりと、地摺れに薄を行き、木の葉を通ふ。人数は、しかし汚い駕籠舁の揃へた十本の息杖は、たゞ一つ其の片袖を漕いで、大空に行く權のやうで。爺は、ともすれば駕籠舁どもの肩に隠れ、毛脛に紛れる、其の美しい片翼に、颯で梶を取つて鼻の下を伸ばして見ながら、ちやうど、空身だつた足を爪立てて、うか／＼とついて行つたさうです。

額へ打附りさうに、後の駕籠がストンと留る。前のも、其の前のも、順に留つたさうです。

唯、少時すると、ひやつ！ わつ！ と云ふ人聲。どや／＼と寄る人、立つ人、覗く人、緋の袖を包んで重合つた。が、其の娘に別條があつたのぢやない。駕籠舁が一人千仞の斷崖へ落ちたのですつて。」

「え、。」

「いや、其は。」

「……それが、底も知れない、巖石の磊々とした谷を、黒雲の空逆に、草鞋の裏で宙に浮いて、下へも落ちず、足場もなしに、切立の崖へ、横生えに成つた檜の樹の枝を掴んで、ぶらりと釣瓶で架つて居る。

娘を昇いで居た先棒で、元氣屈竟な若い者だつたさうです。

其の檜の木に、細い蔦が、可愛く色を染めて、それは／＼美しく搦んで居た。娘が根ごと欲しい、と云つたので。……おつとまかせ、御意なればで、右の先棒が、樹を抱いて、谷へ乗り出して、枝に搦んだ梢を解ぐして、密と手繰り寄せたまでは可かつたのです。……無理に引張る、と根が切れさうな處から、樹の根を柱に、撞木乗で、草鞋をつい／＼と踏んで、崖の縁から、身體を離して、洞搜りに眞俯向けに根を掴んだ。あ、危い、危い。……よして頂戴……と其の娘も云つたのに、こゝを先途と矢表に立つた意氣組。まつたく——（生命を斷つ斧）——でせう。……美さに目が眩んで、もう一息と引く拍子に、足が這ると其の始末。然も幹を離れた枝に縋つてぶら下つてゐるのですから、足は伸ばしても崖へ届かず、手は揺上げて本木は抱けない。……容は驚く、棒組は呆果てる。

助けてくれ、身體の重量で腕が切れる、と喚くんでせう。……其の爺も、出来ない相談に預つた、と言ひますが、如何とも手の施しやうが無かつたさうです。……

よく、其の瞬く間に、白髪に成つて了はなかつたと思ふ、……蒼く成つた顔を颯と眞赤にする、と、先棒が、臨終の願望だ、何うか、お嬢さんの紐を解いて頂いて、その端を樹に結んで投げてくれ。……それに縋る。尤も切れよう、助るまい。が、決して思ひ置く事はない。何うせ、ひと呼吸の間も堪らない、腕が抜けて落ちる——と言ふ。

娘は帯を解いたんです。

棒組が、ふるへながら、樹の幹へ、扱帯の端を結着けるのを、熟と視て、小塚山、金時、足柄を前に、神の山、大ヶ嶽を背後に、上強羅の峯に立ちましたつけ。……娘は、目に一杯涙をためて、

——切れて落ちたら、私も飛んで死んで上げます。駕籠屋さん、確乎おし、——

冷い風は、燃立つやうな木の葉を揺つた。

駕籠昇は無事に娑婆の端へ吸附いたんです。

驚くぢやありませんか。と肩を入れると、息杖を丁、すたくくと駕籠を昇き始めたつて云ふの

ですがね。娘は、わがねて、白い兩手に血のやうに戴いて、あとの其の扱帯を、同じ谷へ、風に

まかせて投げたんですつて——」

十四

「さあ、其の時は、赤い鳥が隠れるやうに、斷崖の木の葉に消えたんださうですが、後で日を代へ、月を代へ、年を経、時を違へて、彼方、此方、所々、場所を定めず、其の下締を爺も見掛ける。……

霞の中に山櫻の枝に掛る事もあり、紫の山藤と共に枝垂る、折もあり、燃ゆる躑躅に色を焦せば、月草の清水に丈を冷す。解けて撫子と添伏しもすれば巖石の角に朝日を結ぶ。山かつら、夕月夜。

風が乗せる時もあらう、水が誘ふ時もあらう、山鳥が尾に引いても行かう、兎が耳に掛けても飛ばう。

一度などは、荷擔夫が二人連で通りかゝつて、つい路傍の草に、同じ下締の落ちたのを見て、目の色を代へて拾ふと、小半町歩いた時、ふと一人が聲をかけて、有りさうにもない魂消た紐だ、怪しい、禁厭であらうも知れぬぞ。其事……と吃驚して、手を拂いて、ふつと吹いて棄てて、あとをも見ないで過ぎたのを、様子を知つた草刈の娘が見たと言ひます。

一所に死なうと誓つた情で、其の美しい人が、義のために、駕籠屋に捨てた、血です。眞紅の玉の緒です——名所の魂です——山神の装飾、女體の帯である。活きた山の主である。

——むざと手を着けては成りませぬえ。——

此を……爺が話しました。……

私は自分で、其の意味を其の時間ながら思つたまゝに、いま受け継いで申しますが、あの、背負梯子で薪を背負つた山袴の爺が、もくもくと日南で其の魂の穂が女に成つて、ほろ／＼と白く遊ぶ、……大勢の薄の前で、現に緋の絞の一條に向つて話した時は、もつと強い、激しい感動を與へられたのです。

ですもの、先鋒の一部隊勝利抜いた健兒を、非職上りの陸軍中尉で、體育の教師の率ゐたのが、旋風の如く黒く成つて追着いて——何だ、何だ。——

どや／＼と取巻いた時は、私は眞直に突立つて、汗を流して、落ちた扱帯にいたづらするなど、遮つて留めました。

爺の言ふには、あは／＼笑ひ、私には、くすく／＼笑つて聞いた。——會計ど、も一人の學生は、しかし何とも言はなかつたのですが。——

——武士道のない國の話ぢや、俺が掴んで禪に締めたる！ 小隊分捕れえ。——

五十くらゐで、まだ眞黒な髭が鼻の下に反返つて、針金のやうな白髪がバリ／＼と交つたのが喚くと、健兒が先を争つて、靴を踏込んだものですから、私は仰向けに其の帯を背に敷いて、踏り返つた。

行軍ですから、皆銃を持つて居ます。發火演習、装薬がしてある。……此の一隊三十九人、將軍の命令で、伏撃に三十六挺、半圓を描いて、櫛の齒の如く銃口を揃へて、私を狙つた。一齊射撃、——撃てい、——

いや(雁先生)これには粟を喰ひましたよ。

謙介は苦笑した。女中が膳を引いた。酒のみを彼に残して。

十五

「今しがた見て通つた、大地獄の煙の中に、わつと聲を揃へて、笑つて、行進を續けて行つた。私は目を瞑いで居たんです。……背に敷いた、帯と一所に、其の青い池の水の底に落ち込むやうでした。

餅が留んだよりか、寂寞する。はら／＼と、薄の穂の摺合ふ氣勢が、其方此方で、

——おほ、——

――擦の、――

少し離れた處で、しくしくと泣く聲がする。

――疼い、擦らうかい、――

――誰かお遁げだよ、――

――白い背中が、すつと行く。

――まあ倒れてさ、――

雪の胸が、なよ／＼と伏す。

――あゝ、煙かつた、――

――お起きなさいよ、――

私は寒く成つて目を開けました。寝ながら見る。空の雲は、あの白いのが、大きく成つて、鷲の翼のやうに暗く覗く。

降つて来たやうに、ちら／＼と穂が散ります。敷いてる帯が動くらしい……私は衝と立つて密

つと出ました。そして、一軒家の燈をちらりと見る心で其の赤い紐を一度見ながら、すたく／＼と

急いで……急いで……と云つて、さて、行く處ですが……

私は、ふん反つた時、もう、其の、唾へ落ちて奈落の中途にぶら下つた氣なんですから、駕籠

屋のつもりだ。馬士、旅藝人、勝手次第だ。

家はなし、しかも三男です。……何の憚る處もないが、学校の連中には顔を見られたくないの

です。尤も人間恠う成つちや極りが悪いも面目ないありませんが、校紀振肅なんのつて、悪く

捕虜にでもされて袋たたきが可恐しい。忍んで箱根を抜けようと思いました。

が(地獄へでも)と申しました。殺されるより怖い、いま時、雷が鳴らうとは思ひもかけず、

元來、眞黒な山の頭が、青い火を噴くのに目が眩んで、三島へ越えて、すぐに東海道へ流れよう

とする足許を取違へて、塔の澤へ轉がりました。――次第なんです。

お庇で、空も晴れました。

一體、私が、會計と今夜の旅宿を掛合に來た途中で、ぐれたんですから、学校の連中は此の新

屋か、底倉の蔦屋あたりか、まるで、それを知らないで廊下も針の山でしたが、それも違つたの

が分りました。

一風呂浴びて、それから引下つて駕籠屋と寝ます。……御恩は忘れません。」

とハタと手を支いた、が、山氣冷かに肩寒く、廣袖の衣紋爽かに意氣頗る昂つた。

婦人の眉は凛として、脛が曇るかど瞳を濃く、且つ艶やかに彼を見た。

「此處の廊下に萩はないのよ、今夜は籠の雪洞でなんか送つて上げません。お約束の、私と地獄

へ行く途中、……あすは、その薄原の扱帯を見せて下さいな。」

「願ひませうね。私も一所だと可いが、實は、今日です、お話の道筋一巡りして歸つたばかり、御覽なさい。澤山路草をしながら。」

と云ふ。

床の花瓶に、野菊、龍膽、此の貴公子の鳥兜、狩衣なるべし、藤袴。

「駕籠昇とお寝みなさる程なら、私たちとねえ、きぬちゃん。」

「申戯ではありません。……山巡のお供と云つたつて、まだ駕籠は昇げません。あの、故道の石塊を、御婦人には歩けますまい。」

「姐さん。」

婦人は笑ひながら、其處へ新しい煮花を運んだお民を呼んで、襟の、先刻の紙包を解くと、

「これを細かくして下さいな、銀貨。小さな金貨が交れば尙ほ結構よ。」

お民が妙な顔をした。大枚な紙幣であつた。

「金米糖と薄荷をお茶うけに、寝るまで何かして、遊びませうね。」

十六

遊戯は古歌の六歌仙、六首かながき六角で、簪の耳くらる、象牙細工の小さな獨樂。

業平、小町、喜撰法師、其の六人を六つの札の、おなじ象牙の彩色繪で、一組に、女の中指を切つた程な、白い小函に紅梓で入つたのを、婦人は蝦夷錦の娘らしい紙入の中から出して、伯の

枕頭に、一寸並べて、謙介と二人、それは褥で、晃々とした電燈の下。――

それまでに、三人が一度温泉に浴した。伯は按摩を取つて、寝ながら相手になると云ふ。其の

按摩が来て、搔卷越に。……按摩は天井を睨み、専ら揉む。

婦人はもう寝衣に着換へた。……藍と茶の辨慶の縮緬浴衣を、透通る素肌に緩く、其の紅梅に

簾の雨の伊達巻で、大島お召の羽織を掛けた。湯上りの色くつきりと、櫛巻の水際立つのが滴る

ばかり艶である。

其の膝へ、……いま獨樂を出す次に紙入から、金貨の小粒なのを十二三、ぱらりと置くと燦

と輝く。……

「此の分は、私のお菓子。」

伯は夜具の襟から腹這の顔を擡げて、

「豪いな、きぬちゃん、頂戴しようか。」

「え、成らば手柄に……だわ。ねえ、先生。」

謙介は驚いて唯傾いた。

「泣くなよ。」

「何うせ、お兄さんに頂いたんだわ、いつか。……さあ此も、……金米糖と薄荷ですよ。等分に分けて——お兄さんは、蒲團の上。」

「可し。」

「貴方、疊へ置くと汚れますから、此方へ。」

とて白紙を。

「廻りますよ。……瓜紅の尖は其の獨樂の心より華奢である。」

「俺は坊主だ。」

謙介が、

「小町にませうか。」

「え、御隨意。……私は業平……あそんは不可い。……大將よ。……」

夜は十二時を半ば過ぎた。……獨樂は歌の斑ある胡蝶の翼た、くが如くに廻つて、はたと留まる。

「此は御馳走、……」

「構ふもんですか。」

「でも私の分。」

「さあ、續いておいで。」

蝶の翼は、音もしないで、花片を吹動かす。

「按摩さん。」

婦人に唐突に呼ばれたので、「はつ、」と云つたが、密と覗込んだ顔を著しく反方向に向ける。

「按摩さん。」

と見向きもしないで、獨樂を凝視めながら、もう一度呼ぶと、

「は、は。」

と膝を捻つて、俯向けた顔は、への字なりの口の大きい、目の圓い、垂眉毛ですべりとして、頭を角に刈つた奴。

「お前さん、見えるのね。」

「え、僥倖と片目、……へい……」

「道理で、じろりと見た處が凄いわ、——あ、今度は先生、坊さんだわね。」

「飛んでもない。——へ、へ、」と向う向きに背いて、三つ莞爾つて三つ顫を刻んで、三つ肩を揺

つて、三つ膝頭を刻む。

「兄さん、私よ、金米糖。」

「差上げますよ。」

「按摩さん。」

「は。」

「名は？」

「あ？」

と仰向いて聞返す。

「名は何て言ふのよ。」

「横淵元琢と云ふんでげして、へい。」

「立派ねえ。」

「え、恐れ入ります。」

「さあ、了つた。……これは弱つた。今度は大いよ。」

「運が向いて來ましたぜ、……御免。」

と謙介は胡坐になる。

「油断をしちや不可ませんよ。貴方は素人だから。……ですがね、按摩さんや、……元琢さんは可いけれども、横淵は可厭ね、何だか岡引のやうだわ。」

「飛んでもない、……御申戲、えへ。」

「今度は。」

「小町よ。」

「さあ、持つておいでなさい。」

「矢張り私が。」

「また、小町。」

「可し。」

獨樂は颯々と唸を生じ、薄荷が金米糖を燦々と包んでは、さら／＼と卵の花に黄金の蕊の翻る如く、謙介の袖を包む。

「矢張り、……先生……勝。」

「可し、みなに成つた。きぬちゃん、私の紙入を。」

伯は獨樂を見ないのである。謙介には、迅くて獨樂が見えないのであつた。

「眞平御免を。」廊下つたひに、夜中、見廻の弓張提灯、當旅館の番頭、及腰に座敷へ。

「唯今、御申附けでございしました。二度目の其のお菓子でございます。……帳場に用意のありましただけ、其の金米糖と薄荷をこれへ。」

と金齒をちらり。

「さあ、御註文が来ましたよ、兄さん、兄さん。あら、お寝つちや不可い、兄さん。」

「代理を頼むよ。」

「それも現で、伯は、もう、すやくと寝入つたのである。」

「大分、おほぐれに成りましたで。」と言ひながら、元琢は、じろくと謙介の膝を覗む。

番頭は、首實驗の如く、提灯を眞正面に控へながら、

「御前は、今日は大分お草臥れ遊ばしたやうでございます。」

「もう、片附けませうよ。」

で、謙介が手で寄せると、ざくざくと音がする。其を聞くまいとか、元琢は獨りで頻りに頭を掉つた。

「お待ちなさいな。起さなくつちや、お兄さん。」

横坐りの弱腰が伸びたと思ふと、伊達巻が颯と鳴る、裳が揃ふと、翻然と宙へ浮くやうに見える、棲は隠れた。媚く肩が、白羽二重の搔卷の裏に這つて、ト黒髪を上げた姿は、凄いまで美しい。

「兄さん。」

弟に添臥す如く、可愛げに、伯の優しい寝顔を覗いて、眉をすつきりと鼻筋の通る時、其のおくれ毛（——あとで知れたが、仔細あつて、或座敷で、伯の政敵の何某に、其の名取りの踊を、侮り嘲けられたために、豫て姉への義理で、伯に我が思の叶はないのに、身をはかなんで居た折から、箱根へ死なうとして来たのであつた。——）が露を誘つて、はらくと。——
唯見ると臺の重いやうに、あのハアト形の肘を白く、横顔を、や、蒼澄んで支へながら、かくりと、投げるやうに外した腕は、雪の如く謙介の前の獨樂に伸びた。

「さあ確乎なさいよ、兄さんのかはりに取返す。」

「番頭さん、番頭さん。」

葛 紅
「按摩が伸出して呼んだが、番頭は、前垂に行儀よく突膝の掌を組んだまゝ、大に、抜衣紋で額越に見惚れて居る。」

「え、番頭さん。」

「あ。」

「貴方も嫌ぢやがせんな。……目の毒でげす。」

「いや、腹の毒です。冷えますからな。」と、たゞの夜番で寂しく出て行く。……

「やあ、何とも。」

と元琢のひれ伏す途端に、婦人は衾の錦の森、白羽二重の霞を抜け、……次第に謙介の前に堆く成る金貨に惚けて、按摩の手が伯を揉越して、柔かな肩に這つたのであつた。婦人は耳に掛ける様子もない。

「まあ、……口惜い、又……」

「來給へ。姉御。」

「姉御は酷いのね。」

時に療治を済ました元琢は、三つぶるくと手を握つて、居直つて、がつくりと成る。で、頬を横にして片目で見だが、凡そ堪らなく成つたらしい、じりりと膝を寄せて、凝と撓めて獨樂を視た。

「また、貴方勝よ。」

「難有い。」

「こりや、無茶だ。こりや無茶だ。……奥様は獨樂に構はず、たゞ此方の旦那に進げなさんだね。」

謙介が、愕然として、夢のさめたやうに顔を上げた時、あらう事か、慌てて手の甲で遮る間もなく、金米糖と、薄荷のために、木天蓼の涎を垂々。

其が婦人の手に落ちた。

眞赤に成つて元琢が退いたあとで、婦人が艶麗に笑ひながら、

「もう一度湯に入りたい。……一所に来て頂戴、可恐いから。……否、金米糖は可いの、お兄さんと、トランプで相談済ですわ。」

……で連立つて猿の湯へ。

十八

葛 廊下はづれに按摩が立つて、薄あかりに顔ばかり、此方を振り返つて變に笑つた。其の唇が大な、なめくぢに見えて、遠く、山の石段を傳ふやうに、間近な裏梯子を下りる。……草履の爪尖は、

ちら／＼と霜を散した。

下口に、……來かゝつて、お民が立つ、——片除けつゝ待つて居た。

「姐さん、お銚子を。……淡泊したもので可いんです。」

「畏りました。」

浴室は遠くはないが、夜半の燈に、暗く且つ深かつた。……

婦人が一寸立止る間、湯殿へは一步謙介が早かつた。彼が、さそくに廣袖を脱ぐ時、……袂に提げた手拭より、なよやかに入つて來たが、黒塗の衣桁の前。

横の壁に掛つた姿見を、ふと斜に視て、

「色が黒いわね。……薄り寝白粉としませうかね。」

「按摩が片目で覗きますよ。」

「可厭！」

「此は、失禮。」

と、うしろ向きに温泉の中。颯と湯氣の靡く間があつて、

「先生。……お化け。」

「男だ。可恐いもんですか。」

「先生。」

「雷様でなくつちや——窓の外は月夜です。」

「否、薄のお化に見えないこと？」

と、白雪の、鼓を縷る紅の調。一本薄に掛る緋の葛。婦人は、伊達巻の紅梅を、はらりと頸に掛け、腕に捲いて、片端を銜へて、夜霧に、乳房がすき透つた。

「私なのよ……駕籠屋に解いた下締は。」

玉は溶けて、滑かに湯の脈に染む。……溢る、煙は婦人を誘うて、純白な玉の緒の穂が揺れて、流るゝ如く影を導く。

十九

伯は、胸泰らかにすやくと眠つて居る。夢は維也納の麗姫であらう。

「兄さん、唯今。」

婦人は跪いて、襟を叩いて、そして來た。……

別の座敷の、襖の隔を左右に開いて、伯と枕合はせに、同じ衾を並べたのである。

二つばかり盃をやりとりして、更めて、謙介が名を尋ねた時、婦人は被いだ搔卷を肩迂りに、

片袖を取つて、ト横にした。小枕淺葱の塗面に、はらりと敷くと、右手に黄金煙管の細いのを取つて、柔かに丁と上げた。氣は籠つたが、葵の上の鐵杖ならず、玉川の調布である。嬌然として、

「砧」

硝子戸越に、端山の雁がね。

婦人の名は砧であつた。

鈴川の音も、ふと絶ゆると、七つの棟は皆眠つて、名が聞ゆる名が聞ゆる。仙石の里の遠砧か、否、月は細し、丑満時、宮ヶ嶽には神遊ぶ、笏を返す鼓であらう。

「明日は彼處へ行きませうね。」

彼方の床なる鳥兜を、藤袴を、其の龍膽を、——其の狩衣の、紫に交る野菊の白さは、伯の寢顔を装つた。

「何處へでも。」

「地獄へでも?……」

「お易い事です。」

「峠の上へは?」

深い淵へ臨むが如く、瞳の下に酌を受けつ、

「勿論。」

「貴方、駕籠屋さんぢやなくつて?」

「……………」

「まあ、私の云ふのは、其の時、峠へ落ちた駕籠屋さんですよ。」

「其の駕籠屋。」

「え、現に此の新屋に居ますわ。先刻、貴方が駆込んでお出でなすつた、夕立に焚火をして居たつて、……門部屋の、あの夥間に居る筈よ。」

「や、其奴は、其以來、平氣なんですか。」

「平氣處ですか、——暢氣なものよ——尤も峠から上ると、直ぐに、しやんくくと駕籠を昇いたくらるですから、然も其の日ぢやありませんか。大涌谷へかゝらうとする、巖の上で、銀の簪を拾つたの。……其の先棒がですよ。然うすると後棒がね、……」

「鼻の若い奴は運がいゝぜ。轉んでも唯は起きねえたア汝だ。——」

「難有え、其の通り——」

「恠うなんですもの。十八だつたわ、私、口惜かつたわ。私のために谷へ墜ちて——其の紐を解

け、おもひ置く事はないつて——自分で言つては可笑いけれども。……何よ、もしか、それが切れて落ちて了つたら、私、眞個に一所に飛込んで死んで遣るつもりだつたんですね、……」

瞳の露は夢を見た、……あの狩衣の俤を視た。

「女の心ツて徹らないものね。」

「眞個、死なうと思ひましたか。」

「え、何時でも。」

「然う容易く？」

「直ぐでも。」

「其の時は……しかし、——不斷また何だつて、そんな突詰めた氣になります。」

「何時か、話しませう、……明日は屹とよ？」

「何處へでも。」

「地獄へでも——」

「あら、其處の事よ、駕籠屋さんは口惜いつて云ふのは。成程、先刻はふつとした發奮で、女の心を、魂を、燃ゆる思を、緋の披帯の色を、身體で庇つて下すつたけれど、直きに又忘れてお了ひなさるんでせう。」

「砧さんの發奮と思ふ。」

「發奮で死ぬのよ、色も發奮だわ。でも忘れません。」

「私も忘れない。」

と、ふと目を外らすと、枕頭の二枚折、張交ぜに小野小町、芥川、淺妻船、名家の映寫の色紙に交つて、短冊に(親和)とあつて、

駒とめて袖打拂ふ蔭もなし

佐野のわたりの雪の夕暮。

謙介は思はず、手酌して、杯の裡に、谷を想ひ、山を想ひ、峰を想つた。

櫻
心
中

「太夫、實に、佳い鶯やね。」

軒の籠の其の聲を聞きながら、公園の中に、面影亭と云ふ、以前は鳴らした事のある女形の地俳優が隠居仕事に營んで居る淺間な茶店。住居と帳場を兼帯の長火鉢の前に、のそんと控へて、瘦せた手に、故とらしく澁茶の茶碗を兩掌に据ゑて、箱がきの由緒ある器めかし、何とか千家流に一つ捻つて、びた／＼と口舐すりの音を立てたのは、顔色の蒼黒い、眉毛の薄い、身のおとろへた盲人である。

が、服装は驕つた、大島揃ひに白縮緬をだら／＼と巻いて、いかに雪國でも、もう五月へ日脚が届くのに、福々と見せた同じ緋に膨れるばかり綿を入れた書生羽織。おまけに縮緬の襟巻して、柔毛皮の手袋が座蒲團の傍に脱いであつて、黒の中山高帽を鍔下りに、此は被つたまゝで居る。尤も今しがた来て、座に着いたばかりらしいが、對手を太夫と云ふものの此の容體は、其の取澄ました横柄さが思はるゝ。それも道理で、此の盲人は按摩でない。下川忠雄と稱ふる——實は

忠助と云ふのであるが名刺は専ら右で振撒く——土地の金貸の倅で、やがて四十に近いが、矢張り若旦那と此家あたりでは言はせて置く。

「ふう、然う、其の調子。」

もう一度聲を聞いて、ぐたりと成るまで、襟巻に撫肩の首を傾けながら、茶碗の縁を小刻みに指の先でぶる／＼と弾く、ト異に琴を弾く爪の形に見える。勿論見せようとするのである。

「何とも言はれんね、太夫。」

目の釣り上つた、髪の毛の薄い、色の青しよびれたのが鉛のやうにべとりと塗つた、尖つた廂髪で、時々表の人通りを見掛けては、黄色な、けつたるい聲して、

「お掛けやす、一服お吸ひやす、お休みやす。」

と呼掛ける十五六の小女を、盲人の横手に、悪く膝を崩して附添はせて、それに茶の給仕をさせつゝ、明治初年の女形實川何某は、小縁前でコチ／＼と小摺鉢をあたつて、鶯の餌を摺る處縁前で小鳥の餌を當ると云ふと、如何にも日向のやうに聞えるが、然うでない。

此の邊は、樹立ちが多いのに、裏が直ぐに崖に成る、横に蓮池を控へたので、空は麗かなのに係はらず、じめ／＼として陰氣に暗い、澤庵桶も見えれば古盥も見えて、小さな池に細い笥の水が流れ、青苔も生えたり、鼈も出る。

其處に、七十有^い何^{なん}歳^{さい}にして、のつべりと眉毛^{まゆげ}の無い、顔^{かほ}の長い霜^{しも}げたのが、薄^{うす}汚^まれた木綿^{もめん}の藍^{あゐ}微塵^{みじん}、黒襟^{くろえり}も絲^{いと}の抜^ぬけた半纏^{はんてん}、紺^{こん}の盲縞^{めくらじま}の、摺^{すり}餅^{もち}に徹^かだらけかと思^{おも}ふ、前垂^{まへだれ}して、胡坐^{あぐら}も搔^かかず背^せくゞまりつゝ、肩^{かた}のだらりとした體^{てい}は、翁^{おきな}とよりは媪^{おきな}に似^にて、昔^{むかし}の僂^{しの}ばれる、それが寂^{さび}しく、賣^うりに出^でる姫^{ひめ}のりを拵^{こしら}へる様子^{ようす}があつた。

「土臺^{どだい}違^{ちが}ふがね。そりや、代^{しろ}ものも代^{しろ}ものやがな、同^{おな}じ賞^ほめられるにしても、若^{わか}旦那^{だんな}のは、そりや違^{ちが}ふ。お琴^{こと}のな、ちやんと、それ音曲^{おんきょく}の此^この、」
と小耳^{こみみ}へ手^てを遣^やるのが、一寸^{ちよと}おくれ毛^けを搔^かく風情^{ふうせい}に成^なつたが、當^{たう}の太夫^{たふ}、對^{あひて}手が盲^{めくら}目^めなのに忽^{たちよ}ち心^{こころ}付^ついて、餘計^{よけい}な所作^{しよさ}を詰^つまらなさうに、不精^{ぶしやう}たらしく、すぐ懐^{ふところ}へ引^ひ込^こめて、
「ねえ、音^{おん}の出處^{でところ}、聞處^{きところ}と云^いふ嗜^{たしな}みが備^{そな}つておいでやからね。」
と片手^{かたて}で、ごしく。

二

「然^さまでも無いがね、あゝ。」
盲^{めくら}旦那^{だんな}は、ちゆうと又一^{またひとくち}口^{くち}吸^すつて、身^みの衰^{おとろ}へた割^{わり}に、ぶくりとふやけた、紫^{むらさき}がかつた舌^{した}の尖^{さき}、春^{はる}蘭^{らん}な此^この陽氣^{やうき}に一^{いっ}層^{そう}元氣^{げんき}せた唇^{くちびる}に濕氣^{しめり}を與^くれて、扱^あて、ぐつと一^{ひと}つ仰^{あや}向^むくと、薄^{うす}い眉毛^{まゆげ}をひ

くびくとさすのが、對^{あひて}手^ての居所^{ゐどころ}へ見當^{けんたう}を付^つけるのである。
「でも、其處^{そこ}は聊^{いさ}か素人^{しろうと}と違^{ちが}はんとね、永年^{ながねん}、絃^{いと}で苦勞^{くろう}した瓜^{うり}に對^{たい}しても濟^すまんぞね、ねえ、太^{たい}夫^ふ。」

「然^さやうでございますともな。」
「尤^{もつと}も、聲^{こゑ}を聞^きくのに、勘^{かん}が可^いい、と成^なるとさいが、此^こでも、へゝツ。」と、俯^{うつむ}向^むけに成^なつて、薄^{うす}笑^{わら}ひを行^いる。
と其^その笑^{わら}ひが、變^{へん}に、鼠色^{ねずみいろ}の斑^ばに成^なつて、譬^{たと}へば靨^{あざ}の如^{ごと}く蒼黒^{あをくろ}い頬^ほに泌^{にじ}出^です。
「ねえ、太夫^{たふ}、何^{なん}となく心持^{こころもち}の可^いいものではないがね、お互^{たがひ}の間^まや、そんな氣障^{きざう}氣^けは無^なしに、ねえ、太夫^{たふ}。へゝツ。しかし好^いい聲^{こゑ}や、あゝ、其處^{そこ}や、何^{なん}とも言^いへんがね。」

「眞個^{まったく}、澤山^{たくさん}はありますまいよ。苦勞^{くろう}をしましたよ、此^この驚^{おどろ}にや……毎年^{まいねん}、早春^{さうしゆん}には岨^{がけ}の椿^{つばき}の樹^きへ來^きて鳴^なきますのを、二月^{ふたつき}三月^{つき}毎^{まい}日^{にち}のやうに狙^{ねら}うて、三年^{さんねん}が間^{あひだ}かゝりましたが。藪^{やぶ}でも、野^のでも、おなじ鳥^{とり}でも、質^{たち}の可^いい奴^{やつ}は、不^ふ思^し議^ぎにな、うつかり人^{ひと}手^てにはかゝりませぬね。」
「然^さうやとも、大^{おほ}きに、へゝツ。」

と例^{れい}の薄^{うす}笑^{わら}ひで、
「其處^{そこ}は昔^{むかし}取^とつた杵柄^{きねづか}で、太夫^{たふ}、女^{をな}子^ごで經^{けい}驗^{けん}あるがぢや……何^{なん}かね、三年^{さんねん}かゝつて突^つ留^{とど}めたとい

ふのは、新造かね、年増かね、後家ではあるまいね、

言ひ掛けて、盲旦那は陰気な手つきの甲をぶらり、べろくと唇を擦つて、

「堪まらないと言つた美しい、人の女房でもあつたかね。」

「一向早や(暗の夜に鳴かぬ鳥の聲聞けば、生れぬさきの)何とやらでございますよ。」

昔の太夫は、耳學問の悟つたやうな事を云つたが、じろりと盲人を視て可厭な顔して、

「どつち道、此の鶯はな、こりや牝ぢやござりませんよ。」

「お寄りやす、お掛けやす、一服お吸ひやす。」と小女が間伸びのした勢の無い、其の癖突走つた

聲を出す。

盲旦那は其の小女に首を伸ばして横面に傾いて、

「通るものは、牡け、牝け。」と洒落に軽口らしく訊ねたが、容子が横柄なものであつた。

「書生さんですげ。」

「はあ、牡の。……書生が靴を穿いて、ぼか／＼通るやうに成つては、花見も末や。成程一向に

人が出ん。公園の春の眞晝間も、さて早や、寂寞たるものだと言ひたいね。しかし可い陽氣や、

溶けさうな鹽梅や。」

と帽子を脱ぐと、軽く膝を撫でるとともに、煙草入れを抜いて突立てながら、些とくどいやう

ではあるが、指の尖で小刻みに道具を弾く。筒を見よかし、煙管を見よかし、自慢なのである。

「唯今、お茶を入れかへます。」

太夫は半纏を摺らしたが、立つても來ず、柱に掛けた藁苞から小さな串にさした、べろ／＼と

柔かな蒼白い肉を、手焙りに立てて、遠火に當てつゝ、

「陽氣よりかもな、若旦那、金子ゆるでございませぬ。」と投るやうに言つて、串にさした其の一

片を中指の腹で一才觸る。

三

可怪、昔は藩主が庭前の馬駈場であつたと聞く、公園の此の入口に、六七軒一列に、蓮池だの、間に坂だの、離れ／＼に並んで居る、恠うした茶店は、揃つて柳團子と云ふ草色と白と鳩の卵ほどなを木皿で商ふ。が、太夫の焙るのは、持薬に赤蛙、蝸牛を食ふのか知らず、蛭をぶつ／＼切にしたやうな形で、決して新粉製の其ではない。

「昨今はな、一體不景氣と云ふ中にも、何でございませぬ。一重櫻が散りかゝつて、此處の、それ、お庭の曲水、八ッ橋の岸にあつて、山も、水も、町も、湖も、三國見通しに根を下ろす、あの富士見櫻が盛りに咲きます——唯今が眞盛りでな——毎年丁ど今頃に成ると薩張人出がなくな

つて、此の通り寂寞としたものでな、……其の癖、光るやうな霞が充滿、空も水も櫻色と云ふ陽氣だのにな。

先づまあ譬へて申さば、朝が過ぎて眞晝間、……やがて八ツ前で、些と眠氣がさしたと云ふ處。酒なら、微醉が過ぎて、これから己を忘れようと云ふ境、一寸魔が魅した體でな、人間の世が天地に返る……凄いほど長閑な、とろ／＼とした、こんな時は、鶯の聲も嘴から紅色の陽炎とかに成つて、柳の葉の中を傳はります。……」

鶯が鳴く。

「それ御覽じろ。」と云ふ。

軒の籠の底を掠めて、串の物から迷に黄色な煙が泳ぐ。

「お掛けやす、お休みやす、一服お吸ひやす、お寄りやす。」

「餘計な事やね、鳴く聲さへよければ可い、色なんぞ。」

と苦い顔して、

「俺は句の方や、太夫、負惜みは言はない、……實際花でからが、咲かずとも可い。何の、實さへ生ればやが、それが口に入ればや、ふん。」

仁體造つて取澄ましたのが、急に餓ゑた獸の如き賤卑い面色で、

「い、句ひやね、太夫、何を焼くのかね。」

「鳥の餌に入れますよ。」

「上新粉に黄粉、糠に青菜と云ふ中へ、はあ、鮠を焼くのかね。」

「素人らしい、若旦那、鮠なんぞ、お前さん。」

「それぢや?……」

と引傾いたが、心得ないのを口惜しさうに、

「祕傳と見えるね、太夫。」

「何、お前さん、祕傳と云ふほどの事でもありませんよ。聲をよくするには誰でも用るまさな。尤も分量は頬かしうござりますがね、鶯を強くするには、此の一藥に限るので、人間にだつて利きませう、それ、

「はあ、」と狼狽へるばかり急いで聞きたさうに、上目でじろ／＼。

「蝮の肉でござりまさな。」

「う、む、成程。あ、然う／＼。それに限るんだつたいね。」と仰向いて高慢に膝を敲いて言ふ。其の知つたかぶりを淺間しさうに、太夫は蔑んだ顔をしたが、

「しかしね、用るやうに依りますよ。御存じでもありませんが、初手から蝮なんぞ食べさせて御

覽なさい、羽から煙が出て斃ちますが。だまし〜ね、始のうちは、蛇の肉を少しづつ、」

「それ〜、蛇の肉を少しづつ、」

太夫は苦笑した。

「だが、御内分に願ひませうで。」

「矢張り、祕傳かいね、は、は、は、」

「何、然う云ふ次第ではありませぬが、言はば手前どもも、此れ客商賣と云ふ中にも、食ものを商ひます。蝮と同じ火で茶を煮たり、蛇を扱つた手で團子を捏ねるなどとあつては大事。恚う遣

つて、それ別の火鉢で、遠くで焼くぐらるでござりますからな。」

「構ふものかね、俺なぞは、内ぢや毎日蝮酒や。」と昂然として言つた。

が、太夫は敢て盲人に氣を兼ねたのでは無ささうであつた。

四

笈の水は、絲のやうに、すら〜と流を捌いて、一度其の下を潜つて行く。店から歩板の橋を渡した、飛石三つ四つ、中庭を一寸隔てた處に、縁側の附いた一棟茶座敷めいた離亭がある。…通に向いた方の障子は閉まつたが、沓脱の上に一足、白木で表つき、都風の駒下駄が脱いであ

つて、傍に薄色の涼傘が、一本菖蒲の咲いたやうに、蓮池に影を落す。

静な面影亭には、夫戀ふ鹿より、水鶏が憬れて寄りさうな、此の駒下駄のぬしの方が、一人音信れた先客で、其處の障子は、はじめ開いて居たのが、此の盲人の中山高帽が、前のめりの反身に成つて店へ入つた時、櫻がちら〜と散込むやうに、美しい袖口がちらりと動いて、内から閉めた事を言つて置きたい。

廻縁の、其の茶室の丸窓と、母屋の裏の鶯籠とは、つい小庭を隔てたばかりであるから、太夫が花霞の日關に鶯の聲に紅をさして話したのも、單に盲人にばかり聞かせたのでは無ささうな、と同時に、餌の蝮の言譯は、其の女客に對したのであるらしい。

が、盲人は一向に氣が附かぬ。…衣の留奇の香も立たう。間に水の流れがあつて、…地の下をも潜つて通る別けて女には鎌鼬の如き、此の盲人の鼻の働きを遮らなかつたら、水は清いものである。

でないと言旦那忠雄の鼻は、墓所、亂塔場を求獵つて、土葬の年紀を—分けて少い女の年紀を。

「此の分は仰向けた。横に寝て居る。立膝だ。色が白い、髪が長い。」

其の姿までも嗅分けると云ふのである。

「と利くねえ、そりや観面なものやね。太夫なども千軍萬馬、此の裸武者の中を往來した時分には、壯に用ゐたものやらうがね、實際、一矢にして五人を射抜く、……田村將軍ではないけれど、忠雄大將櫻狩ちやぞ。」

と傲然としつゝ、白茶けた鼻を仰向けに、海鼠の如き舌を吐いた。

「へ、ッ酒で其の蝮の氣を吸うてさへそれやもの。成程、生のもので搗込んで用ゐたら、そりや驚には利くやらうね。」

「偉いものでござります。……一餌用ゐますと、直ぐに其のな、驚の、あの、綺麗な咽喉から、すんなりとした胸毛へかけて、ぼつと慍う、紅い霞が走ります、生血の影が湧くのでな。此の聲を聞いて、其の姿を見るのやもんな、牝はお前さん、何羽となく、翼をすくめて、ほたくと籠の周圍へ、乙女椿が累つて落ちるやうにな。」

と仰向いて籠を見ながら、串の蝮を裏返す。

盲旦那は、横押しに膝行つて、斜ツかに肩を聳かす、其の肩が、ぶる／＼と震へる、と見ると、目鼻も眉も相好が一度に崩れる。

「まさか、まさか、太夫。」

「眞剣さな、若旦那、お前さんの前で云うては成らぬが、……御免なされや、外に言ひやうはな

し……そりや、お目に掛けたうござりまさな。雌の方は色戀にもせい、まだ可恐い事には、勢と力にまけるかして、雄の鳥が此に向ふと搔き落ちますぞな。」

「雌は固より、そりや可いがね、雄の鳥さへ窘んで落ちるかね。へ、ッ負借みは言はんね、あやかりたいね、些と煎じて飲みたいね。」とニヤリとした、が、寂しい顔色。

「お休みやす、お掛けやす。」

あの駒下駄に、ひら……ひら……と蝶。

五

「黒焼にすりや尙ほ利きますな、煎じて食りたいくらゐなら、……そりや思召次第でな。」

と申戯らしく、其の癖眞顔で、額に陰氣な皺を刻む、と孤家の媼のやうに、太夫の姿が暗く成つて、魚の目のやうなのが濁つて光る。

「驚の黒焼かね——ふん、こりや利く利かぬは別として、大名道具で面白いや。」

又傲然たる態度である。

「でありますがな、若旦那。」

「飼手が難行苦行をしてまで、不斷、此の餌で馴らした逸物……胸毛が紅う霞んだのでございませんとな。」

「勿論、然うやとも。駄鷲の黒焼なら、寒雀の方が暖まる。……餌やね、太夫、餌が大事や。何かね、其處に其の一味を調合に及んだと云ふ奴があるかね。」

「ございますともな。」

「遣はされ、此へ一寸遣はされ。」と、言まで、さもしく成つた不具の可哀さ、效性なさうに、垂下と掌を下げて出す。

「や、お舐めなさる？ 何うなさる。」

「仔細ないね、鳥が啄く果實なら人間に何でも食へる。別して鷲の餌や。あの聲で蜥蜴ぢやなからうが。」

ところで、小女の方へ傾いて、當世の衣紋を繕ふ。

太夫は乳棒くらゐな青いを持つて、長火鉢の對座へ出た。

「一服お吸ひやす、お休みやす。」

「ですがね、若旦那、實の處、此の餌は、分量が其の、秘傳なんでござりましてな、お前さんのやうな、うまいものを食ひつけ、舌尖の鋭い方には直きに悟られて了ひますが。……然うすりや、

早い話が、同じやうな鷲の名鳥が、他にも出来ようと、まあ、云つた勘定でな。……處で、私も、早や、打明けた處死慾でござりまसान……御相談によつては黒焼を承知で娘を献上、と云つたやうな次第でな、第一、此の長蟲を餌ひます小鳥は、其の氣を慕うて、頻に長蟲が狙ふのでな、幾條もそれ、梁や天井、籠の周圍を傳ひますが、其を追退ける手當だけでも、一方ならぬ苦難なのでな、餌も無代ぢや、は、は、は。」

勢ない徒笑で、

「いや、串戲ではないのでしてな。しかし、他ならぬ若旦那の事でございますりや、」

「買ふよ、とに角、澤山はない鷲やからね。尤も値とも相談やがね、太夫幾千で譲る氣かね。」

「位は百兩。」

と古御所へ化けて出るお公家の形、背くまりに、件の小摺子木を笏に取つて、額でじろり。

「言値七十兩、まけて、六十五兩、ぎり／＼五十兩、思切つて四十兩、若旦那だによつて、三十兩、もし、高價と思召しては怨みでござります。失禮ながら、親類交際でございませな。」

「俺は下川や……其處等なら相談しよう、尤も、豫て用立てた分を差引勘定では何でもないがね。」

「く……」と氣拔けのした返事。

「しかし、一兩や二兩なら、直ぐにも一薬に用ゐて可いがね、三十兩の黒焼は即座には肩が張る、四五年餅つて、俺の琴を弾く對手でもさして歌はせて鳴かせて樂むか、なし崩しに易いものや、……處で餅やね、尙更心得のため遣はされ。」

「此に、……」

「成程。」

鶯が鳴いた。

離座敷の櫺子窓に人の氣勢す。

腹の餅はびく／＼と盲人の咽喉に動いて、青い舌舐すりをしたのである。

小女は、猪首に横を向いて、

「お掛けやす、——」

を皆まで云はず、ぐつと呑んで、

「へい。」

障子の裡で優しく手が鳴る。

六

小女が歩行の板を渡る前に、別室の障子は先方から開いて、紋着の黒縮緬の羽織の片袖、肩を支ふるやうにぞろりと疊に支いて、片手を棧に掛けたまゝ、大島お召の一枚小袖、褌深く着た膝を、横に浮かした姿を斜めに、張のある凛とした目の、然も優しい睫毛、涼い眉、媚かしくて氣高い衣紋は、春の水に藤が映る。……

唯、袖に近い一盆の柳團子も、十五の月の面影に、玉を捧げた趣がある。

「女中さん、」

小女は、くしゃんと細縁に坐つて、

「へい、」

「お帳場へ行つて御主人に伺つて下さいな。」

「何でござりますか。」

いや、太夫より、盲旦那が此方で聞耳を立てた事は！ 驚いたのと慌てたのと、不意を啖つて、何でも心得た筈の自尊心を傷つけられた口惜しさと、癢と、もの珍しさと、嬉しさと、顔中に渦を巻いて、鼻は嗅がむとし、口は喋舌らむとし、額は睨まむとし、眉は氣取らむとして、ぶるぶるびく／＼と動くのが、手の先へ傳つて、蜥蜴の尻尾の動くが如く、件の摺子木を火鉢に突込んだが、真正面に向直つて正氣付いたやうに、衣紋を直す、

「あゝ、驚やな。」

と、てれ隠しらしく、然も傲然として、人を侮つた事を言つて、

「何とも言はれんね。」

こゝで、ニヤリとして身體を静める。

太夫は盲人のちたばたする目まぐるしさのものの紛れで、其の端麗な女客の聲が聞取れないのを、苦々しがる顔色で、火箸でぐいぐいと弾くのが、蝮の搦んだ摺子木に掛つて、何故か灰寄せの形に見える。

「何とおつしやるかな。」

小女が歸つて来た、取次ぎを待兼ねて太夫は先んじて聲を掛ける。

「あの、」

「何だと。」

「お客様が、あの、おつしやるのでございます。」

「素敵な、美人、聲で分る、違ふまいげ。」と盲人はありつたけ聲を密めて、二人の真中へ堪らなく溶けさうな顔を割入れると、口の臭さに、太夫は、むかりと来て鼻を蔽ふ。袖の捌きは女形。「餘り、あの、驚が好い聲で、其の姿が見たく成つた……籠を持つて来て、一寸見さして下さい

ませんか。……然う言うて来いと、あの、おつしやるのですのや。」

「ようござります、可いともな。それ、籠を下して持つて行つてお目に掛けな、……氣を付ける

だよ、いけ粗雑だと鳥を遁す。」

「聲の好さゆゑ姿が見たいと……太夫、三十兩がものは出来た。」

小女は聞いた値段と、雲に乗つてるやうな人の、わざ／＼の、いひつけとに、急に變つて驚が尊く成ると、軽く、ひらく／＼と籠に飛ぶのが、黄金無垢の踊るが如く響くかして、重いものやうに、両手に据ゑて、危かしい据腰に、目七分ぐらゐに歩行板を渡つて出る。

面が面で尖つて居るので、……却つて、それが狐の狙ふやうであつた。

美人は待つ間、片手を支いた、其のまゝに、まつげを濃く品の可い、そして色つばい、艶やかな圓鬚で俯目に成つて、熟と其の駒下駄に舞ふ蝶を視て居た。

七

「驚や。……」

と呼んだ聲は、其の鳥の妙なる唄より朗かに、袖に添つた朱塗の籠。——雪の下に格子を赤く塗る國は鳥籠も紅な、——それが直ぐに、美しい膚を包む、八ツ口を漏る、長襦袢の模様であつ

た。

氣勢も姿も花やかな中に、唯一筋、水淺葱の薄いの、千鳥を絞つた絹縮みの下締の、胸を撓に切めたのが、顔に影を映すまで、もの寂しく装を沈めて、錦葉を流す水である、紅梅に射す月である、とともに、黒髪の艶はくつきりと縁が増つて、鼈甲の櫛が照映ゆる。

「手鞠唄のやうだわねえ。……鶯や。」

と莞爾して、色白な顔を、其の朱い籠に近づける、唇は宛然に一輪の蕾である。

「偶々来て、逢ふんだわね、あい、」

と見惚れて恍惚したやうに頷きながら、

「お前さんね、お腹が空いても變なものを食べるんぢやありませんよ。……可いかい、蝮が欲しいのなら熟として此處においで、可厭なら、籠を出ておくれ、分つて？ さあ、」

と云ふと齊しく、白い手が軽くかゝると籠の戸をスツツと引く。赤い竹は、あの水色の下締を切つて、銀河に流る、幻の筏に似て、乗るぞと見えた、鶯の影は、輝くばかり萌黄の星、颯と翼を翻へして、一文字に松の梢へ、……長閑さの重り累る眞綿のやうな風を鳴した。

「あら、あら、破亂だ、破亂だ。」

太夫は夢中で、ふら／＼と成つて、魂を宙に店頭へ踉蹌けて出たが、どんと框へ尻を突いて、

はじめて遁がした婦人を視た。大業ではない、血相を變へて居る。

「何をしさらす、狂人め！ 自由廢業の化ものかい、籠の鳥を遁すなんて、途方もない、悪戯にも程のあつた、これ一通の事では濟まんぞ。おい一體何處の何てものや。」

と横押に、框を摺り、框を摺り、土間へぶら下げた足で、穿きものを捜しながら、半ば、松の葉に腫が亂れる。

婦人は籠を片寄せて、小縁から、袂を落とすと、前髪の艶に翠を籠めつ、軒の柳の絲はづれに、鶯の遁げたあとを、打仰いで澄して居た。

「女中や、女中や、其の女を、其、其の女を壓へて居れ、遁がしては成らんぞ。」

「御主人、遁げたのは鶯ですよ、私は遁げはしませんわ。」

反身に投げた縁の腰は、柳が霞に寝た姿。

「太夫、太夫、鶯が遁げたんやね。」

盲人は居直つて更まると、何故か中山高帽をぐいと被つた。

「遁げて堪るかな、其、其處に居る女が遁がしたんや、途方もない。」

「否、遁がしたでは濟むまい、かどはかしだね。……君、君、おい、君。」

仰向けの顔で見當をつけながら、盲人は膝行つて出て、婦人の方に掌を突きつけて、

「申戲ではない、君、こゝに三十兩と云ふ買手のついた鶯なんや、こゝの主人が承知をしても、俺が肯かん、うむ、下川忠雄が承知せん。」

「誰が承知をした處で、私が此のまゝに済ますものか。」

「女中さん、」

と婦人は懷紙を二三枚、手を拭くやうに取りながら、中庭にきよとついて居る小女を呼んで、「お茶代を。」

と金貨が一枚、牡丹、花白うして黄金の蕊、怪しく手で咲かせたやうに縁に残して、沓脱を靜に下りた。……

「御不足でしたら、松村雪と呼んで下さい、これから三好屋に食事をして、日が暮れるまで其處に居ますから。」

目の盲ひたのと、口の開いたのと、尖つた面の白けたのと、三人を、化もの芝居の古看板に茶店に残して、蓮池添ひに馬場へ出た。

こゝと、人車の道を、並木の如く松で劃る、坂下に百間堀と云ふのを隔てて、花の雲が浪を寄する、舊の城の天守が見える。

其を仰ぐやうにして、鶯の立隠れた、中にも梢の高いのを見た、涼傘を、ほんのりと鬚に翳す

と、まだ咲かない松の藤が、颯と色に出で、美しい影を戯に鞠の如く投げ返す。

堀を隔てて、城を彼方に、恠くて、靜々と並木を行く婦人の姿は、恰も人なき故道を、世を離れて一つ通る、艶麗な女性の星のやうであつた。

八

「失禮、自分から申出しますのも如何かと存じますが、御挨拶までに。私は宮田七穂と申します。東京で一學校を出まして、不束な翻譯をして居ります書生です。」

夜分、しかも此の公園は廣うございます。そして、臙ながら櫻月夜の明い處がありますものを、樹の茂りました榮螺山の下の暗い處で、不意に、お呼留め申して、嘸ぞ貴女は不氣味にお驚きなすつた事と存じます。しかし御無禮をさへお許しに預れば、決して不都合な、怪しかりませんもので無い事だけは、確にお誓ひ申します。」

「否、そんな御心配には及びません。」

と靜に答へたのは、森の暗さに、夢のやうな、鶯に似た聲である。

男が、吻と息を吐いた。

「然うした貴女の清いお聲、明いお言葉を承はりますと、尙ほ冷汗が流れます。貴女は先刻から、

曲水の周囲を霞ヶ池の汀を。そして船橋をお渡んなすつて、此の榮螺山の森の中へ、……

唯一度も、背後を振り返りもなさらないで、静にお歩行でありましたから、お心付はなさいませぬ。

私は、唯今眞盛りで、夜目には暖かい雪が積りましたやうな、あの富士見櫻の處から、貴女のお姿を見ましたのです。

此の公園第一の見晴しに、加越能の三國の袖を翳して、遠い芙蓉の湖に影を宿すと言ひます、富士見櫻の花の枝に、肩を抱込まれたやうに一人一人でおいでなさいました。それが、お姿を見ました最初だったので。

其處を、お離れに成ります時、三好屋で、人よせに立てて置く、雪洞の唯一つ残つたのが消えました。

雪洞には、唯美しい蠟燭の動くやうに見えましたのが、消えると朧に浮いて、月の影に、ちらちらと花が散る、櫻の下の、其の曲水に架けた八ッ橋を、縦に横に、お袖のまゝに柔かい板が撓ふやうにお渡りでした。

ですが、お顔は見えなかつたのです。

たゞ、浅い水を出た石に散つて、流れもしない花の影を、映つた貴女の面影のやうに視めました。

た。

霞ヶ池は道を隔てて見渡す限りほんのりと、……それが、富士見櫻を充滿に映す大な姿見のやうに見えて、こゝに聳えた榮螺山は、其の姿見を捧げて突立つ、黒奴の仙人らしいのです。が、貴女が、お寄りなすつた汀には、朦朧として、龍頭の屋形船が浮いて居た……矢張り三好屋の遊船なのです。けれども餘り静に、餘り寂しい、其の屋形船は、貴女一人に纏つてあつて、貴女はそれに乗つて、何處かへ行つてお了ひなさるのぢや無からうかと思ひました。……」

彼の聲はふと途絶えた。

二人の足許の石を奏でて、小鳥と小鳥と、寝ものがたりを囁く如く潺々として流るゝ水は、霞ヶ池を細く捌いて、十三の絃に落つるので、やがて此の神祕の森を出づるとともに、白絲の瀧と成つて、櫻が包んだ巖にかゝる、……懸る時白く、揺るゝ時薄紅に、翻る時仄に蒼い、……朧の月は幻に、山の彼方を思はせる。

忽ち我に返るやうに、

「あゝ、貴女、何處かへ行つてお了ひなさりやしませんか。」

と却て一步引いて言ふ。

花が揺るゝやうな幽な氣勢は、暗きに息する女の胸、それが、水よりも高く響く。

「否、ここに。」

九

「それは難有い。しかし、くだらないお話しをして、貴女は聞いて居て下さいますか知ら。」
「承はつて居りますとも。」

「感謝します、が、恐縮です。何だか廻りくどいことを言ひ出して、お煩さいでせうけれども、肝心申上げようとする事が、餘り失禮な事なので、はじめから仔細を申上げないと、如何にも言譯がありませんからなんです。……」

それから、池の水の捌け口を、船橋をお渡りなすつた。それにも楚音が聞えないくらの、靜にお渡りだつたんです。——そして、此の森へお入りなさいました時、

もし、御婦人、御婦人の方。

思ひ切つてと申すのが、實は浮り、我を忘れたやうに成つてお呼び留め申しました。聲が出る
と私はハツと思つた。

あゝ、聞えないでくれれば可い、……聞えない振りをなすつて、すん／＼行つて下されば可い、
慇懃お聞きつけに成つて、何の用と言はれたら、さあ何うする、何と言はう。私はどぎまぎしま

した。

何故と言ふのに、いざ其の申上げようとする事が、餘り法外な事なんです。

貴女、私は此の土地のうまれです。久しい間東京に參つて居ります。まだ十代の頃に両親とも
亡くなつて其の墓が貽つて居ります。

墓地は町に近い山の上にあるんです。市の方で手を入れて、今度其の邊、墓地一帯の土地の遊
園地に拓きますので、墓を移さなければ成りません。——其の遺骨を引取りに參つて、誰の印、
彼の保證と、それ／＼面倒があつて、まだ事が濟みませんので、逗留をして居ります。

不孝な子、不束な悴だけ、二十年、三十年振で逢ひます両親の白骨に對して、心には精進し、
身體には謹慎をして居ります最中、法外な、失禮なと云つて、貴女に對し、怪しい、不埒な、そ
んな意味な事は聊かも存じては居らんのですが。」

七穂は一息つきながら、

「貴女、あゝ、申悪い、……と云つて、お呼び留め申して置いて、黙つて居ては尙ほ濟まない、
御免下さい。」

「まあ、何でございますえ。」と、力は籠めたが優しい聲。
「御覽下さい、暗うございますけれども、私は袖を顔に當てて居ります、そして申します。」

「あれ、私こそ、お恥しい、手巾で口を壓へて居るんですよ。」

「……………」

「お人の悪い。あの櫻の枝に抱かれたの、袖にちら／＼花片だの、ハッ橋の後姿、船頭も居ない屋形船が、霞ヶ池の汀について、私を迎へに來て居るやうだの、船橋を渡るのに、靜に聲音がしなかつたの、と淺薄な女の氣には、どんなに美しくでもあるやうにおつしやいます。……池の下の別の世界の水の底に、霞が沈んだやうなお話し。寂寞した朧月夜、袖が／＼に動いても、花の散りさうで成りませんのに、極りが悪い、私は少し酔つて居ます。……もしか、お酒の香ひがいたして、急に愛想をおつかしなさりはしまいかと思つて、自惚らしうございませけれど、……口惜いから、それで、あの手巾で、……尙ほ氣障ですかも分りませぬね。」

七穂は何か勢づいて、

「あ、微酔で在らつしやる？」

「堪忍して下さいまし。」

「慶す可し、祝福します。勿論、はじめお聲を聞いた時、すぐに私が思ひ誤りました事が分つたのです。其がために尙ほ言悪く成つたのですが、奥さん。」

「それに、はいとお返事を申しませうか……今日は圓鬢に結つて居りますから、」

「それぢや、嬢さん。」

「些と年増でございますわ。」

「弱つた。」

「松村雪と申しますんですよ。」

「あ、松村さん。」

「はい、ほ、ほ、ほ。」

十

「否、笑ひ事ぢやありません。」

七穂は腕を組んだ袖の音。

「お心易く、嘘にもお腹立ちのありませんのを力にして申します、私は、實は、貴女が身投を？」

「……………」

「え、」

此の場合、言葉を濁すは却て禮を缺くと思ふらしく、彼は疊掛くるやうに、あとを繼いだ。
「けれども毒藥を召食るか、——自害を、刃ものをお用ゐるに成るか、兎に角自殺をなさりはしま

いかと、心配で憂慮で危なくつて成らないので、それで、つい、お呼留め申しました。次第は唯これだけです、謹んでお詫をします。

「何うませう。」

と身動きに、床しい薫、はつとして、一寸、聲が途切れたが、

「貴方、こんな厄難な女ですもの。もしかしますと、お目違ひでないのかも知れませんが。」

言ふことの串戯らしさ、續くべき笑聲を期待したが、それなり眞面目らしく、夜の森は陰気に沈む。

「……事をお缺きなすつた、……お戯れも、ものに因る。……僥倖に、言葉をお交し下さいました、お聲だけでも、もう美しい方が夢枕にお立ちのやうに、お行方も分りました。怪我にも、そんな自殺をなさらうなどは思ひません。——だけ猶更、極りが悪いんですが、自分勝手に負惜みを申せば、此の森、此の築山は、公園の良に當つて唯一ヶ所、鬼門だと申します。……あの、富士見櫻と町を隔て、川を隔てて、卯辰の山の端に向ひ合つて、大な松の樹の、幹が五株に分れたのがあります。其處に棲む魔の神が、時々此處へ遊ぶと言ひます。お威し申すではありません。

其の松のあります山の奥に、高い丘に、まだ引取りません、兩親の亡骸があるんです、餘り久

しぶりなので、其のまゝ生きて居るやうに思はれます。瞳も眉も御覽あれ、父母の子の私は、誓つて貴女に仇心は持ちません。道が暗いんです。貴女の其處には石の橋があります。獅子、虎……虎が狼のやうな形をした自然石があるんです。渡つて、白糸の瀧の崖を下りて、茶店のあります處まで、お見送り申ませう。此の魔所を、森の中を、安らかにお出し申すだけをお優しさで、せめての手柄、男の面目にさして頂きたい、……さあ、静にお運びに成りませんか。

「あゝ。」

と出足を前に立つて遮るやうに、婦人は袖を挙げたらう、手首の白さが仄見えつゝ、見透す黒髪は隠るゝのである。

「貴方、一寸待つて下さいまし。……お志、お言葉も、分けて松の影の、山の上においで遊ばす、御兩親の御遺骸に掛けて下さいます。私は骨に刻みます、身に染みますほど嬉しいんです。

で、あの。」

媚かしく花やかながら、合歡の、夜は蒼む嬌態が添つた。……

「貴方に、少々お伺ひ申したい事が出来ましたよ、御迷惑でせうけれど。」

「迷惑處ちありません、が、お心の解けました上は、早く、臙でも、花霞でも、月の下へ参りませう。そしてお話をいたませう。こゝを魔所と申しますのは、昔からの言ひ傳へ、造りごと

ではありません。雖然、私は信じます。今時何も……申さないでも、貴女だつてお恐れはなさいますまい。しかし間違ひがあると不可せんから。」
「そんな處と御存じで、お呼留めなさいましたのは誰方ですえ。」
「え。」

「落ちますほどの崖もなし、渦く流もありませんが、足許は明くない他國のものと御承知で、此處へお引留遊ばしたのは誰方でせうと申すんです。」
七穂は口吃した。

「それは、……それですから、先刻から一生懸命お詫を。」
と彼は吃りながら云ふ。

「あれ、お眞面目に。御免なさい、決して、それを、とやかう申すものではありません。ですが、此處で、矢張り此の暗い處で、お聞き申したい事があるんです、……私も可恐いとは思ひません、もしか、魔が来て威したつて、私は何うせ可いんです、間違ひがあつても構ひません。」

世にも麗なる御方、眞個に差支へはないのですか。
それ、崖を螺旋に嚴を削つた樹の間の道に、石橋の袂なる虎ヶ石の陰に、雙つの黒い影の蟠つたのを御存じあるまい。

十一

「あの、お聞き申したいのは外ではありません。何故つて云ふのぢやないんですけれど、貴方は何うして、私が死ぬ、自殺するかも知れないとお心付きに成りましたらうね。」

「大事な事です、それを申さなければ成らないのです。——一言で申せば、お顔は知らずに、唯後姿ばかりを見た事なんです……貴女、失禮ですが、煙草を喫みます。」

「さあ、何うぞ……そんな御遠慮をなさいますやうな人品なのではありません。ですが、燐寸をお點けなさいませう。……私は恚うして居ますわ。……吃驚なさいますと不可せんから。」

彼は故と見ないやうに、傍目も觸らないで火を、目と鼻の間で點じた、それでも、同一うしろ姿を、はじめよりは鮮麗に、くつきりと白い襟と、圓鬚の艶を見た。齊しく色に立つたは、黒縮緬の羽織の紋で、それは梅鉢の裏であつた。

で、婦人の衣が、する／＼と柔かに冷く近づいて、我が袖に、指尖の、そつと觸れた時、七穂は、過去つた雪を捜つて、こゝに櫻咲く朧夜の底をヒヤ／＼と何處へか沈んで、春を後戻りしつ、梅の花に手が届いたやうな心地がした。

「些とお掛けなさいまし。……石は水が近くつて濕つて居ますから、此方へ。」

崖の樹の根へ、手巾の、それも梅ヶ香。

此より先、燐寸の火は、水にも届かず消えたのである。

「山に伏す故に、山伏で、野宿くらは慣れて居ります、貴女の手から敷きものなんぞ、七穂はそして腰を下した。

「では、私も敷きますまい。」

婦人は地に居て取つた七穂の杖を離して、すらりと立ちつゝ、梅の小枝に手を掛けた。

「何方へ。」

「此處に、高い處に、樹の枝に留まつて居ります、ほゝ鳥のやうに。」

「御紋を見ました。鶯でせうな。」

暗にも笑顔が面影に添うて、

「鶯はもう遁げました。——此は貴方の御存じない事、梟にでも烏にでも、さあ、今のを聞かして下さいましな。」

「丁ど十年前以前です。貴女と同一うしろ姿の一人の婦人を、同じ處で、同じ場所で、——日は忘れましたが、月も今月、此の公園の花の中で見た事があるんです。」

「まあ、」とや、沈んだ聲なり。

「ですが、勿論、貴女より、寂しい冷い姿でした、たゞ一重があちこちに、もう些と残つて居て、富士見櫻は咲沈むと云ふ盛り夜の月が、そしてもう少し澄んで居ました。も一つは、其の婦人は髪を櫛巻に結つて居て、紋着ではない、縞の羽織を着て居たのです。」

はじめて、其の婦人のうしろ姿を見たのは、馬場の茶店の中に面影亭と云ふのがあります。時刻は今夜よりすつと遅い、で、店は、閉つて居ました、が、暗い其の軒下を離れて、松並木へ、片明りに成つて出た處だつたのです。」

婦人は聞いて息を凝した。

「次に目に留りましたのは、瀧の茶屋と云ふ、これは料理屋ですし、足許の此の水の落ちます白糸の瀧の下に、細い殿づくりに出来て居る、其の張出しの棧敷の前を、廊下を傳ふやうに、飛石を渡つて行くのを、私はふと傘形の四阿の陰から見ました。」

が、崖の暗い處で隠れました。……寸分違はぬ、うしろ姿で。」

十二

中心櫻
「其の姿は、花が包んで、其の頸には月が映し、霞が袖に漾ふのを、やがて富士見櫻の樹の下で

見たのです。

それからは花に分れて、八ッ橋を渡つた道、池の汀も、船橋も、消えるやうに此の森の中で見失ひましたまで、……貴女が今夜、彼處から此處へおいでなすつたのと些とも違ひません。……矢張り寂しい夜でした。風もなし、星もなし、何處かの隅には人かとも思ふ、夜鴉の影はさしなから、此の廣い公園で一人に出逢ひませんでした。

如何にも寂しく、それが、この櫻から拔出して、月に向つて、うしろ姿で一人行く、衣服の縞目も宙に浮いて、朧な其の自分影に誘はれて歩行らしいのが、哀に、果敢なく、世にも便りなささうに見えて、そして餘り静で、聲音が聞えなかつたのです。

面影には月あり、黒髪には花があり、眉には霞がありながら、駒下駄か、何か、其の足許が唯影らしい、幻らしい……其の癖、あのくらゐ落着いた、しとやかな、氣高いほどな裾捌きは見た事がありません。まるで美しい水が、音もしないが流るゝやうで、雲のたゝすまひにも似て居ました。

それは貴女も肖如なんです。

が、肝心、お話をしなければなりませんのは、然うした態度が、何うしても何處かへ、死に行く人らしい。

果して、其の婦は、其の夜のあけ方に、此の公園の並木の下、あの百間堀へ身を投げて亡くなつたんですか。」

木の葉も動かさず、美人の手は枝ながら寂寞して居る。

「それ以來、死を覺悟した人の姿ほど、端麗で、正肅で、侵すべからざる、威のあるものはないのではなからうかと思ひますくらゐ、其の姿の動くに連れて、其の空ばかり、却て雲を拂つて、月も冴えるやうだつたんです。

それがです……何となく同じ思ひの氣を感じたのかも知れませんが、其の當時、實は然う申します私が、色戀や何かなら可し、意氣地のない、弱い、だらしない、しかし實際活くる道のない、貧困骨に徹して糧の得られないために、死場所に魔誤つて居たんですもの。

世にたよりのない時は、寢静まつた、人の軒、寂しい水、ぬしのない花、ものいはぬ石や岩、橋の欄干がたよりに成ります。茶店の軒下、瀧の家の廂つゞき、富士見櫻、おなじ場所を辿つたのも、果敢ない星の道なんでせう。

御婦人、一寸……

的切死ぬものと思はれますから、聲を掛けよう、聲を掛けよう、そして助けよう、勿論自分が其の仕誼で人を助ける處ぢやありませんけれども、死ぬのは何も貧苦には限らない。……思留ま

らせたくツてならなかつたのに、何うしても、(姐さん)とも、(貴女)とも口へ出して呼ばなかつた、力の有無ぢやないのです、恥しかつたんです、極りが悪かつたんです。馬鹿が、——若かつたんです。氣障な色氣なんです。虚飾です、負惜みかも分りません。

雖然、此の森で隠れてからは、崖を轉がるやうに慌てました。追継る勢で、百間堀まで駆けて行きましたが、其の土手百間の間、月夜を見通しに影もない。……彼これ一時だつたでせう。遙に町の方で、辻を行く駒下駄の音が、幽にカラコロ二三度響く。

死場所を變へた。

大川へ、……」

十三

「一條、町中を貫いて、青塗の橋のかつた、水が淺葱に流れる、麻野川と云ふのがあります。其の川端を朧月に、私はぶら／＼と歩きました。……

橋を渡れば、もとの土手に、渡り返せば向う岸に、いつも大川一つ間を隔てた縁を、影のやうに、其の姿が動いて居るやうな氣がしたのです。

が、それは幻だつたのです。婦は明方、百間堀で亡く成りました。死骸の筈をこぼれて、髪が地に敷いて流る、やうに長かつたと云ひます。私は昨夜の櫛巻が、其のまゝ、目前へ散るやうに思ひました。

手巾の工場の刺繍の女工だつたのです……良家の人が落魄して……入組んだ事情も何にもない。當日絹の手巾に、彩糸で藤の花の刺繍が出来上る。優しい眉、美しい瞳で熟と視て居たが、下繪には描いてなかつた、水を、あの觀世水を、太白で縫ひましたさうです。すると、豫て口説き口説き嫌はれて居た、工場の主人の盲人の奴が、生意氣だ、暇潰しだ、と投出したので、泣いて詫をして悄悄と内へ歸つた、其つ切、御飯も食べず鬱込んで、觀音様へお參詣をすると云つて、不斷着のまゝ、家を出たのだと云ふんです。

聲を掛けて慰めたら、死ななかつたのかも知れませんが。今でも残念だと存じます。

新盆には其の秋、心細い道を探して、其の人を葬つたと云ふ寺を尋ねました、切籠と云ふ、小さな行燈形の燈籠を備へるのが土地の習ひです。寺の本堂で、燈心に灯を貰ふ時、……改名でも知つてる事か、——此の春、身投げをしました美しい人のお墓所は、どちらです——私は自分で顔の染まるのが分りました。露深い草の中に、ほの白い顔が見えたのです。それは切籠の燈籠の影だつたんです。蟲が鳴いて螢が飛びました。

私は、やがて草鞋穿で、東京へ發程たつたのです。

年月を經ても忘れません。

其の人が、花やかに成つて、同じ處を、同じ姿で、今夜、公園の櫻の中を又歩行くやうに見えました。

御容赦を願はなければ成りません、其が貴女です。女神とも、天人とも、人を離れた御様子が、其の時の口惜さにつけても、何しても、死に行く、覺悟したお姿としか見えなかつたのです。思切つてお呼留め申したのです。

「あゝ、貴方。」

沈んだ聲して、

「お亡くなんなすつた、其の方が、貴方の背後に、」

「えゝ、」

「後姿で立つて在らつしやるやうですよ。」

七穂は思はず悚然として突立つた。

「お袖につかまらして下さいまし、……私も凄くつて成りません。」

「御保護を申し上げます。」

と縋つた其の手を、緋の羽織の袖を隔てて、包んで彼は確と取つた。

「飛んだお話をいたしました。」

「否、眞個に嬉しいんです、貴方の御覽に成りました、其のお美しい、それは、其の方が貴方を募つて、今夜此處へおいでに成つたのかも知れません。」

「飛んだ事を、人の悪い……御自分でも氣味を悪がつておいでの癖に。」

「ですけれども、私を御心配下さいました、貴方のお目は違ひません。……人の命を危ぶんで、縁も由縁もないものに、言葉をお掛けなさいました、何の、それに御遠慮が入りませう。私はお禮を申します、……申戲や、浮いた事ではありません、私は死に行く氣です。死ななければ成らないのですもの、ねえ。」

「そんな、又……」

戲として打消すには、婦が餘り眞面目なのである。

十四

「まあ、貴方、」

と先を取つて、男の氣を壓へるやうに、

「お疑り深い、外の事とは違ひます、死ぬと云ふに、嘘や申戲があるものですか。」

「聞き棄てに成りません、もしか、眞個だとすると、何う云ふ理由で、死ぬの、活きるの、さうした事がおあんなさいいます？」

「理由を申しましたら、……貴方何う遊ばす思召、死ぬな、とお留め下さいますか。」

「申すまでもありません、……屹と留めます、……無理にもお留め申します、是が非でもお留め申します。」

「でも、何うしても死ななければ成りませんでしたら？」

「或は金、或は力、或は義理、或は祕密、」

彼は聲を掠めて呼吸を引いた。

「神のやうに、佛のやうに、上に居て、貴女に死ぬな、と云ふ力はない。勢もありません。何事も忍んで、堪へて、死なないで下さいと、下に伏して跪いて願ひませう。」

「あゝ、勿體ない、世間に唯一人でも、お優しい貴方があると分りましたら、あの、其の時の御婦人も、死ぬのを思留んなすつたでせう。もしか、自殺をするのでしたら、何を何う身に代へても屹と思留まります。ですが、ですが、私は、私のは、死ぬのは覺悟しましたばかり、卑怯なのです、未練なのです。苦しいのです、生きたいのです。……自殺をするのではありません。人に殺されるんです。」

「人に？」

「えゝ、人に斬られて死ぬんです。命を断たれて枯れるんです、何うしても遁げられない、免れられない約束事に成りました。」

唯、不意に花が散かゝつたやうに、軽い、優しい、柔かな、女の顔が胸へ来て、男は霞を吸ふやうであつた、……然る中に、冷なる死の氷の、骨を貫くが如かりしは、はらくと觸るゝ、おくれ毛の薫であつた。

「可哀相だと思つて下さい、可哀相だと思つて下さい、露だけなりとも不便がつて下さいましな、ね。」

男の聲は震へたが、

「對手は。」と強く訊く。

不思議に調子軽く女が、答へて、

「兵隊さんなの。」

「軍人ですか。」

「えゝ、騎兵さんですわ。」

「お待ちなさいよ。」

七穂は、殺される、斬られて死ぬとて、ひとと女が絶つた時、思はず背に掛けて居た手を、はつと取落したやうに開きながら、

「何だか、貴女、助かる道がありさうに思はれます。」

「否、不可ません。助からうたつて駄目なんです……」

七穂の躡しさうにする胸に尙ほ絶つて、

「堪忍して……もう些と恚うやつて置いて下さい。」

「貴女、確に申戲だ。」

「さあ、屹と申戲たとおつしやるから、それですから、恚うやつて暗い處でお話しがしたかつたんです、……でも、馴れた所爲か、極りが悪い、仄りお顔が見えますよ。」

「私にも見えるんです。」

「仕方がない、貴方のが見たければ、こんなでも、お目につけねば成りません。貴方、殺される女の顔は醜いでせう。」

「否、」

「い、え、影が薄いでせう、ぼんやりして居るでせう、蒼ざめて居るでせう、可愛い、優しい、貴方のお顔は、ほんのりとして在らつしやる、あの、切籠燈籠の影が映つたやうに。」

「え、」

「そして、それを草葉の蔭から見ると、暗い、深い、心細い、穴の底から覗くやうに、棺の中の女の死骸が、目ばかりあけて見るやうに……」

七穂のわななく手が、今度は女の袖を取つて絶る。

「たよりのない、遺瀬のない、果敢ない私を、死骸だと思つて抱いて下さい、死骸はたとひ、身體はたとひお可厭でも、魂だと思つて、堪忍して、一度貴方、抱きしめて下さい、それなり、消えるやうに、なくなりますやうに、……」

犇と抱いたが、離して、よろしくと男は樹に、女は其の根に崩折れた。

「あ、嬉しい。此で思ひが届きました。堪忍して下さいまし、私は人間ではないのですよ。」

「あ、貴女は？」

「お化ではありません。」

「貴女は？」

「幽霊ではありません。」

「ですが、人間ではありません、其の御婦人ではありません。」

「貴女は？」

「非情のものです、草木です、木の幻です、枝の影です、花と云ふのは、恥しい、臍をたよりの色に出て、月に霞んだ櫻ですよ。」

十五

「私は江月寺の櫻です。」

沈んだ顔が、ふと立つと、草葉の影を想はせた、其の顔の色が甦つたやうに暗い中に浮いて、ものに魅せられた如く、裳は緊つて、肩が震へて、

「私は、影です、幻なのです。ですけれども、此の櫻は名木です。間に犀川と云ふ大川一つ隔て居て、此の公園と向ひ合つた、寺町と云ふ高い所に、其の江月寺の堀越に廣い町幅一杯に、下が、犀川の其の清い流の岨に梢が届いて、幹は襦袢の裾のやうに靡いて、枝垂れの枝は、振袖を捌いて居ます。其の襦袢も振袖も、唯霞です、花片です、雪が積つたやうなんです。撓な姿、優しい容は、星を翳しても月を乗せても、雲を被ても、倒れさうに重いんですが、思ゆる、戀ゆるには、風に揉まれて散るのも厭はず、道を行く人の足に踏まるゝのも構はないで、地に膝を伏せるまで、男に両手を伸ばして居ます。……其の男は、こがるゝ人は、此の公園の富士見櫻が、そ

れなんですつて、――

貴方は屹と御存じだと思ひます。

昔、義經主従が、山伏に成つて、安宅を越して、此の北國の海道筋を、大野の濱へ通る途中、此の樹の下にお憩ひだつたと言ひ傳へて、卿の君の記念に貽つて、(君櫻)と云ふにつけて、富士見の方は、判官櫻と云ふんですつてね。」

「よく知つておいでです。」と茫然として見惚れたのが、漸つと心付いて聲を入れる。

「まあ、私ですもの、江月寺の君櫻は自分ですもの、知らないで何うしませう。」

千年か、万年か、命は男に捧げても、記念も名も貽つて居たのに、其の木が、伐られて死ぬんです、滅びて了ふ、枯れるんです。……

斧で打ち、鋸でひき、剣で裂くのは軍隊です。これも御存じに違ひない。

此の名木のあります、寺の町端れに兵營が出来ました。其處が騎兵の聯隊に成つたのです。馬上で樹の下を潜るのに、馬の鬣が亂れます、旗を倒さねば成りません、槍を伏せねば成りません。槍は北斗の星をも貫き、旗は雲井に蹴るべきものなのです。鬣の亂れるのは、崩るゝ女の黒髪よりも大切です。

切られなければ成りません。枯れなければ成らんでせう。

覺悟に未練は無いけれど、悲しいもの、貴方、情ないもの、貴下、果敢ないつたらないんですもの。

御國のためでも、戀は戀、情は情、恩愛は恩愛です、……

私は今夜、夫と思ふ富士見櫻に、別を告げに、暇乞に、なごりを惜みに來たのです。

君櫻は臙の中を、花の精が拔出して、

言ひかけて、寂しく笑つた。……

「ほ、と云ふわけなんです、貴下、心ばかりなんですから、何うぞ、あの、お蔑み遊ばさないで下さいませ。」

「さげしむなんて以ての外です。」

彼は激したやうに言ふ。

「でも、一生懸命なんですもの。……貴方が御覽なすつたつて、富士見櫻の下に一人で立ちました時は、何ですか胸がせまつて、それなり消えて行きさうに、心が遠く成りました。……生意氣を申すやうですけど、……花のもとにてわれ死なむ、……昔の歌にありますつてね、……實際それつ切、死んで了ひたく成りましたよ。をかしいくらゐ。」

ふと聲も曇る。

「ひとりでに、露がこぼれるやうに涙が出ました。」

十六

「私は、東京で上野の奥に、世を離れて七年の間、墓に居るやうに住んで居ました。十六の年縁附いて、杯をしました三日目に、主人に亡くなられて了つたのです。」

主人は此國が故郷です、故郷の土には同じ草の芽ぐむ姿もあらうかと、密と参りまして三年に成ります。あの、江月寺の傍に主人の故い邸があります。」

あ、それは寺町御殿と俗に云ふ、子爵松村家の舊の館である。此の姫は、ある伯爵の妾腹で、世にもきこえた美女である。

「相馬の古御所のやうな奥にかくれて、忍びづくりの二階から見えます。あの、君櫻の咲くのを、それでも樂みに視めて居ました。」

もう直きに、代つて了ふんだと云ひますから、餘り果敢なくつて、御主人へ暇乞に参つたのです。

私はなごりを惜みました。

櫻は何とも、云ひません。

思切つて、随分……お轉婆に引返したんですけれども、氣も心も、眞個に切られに行く、殺されに行くやうで情れ切つて居りました。それが、貴方のお目に留つて、死に行く身と見えたのでせう。

よく、然う御覽下さいました、それだと、花の心が通つて、私は嬉しい、本望なんです。

が、可哀さうだと思つて下さい、不便だと思つて下さい、貴方。」

と云ふと、投げるやうに身を寄せて、

「貴方、然うして、何か云つて下さい、言葉を掛けて下さいな。」

ですから、故と暗い處を選びました、君の櫻だと私を思つて、そして、貴方が、富士見櫻にお成りなすつて。

ねえ……三日添つて亡く成る時、私は、なごりを惜みました。

が、私が伐られて枯れると云ふのに、花は口を利かないのですもの、もの足りない、たよりが無い、思出して我慢が出来ない。

先刻、お呼留めなさると一所に、鬼でも、魔でも、其の人に、櫻に成つてものを言つて貰はうと思つたのです。それが貴方ぢやありませんか。

もし、後生です、一生のお願いです。

慰めて下さいまし、不便がつて下さいまし、私は伐られて死ぬんですよ。」

身をあせられて、男は震へた、……取合つた、手に力は入れたが、散らすまじ、と花片に觸る

ばかり、密と取り、密と取り、

「何とも申しやうがない、……私は、私は言ふことを知らんです。」

「私も、もう、恚う云つたんです、極りが悪いも何にも知らない。さあ、行きませう。行つて、

あの富士見櫻の花の中に、貴下、お立ち下さいましな。そしたら花の心が添つて、何とか云つて下さるでせう。」

「此の顔色を、今と成つて、花の咲いた眞中へ持出されますものですか。」

「ぢや此處で、やつぱり此處で、……私ゆるゑに御不足なら、其の時の、其の美しい方だと思つて

……」

「それなら留めます、死ぬなと云ひます、思直せと云ふんです。」

「で、もし、其の方が、思留まらない、何うしても死ぬんだとしましたら、」

「……………」

「よう、貴方。」

「……何うしませうな、何うしたら可いでせう。」

「貴方は、見殺しになさいますか。」

「絶體、絶命、見殺しにするかとは情ない。が、今の貴方のお身の上は、留める事も、活かすことも、助けることも出来ないではありませんか。」

「それぢや何うして下さいませう。」

「これは、串戯ではありません。不思議な暗い森の中に、可怪い祕密があるやうで、私は身體が震へます。熱い血が騒ぎます、冷い汗が流れます。無念です、口惜い。が、虚空を掴んで揮いても、他に云ふべき言葉はない。……雪子さん、いや、櫻の貴女、私も男だ、一所に死なう。」

「え。」

「一所に死にます、……然ういふより他は断じて知らない。」

十七

鶴が羽がひをすぼめたやうに、花の袖が重なると、恰も美しい魅物の落ちたる如く、雪子の姿は七穂を離れて、ばたりと地に膝を支いた。

「あ、濟みません、うまれてから、はじめまして、優しい眞實な事を聞きました、私は嬉しい、

霜が朝日にとけるやうです。」

と思はず、聲を忍んで泣くの聞いて、男も目を壓へて、すゝり泣きに泣出した。遺瀨ない涙である、我を忘れた涙である、半は嬉し涙である。

雪子が聲を掛けた。

「燐寸をお點け下さいまし。」

唯見ると、雪子の手に、紙切洋刀の青いのがあつた。片手に櫻の小枝があつた。花が紅に目に立つまで、其の指は白かつた。

「今夜の記念にしませうと思つて、小さな枝を切つて來ました。これを承知してくれましたか、花はものを言ひません。樹の心は分りませんから、密と内證で持つて居ました。……櫻にお成り下さつた今の貴下のお心で、許すとおつしやつて下さいまし、私は夫に聞いて、髪に挿したう存じます。」

指を反らして鬢の毛へ、婀娜めくまで、頸も白く待つものを、彼に否まむ術ありや。

「花も崇れ、月も怒れ、魔も呪へ、お心に任せます。」

「嬉しい私は。……お言を受けました心の記に……」

「やあ、貴女。」

いま、洋刀を取る、帯の紙入とともに落した、懐紙に小指の腹を。流星の如く鋭き刃尖を當つると見た。

飛菟の時既に遅矣、もぎ取つたと思ふ洋刀は、それは雪子が棄てたので、落ちる燐寸の消える時、血汐は牡丹をほとばしらす。

「飛んだことをなさいます。」

と彼は唸るやうに言ふ。

「縁があつて添つた人にも、三日で分れた覚えがあります。苦みは三年五年、悲しみは七年、九年、嬉しいのは瞬く間、其の瞬く間の心のまゝに、思つたことをしないぢや、死ねば又地獄なんぢやありませんか。」

はしたない、娼妓、女郎のするやうな事をいたしました。ですけれど、唯一息に、心のまゝ、思ふ通りにすることは、女の身は、もしか、それが女なら、天女と云つてもおなじです。人妻もおなじです。……

私は、貴方が、なりかはつてお許し下さつた、一枝の、花のかはりに切りました。が、汚らしいもの、貴方はお受取り下さいますまい、……貴方には差上げません。おなじ櫻の花片も流れ傳つて、白糸の瀧に沈みませう。私は水に流します。」

男が呼吸迫つて、もの言はぬ間に、琴は切れた、流が止まつて、一粒其の大きさ、白銀の星の如き眞珠の落ちた音が響く。切つた小指を棄てたのである。

我とともに、落ちて沈まむとする如く、思はず衝と立つた、七穂の肩を、何と、榮螺山の崖の樹の枝から、トンと敲いたものがあらうではないか。

「君、君。」

七穂は驚に掴まれたやうに、呆れ果てるばかり身が窄んだ。

「驚いては不可んよ。僕は人間だ。が、こんな所から唐突に肩を叩いて、磊落だなんて後でも思ひ給ふなよ。……はじめて逢ふんだから挨拶が廻り遠い、早く要領を得たいばかりだ。」

少し傍へ退いてくれ給へ、今、其處へ飛下りる。」

ざわ／＼と枝が鳴る。彼は腰に、長劍を帯びたが、身軽く其の音も立てないで、たゞ、カチンと長靴についた拍車を鳴らして下立つた。

「騎兵中尉小笠原武一です。直接に貴婦人には失禮だから、君から申次いでくれ給へ。江月寺の君櫻は伐らずに濟ませう。」

少くとも、出來得るだけ、僕が能ふだけ保護をします。」と嚴に云つた。

調子が碎けて、

「元來ね、彼を伐らうと云ふ張本人は我輩なんだ。固から問題には成つて居たさうだが、急に伐らんでも差支はなかつたのだ。……僕は九州の方から轉任して近頃來たがね。……此の土地の人心を殆ど掌握して居る、本願寺方面から、或筋に手をまはして、それで伐らずに置くと思つたから、出過ぎた坊主め。」

遣つ了へ！ だが遂行が抄取らん。……我輩蠻勇を振つたね。即ち、一隊を率ゐて通つて、自分で、あの道路へ出張つた櫻の梢へ俯向かずに面を打つて、頬けたに鍵裂を拵へた。

と云ふわけさ。これを笑はば笑ふべし、僕も指を切つた事を笑ふ。お互でせう。」
と、くすくす笑つた。

十八

「夫人、禮をおつしやいまし。」

七穂が聲を掛くるとともに、雪子は、従容として立つた。おさへた指を其のまゝに、威儀正しく手を垂れた。

「氏神様と存じ上げます。」

「氣取つて御會釋を受けませう。」

青年士官は舉手して揖した。

「それから謹んで凡人の御挨拶を申し、唐突の缺禮を貴婦人に向つて謝します。又更めておちかづきを願ひます。君（一所に死なう）は嬉しかつたね。……奥さん、指をお切んなすつたのは、蓋し痛快を極めましたな。……戦争のない時は、貴方がたが、こんな事してくれないと、空気がだらけて不可ない。軍人に用意があります、奥さん、繻帯を掛けてあげませう。」

「あゝ、何よりです。」

「否、構ひません、可いんですよ。」

「卑怯でないです。……名譽の御負傷、情を以て理に勝つた。織手、小細工な杓子定規の大軍を破る事、貴女の如きは少い。僕は、戦ひ勝つた將軍の負傷を御介抱申上ぐる光榮を有するのです。君隣寸を何うか。」

雪子は端然として、手を投げて、

「櫻さへ無事でしたら、もう一節切りませうか。」

艶麗に打微笑む。

「僕が誓つて切らせません。」

呀、石の橋が、からんと鳴る。と續いてからんと響く。

揃つて三人が屹と視ると、其處に中山高を被つた悄乎とした男が立つて、石橋の欄干を盲目なぐりに突廻す。……下川忠雄檢校が、狼に似た虎石の陰に、腹を引摺るやうに脊筋を敵らし、蛇のやうに潛んで居て、此時のろりと立つたのである。

で、杖を廻しながら、

「ふ、ん、ふ、ん。」と鼻で笑ふ。

氣早な中尉が、

「何だ、き様は?……」

故と聞澄ますやうに、向うから耳を出して、

「然うおつしやりみすのは軍人さんけえ。……先刻から聞いて居りみして、知つとりみすがに、騎兵中尉閣下けえ。」

不斷は繕つて東京がるのが、本能の膏汗の如きねばくとした土音を發つ。其の聲に、饅えた糊の臭氣がある。

「何が閣下だい、閣下が何うした。」

「貴方、臭いぞに、臭いぞに、や、臭うはないかいに。」

と横おしに摺つて寄る。

「今日ぢやにい、此の社會に於てぢやにい、……苟もやわい。些少と伺ひみすが、國家の軍人たるべきものがぢや、婦人の氣に入らうて、其の言ふことを背いて、裏に成つたり、表に成つたり、魂を翻してもだんないものでございみすき。其でも、其でも、杖の尖を細く叩いて、

「可いものき。大事なものでござりみすきに、やあ、閣下。」

中尉の音調は、打沈んで、怒りを帯びた。

「き様は不具だな。」

「然うや、不具や、こん、不具やともいに。不具やけれども眞人間や。人間の歩行く道は明るいもんや。そやさかいで聞きみすがやき。美しい婦人のためなら、魂を裏返しにしても可いものき。軍人たるべきものがやに。——江月寺の櫻は伐らいでもだんないけえ。返事はないのき、出來んのき。ほしたら新聞でも、公會堂の議員さんからでも、更めて、表向きに聞かせしましよかに、何うやき、閣下。」

小笠原さん。其は土着の動物です、此の國には穴居時代の、こんな、蜘蛛が澤山居ます。奇怪な道德の巢を編む蟲です。……様子が分らないと扱ひ悪い。貴下は雪子さんをお伴ひ下さいまし。

お先へ何うぞ。私があとで始末を着けます。」

「否。」

中尉は鋭く拒んだのである。

「僕が處決します。——奥さん、……先刻樹蔭から承はつて、ぞくぞくするほど嬉しかった、貴女のお言葉を、こゝに繰返す光榮を有します。」

中尉は凛々たる音聲にて、

「槍は北斗の星をも貫き、旗は雲に翻るべきものなのです。駒の鬣の亂れるのは、崩れる女の黒髪よりも大切です。……槍を伏せ、旗を捲き、鬣を亂す、櫻を伐らねば成りません。僕は面縛してそして、願ふ。奥さん、お生命を下さい。……江月寺の櫻を更めて伐らして下さい。」

「え、お伐んなさらないで何うします。……櫻に代つて申します、お伐んなさいまし、喜んで私の命を差上げます。」

「獣め、分つたか。」

柄を離すと、鏘然たり、長き劍。

「森を出ませう、お二人。……」

十九

毒の溢れた紫色して、黄なる齒をむき唇を震はせながら、三人を見送つて、蛇の蠢したる如く、背敲りして突立つたが、

「馬鹿奴。」

杖をからりと落とすと、忠雄は、ぐるりと帯を解いた。羽織ぐるみ、するくと樹にかけて、骨も露に素裸に成ると齊しく、前の細流へ巖入りに入つた。

「ばちやく、ばちやく、寺の鐘が、幽に一つ響くまで、何をして居ると思ふ。」

「はてな、何ぢやい。」

こゝに近い、繪葉書屋の小店から、亭主提灯をつけて、寢惚目をこすりながら、見廻りに出て来た。

「ばちやく、ばちやく……」

「強う、水が騒々しい。」

唯、越中禪で水の中を這廻る、ばちやく、ばちやく。黄色な瀬に驚く間もない。

「此は何や。」

と、亡者が燈明を強請るやうな手を出した、忠雄の掌に提灯をさしつけて、
「花やないかい。」
疑めて視て、わあ、と言ふ。……

櫻
貝

「お目覺でございますか、もし、誰方ぞお目覺でございますか、願ひます。」
可哀に縋るやうな聲を、冴えた月影に硝子へ浸通らして、西洋窓の戸を、外から、ほとく、
敲くとはなく、寂しい夜半の風の觸る如く、サラ／＼と撫でる音。

冬の月夜の白砂の、それが光るばかり澄み渡つた海岸の、黒い枝に水銀を流した磯馴松の中で。
—其の形は松の一本に隠れて何者とも知れぬ。

海までは二三町、なだらかな波の一畝りする砂山を前にして、千鳥ヶ岳とも言ひさうな。
此の窓は、一軒建の平家の奥で、海に向つて座敷二室を西洋造。表は格子戸の構へで離亭に出
来た、母屋から十四五間おなじ小松原を砂道で、緩く中窪みに隔つて、ふはりとハンモックに乗
つた風の、居心地は可ささうなが、便りのない貸別荘。……母屋といふのは、海濱の名に聞えた
る旅館なのである。
又……聲して、

「もし、お燈が見えまするで、お縄り申します。お縄り。……叱、叱、叱。」
と陰氣に沈んで、犬か何か追ふらしく、

「お慈悲でござります、もし、願ひます。誰方ぞお目覺ではござりませんか、お燈が見えます。」
成程、窓帷を透して、瓦斯か、電燈か晃々として見える。外の硝子戸は波の動く毎に、きらき
らと照る中を、其の薄い樺色の窓掛を遮つたのは、萍を分けた古池の底に月が映すかと思はれる、
……四邊の寂しさに陰々として、そして美しい。

こゝに住むのは、唯女二人である。
秋立つてから保養に來た。

一人は色の淺黒い、垢抜けのした年増で、それは附添の女中である。若い主人は、瘦ぎすな瓜
核顔のすらりとした、二十か一二と云ふ年紀……眞夏、海水浴の出盛る頃なら他に較べて尙ほ目
に立たう、秋寂びた濱邊には何に譬ふるものもない、たゞ、咲残つた、あの常夏の、なつかしい
薄紅の花一輪、あはれに霜に惱むのが、ふと金色の旭を浴びて、露に甦へつた莖もなやかに、
白雪の富士に化粧して、佛を紺青の波に宿した風情がある。

貝 櫻
洗髪も見た、櫛巻も見た、束髪も見た、土地のものは、其の圓鬘の姿も見た……それが、何よ
り格段に目に着いたので、荒くれた漁夫も優しく、白浪の月に敷く渚に色が目立つとて、此をば

渾名して櫻貝の奥さんと言ふ。……

一度おなじ年ぐらゐるの、婀娜なの、花やかなのが、四五人、車を連ねて訪ねて来て、二人はその日の夕方に、あとは翌日まで一夜泊りで、さんざめいて歸つた事がある。

人品な少い紳士が、停車場から自動車で乗りつけて、晩に来て、其の夜の終汽車で歸つた事がある。……二月ばかりの間に音信れた客は、其の二組のみ。

旅館にも客の絶間……風勝に地曳も遠退き、松露の名所と云ふでもなければ、松原に人も寄りぬ。

蒼海原に花一輪、女中を根じめに、ものしづかに日を暮らす。

夕風の渚を、しとくと拔足で、五位鷺のやうなのが、彼方、此方、遠淺に寄る魚の影を狙つて、颯と、眞黒な翼を投げる、其の網に、きらりと星のやうな鱗が貫かれる。……くらゐな處、

村の小川に沙魚を釣る數ほども濱には晝さへ人が來ぬ。

冬は寂しい、又靜な海である。……

町も村も、今年別けて平和であつた。

然る處、停車場の傍にある小さな會堂の牧師が言はるゝ、聖書の書拔きらしい平和な地であつた處、つい近頃、此の霜月に成つてから、引續き、變な事、をかしな穩ならぬ事が、あれゝ波が、波が、と云ふ形に重つて押寄せた。

岬に添つた差出の磯に、一朝、十八九の、うら少い、もの優しい娘の、がす絲に、唐縮緬づくめ、緋の下締のくけ紐も綿の見える果敢ない姿で、死骸に成つたのが、海の神もあはれがつたか、山の根の岩角は避けながら、海松の砂へ、解けた髪のスんなりと、引潮に残されたのがはじまりである。

鯨が寄つても驚かない、……小遣に困つた若いものは、(おいらん)と稱へて、荒波の河豚を狙ふ海邊の習、……今年こそはなかつたが、海水浴に二人や三人のそれなりけり毎々のお定り。檀那寺の玄關番で済ましたもので、其の娘の死骸は、式の如く取置申候で、事済みと成つたが、續いて、……村を通る鐵道の踏切に轢死人が二人出た。いづれも東京から覺悟して來たのである。

唯、今度は土地のものが一人縊れて死んだ。然も此の旅館の、其は風呂番の親仁で、尤も七十貝 櫻 三と云ふ……おめでたいのであるが、不思議なのは何の不足もない、自棄も張合も意地もない、結構人の飼殺しで、立派に死支度さへ出來て居たのが、場所もあらうに、此處からは凡そ磯づた

ひに二里餘、村數處々五つばかり隔てた、一寸した浦の賑かな町の、山の下を曲角の桶屋の背戸、表通りの垣根の中の立樹の枝に干してあつた串に刺した小さな鰈を段に編んで、繩に釣した、其のわなの中へ、白髪首を突込んで、なめくぢのやうな長い舌をだらりと往生。

何と！……其の珍事出来が一昨々日の夜中である。

桶屋では、若い女房が迷惑を一人で背負つた。宿場の足拔か、博徒の姐御かと云ふ、場所には似ない、横櫛の媚かしい中年増であるから。

何か面あてにでも縊れたらしい。但し盆にも、十三夜にも、其の女房は何處でも、口一つそんな親仁に利いた覚えはないと云ふ。又それが事實らしい。雖然、狭い土地の陰口は蔽はれぬ。何しろ少なからず迷惑した、いや、まだ迷惑最中であらう。

重ねて言ふ、それが一昨々日。

昨日の夕暮に又一事件はだかつた。

齊しく浦續きの別な村に、取つて十一に成る評判の才子がある。十一歳で才子も變だけれども、神童は些と仰々しい。……農家の悴で、でぶくと肥つた、口を大きくへの字形に結んでじろじろ頤で大人を見る。……

矢張り海水浴場なる其の村の別荘に、夏うち東京から來て居た、或侯爵家の小公子と蜻蛉釣か

ら馴染に成ると、殿、御臺、お二方に其の才能を認められて、小公子が休課中、讀書、算術、温習のお對手に召出され、やがて、紅白の水引で、金子二千疋、袴羽織一揃を賜はつた。

と此だけの事ながら、村では星が化けたほどな評判。當の悴も、ずつと氣取つて、既に自動車があれば乗る處、お百姓の悲しさに、其處までは届かないので、牛を曳張出して、學校から歸ると毎日乗出す。……此が草箆をつけて笛を吹くのだと、不色でも仔細はなかつたのであらう。けれども、横見臺の斜に構へて、掌に据ゑて讀書です。……浦吹風にしめりをくれて、ペラ〜とめぐりながら、時々、朗々と聲を張つて、浪打際を伸して歩行く。

黄昏であつた。……ひゆうと鳴つて、風を切つて礫が飛ぶと、牛が、船を抱くやうにぬいと前脚で立つや否や、光を消した隕石の如く、白波の磯を駈出して、悴は鳥の如くバツタリ、と落ちた。……

其の今夜なのである。

硝子窓を敲くのは、――

「もし、お燈が見えますが、……」

窓は唯一つ、其處だけに燈が映す……白砂に臨んで三個ばかりある。ほかのは皆、月に眩しうに輝くと見ると、小浪の引くはしに、すやくと暗く眠る。……其處が次の室であれば、年増の女中は、寝込んで居よう。そして、どんな夢を見るだらう。

「それとも、お休みでございますか、もし、お休みでございましたらお目覺を願ひます。」
さら／＼と又戸を撫でる。

奴の手は、腕を伸ばして、然うやつて窓を密と敲くらしい。が、あの野蠻人が、遁げて敵から隠れる時には、縦横に姿勢を造つて、立樹に紛れると云ふのと齊しく、手の動くのが、硝子に映る磯馴松の枝に紛れて、波が靜に動かすのか、風が軽く揺るのか、見分けが付かない。
兎に角、黒い影である。月夜に墨の飛沫である。

「お慈悲を遣はされ、もし、お休みなら、お目覺を願ひます。あッ、」
けた、ましい聲を底深く響かせた。

「一命に關ります。」

唯、其の樺色の窓帷が、取る手もしなやかに、すつと孔雀の尾か何ぞ窄られたやうに手繰られて、其處へ艶麗な顔が映つた。

枕を離れて、起直つたかと思ふ。や、寛いだ胸の白さに、下襲ねの襟が一筋、月が劃つて、薄蒼く藍と紺の、しつとりと膚に着いた絹縮みの小袖を上へ、伊達巻は支度氣なからう、乳のあたりが、室の中の暖かさを想はせる。ほんのりと霞んで映つて、襟は透通るほど白いのに、黒縹子の襟の懸つた、斧、琴を、菊ぢらしの、紫紺の寝子半纏。紅羽二重の裏を深く、優しい肩にちらりと掛つて、年紀よりは長けて重みの見ゆる、薄手な圓鬘の、それも重たさうに恍惚とした目をや、仰向けに、前髪の影を艶かに、温室の奥三尺の花、薫は硝子の戸に迷ふ。

其の窓を、頭の方で突くが如く、黒い三角の影を衝と松の枝はづれに顯した魔ものを見よ。川尻から河童が上陸して水掻のある黒い手で、美しい魂を扱帯ぐるみ抜いて行く殺氣は籠るが、寝亂れつゝも品の好さに、婀娜な龍宮の寢室へ召されて、扉の外まで、奴隷の黒奴が伺候した風情である。

彼奴土蜘蛛の蟠る如く、頭ぐるみ蠢々と手を合せて、

「奥様！」

「誰？」

貝 櫻
撓ふばかり胸を伏せて、綺麗な鼻筋で覗かうとするらしく、戸が上へ二三寸。
あ、櫻貝の奥さん、開けては不可ない。

いけないと云ふのに!

「何?」

と又愛の籠つた聲を掛けた。

「あゝ、奥様、お助けを願ひます。」

「何うかしたんですか。」

「一命に關りますので……」

「何? 貴方は。」

「旅……旅のものでござります。困窮ものでござりまして、御、御覽の通り、見すばらしい風體をいたして居りますために、犬に、可憐い犬に取巻かれて居りますんで。えゝ、二三疋、大な牛ほどな、吠、吠えはいたしません、吠えはいたしません、其の、腹を土に摺着けて、尻尾を疊んで、あれ、あれ、角のやうな耳を、びく／＼と動かします。……揃ひも揃つて、猛犬、猛犬。……わあゝ! 一息でも抜ますと、突然、あれ、嚙倒しさうに、脊筋を敵らす。」

「西洋館の番犬でせう。」

「えゝ、それ西洋館の柵を超えて、高い處を飛出しました。……身體が窄んで、動、動けませんので。」

四

何の疑ふ様子もなかつた。

「早くお入んなさいまし、表へ廻つて頂戴。戸を開けますから。」
姿を横に摺らして、すらりと立つ時、伊達巻の色が見えた。腰へ這つて、袴は深いが、するすと引く裳の音、立つと凜とした圓髻の品が備はる。

「あゝ、滅相な。じり／＼と後退りに、三方から網なりに絞られて、お窓の前へ押詰められましたのでござります。明の力は、獸に大砲で、うっかり飛着きはいたしません、一寸でも動きますと、一のしに嚙まれます、……絶體、絶命、お慈悲に、此の窓をお開けなすつて、へい、お情でござります。」

「でも、こんな處から入れるの、」

と、もう無造作に、寢ン寢子の片手を掛けた。

あゝ、悪い。……櫻貝の奥さん、眞個の事をお知らせしませう。

櫻 冬が来て、山の膚にも、犬の脊筋にも、峻が立つと、火の用心がはじまつて、此の土地一廓つ
貝 つ夜番が廻る。

東京の月番、長屋なみで、一軒一軒、時を極めて交代に、夜通し一人づゝ拍子木カチカチで川縁、山の裾、町屋、百姓屋の裏表を廻るのである。が、小百姓の悴で、晝は、うる抜きの大根、蕪、勘平の細い腕などを賣つて歩行くのが、軒割の入費、出合錢をし、こための小遣取りに、一人で請負ひをして、宵の内は寝込んで、買食の、ぶっかけ、天麩羅、汁粉、焼芋で腹を拵へ、其の勢で夜通しの火の番。

から元氣の悪たれ小僧と若い衆の、丁ど合の子の生意氣盛。

「べらぼうめ！」などと、出張つた榎の根ツ子、路に落ちた棒切れを蹴飛ばして、カチ・カチ・カチと廻る。

時々流行唄の拍子に成つて、

寒い風だよ、ちよぼ一風だよ、

四割五割と吹いて来る。

「畜生めい。」

で威勢は可いが、

「堪んねえや、おゝ、寒い。」

涙をすゝるので、本性を顯す。やけの半纏、頬被り。何が火の用心やら、傍目も觸らず、對手

が活きたものでさへないと、可恐しく強がつて、破れかけた垣根の如きは突破つて畦路に抜けるのが。——今夜は餘りの明さに、晝と夜を取違へて、霜に酔つたやうになり、娑婆氣な案山子が月に化かされて歩行出した形で、……つい、今しがたの事である。

街道傳ひの片側道、前を川にして、其處に假橋で客を通す、此の旅館の川向う、橋の袂へ、件の中小僧、ふら／＼としてカチ／＼齒の鳴る胴震ひ、拍子木は附けたり、腕は枝になつたと鯉口へ引込めながら、來掛つて、

「此處の饅頭のふかしたてア、堪らねえ。」

と取着きの甘酒屋が寢静まつた穴だらけの板戸を睨んで、其處から芬と香氣でも湧きさうに、身悶えをして、一つ腰を伸すと、井の端錢、うなりを立てて、チャラリと鳴る時、晃々たる天心の月から黒雲の舞下つたやうに、ぬつと目の前へ立はだかると、ものをも言はず、突然、ぐいと取つて、火の番の中僧の咽喉を締め上げた、頭三角の黒頭巾、筒袖の古外套を半分丈で、素足に草履履の怪體がある。

「うゝむ。」

貝 櫻
あはれや、腹掛もせぬ胸を露顯に、のけ反る中僧を、じろ／＼と上から視めて、
「何だ、手前は。」と少し緩める。

「火、火の番よ、小父さんは。」……と漸と呼吸が出る。
「俺か、強盗だ。」

「わあ。」

「静にしろ……生意氣に、手前六尺だな。——解け。」

中僧に禪を解かせて、

「坐れ。」

と橋の欄干へ後手のぐる／＼巻。

「奴。」

「小父さん。」と、目をばちくる。

「土地で一番と云ふ別嬪は何處に居る。……嘘を吐くと、尻から裂くぞ。」

「櫻、櫻貝の奥さん。」と——其處で、居所、道まで饒舌つた。

奴は、落した拍子木を拾つて、繋ぎの紐を、ぐなりと成つた中僧の頸に掛けて、

「黙つてろ。……俺は無線電信と云ふんだ。形は見えねえでも、手前が聲を立てると、飛道具で
ピシリだぜ。」

中僧に、がく／＼と頷かせて、三角の中でニヤリとして、橋を渡つて來たのである。

火の番は月下に一人、假橋の霜に凍てた。あらう事か！ 犬は此の方を取巻いたのである。……
尤も顔馴染で、吠えもしないで。——

五

外では、足をむすつかせて、

「え、飛込めまず段か、奥様、一生懸命でござりますが。」

何の、まあ、一生懸命なものか。白い手が窓帷にちらりと動いて、戸はまだ二尺開かないの
に、大なる守宮の如く、蹴然と跳ねて、びたりと外壁に足を宙に附着いたと思ふと、肩を一揺り、

衝と頭から入りしなに、窓際にあつた机を見て、踏まず……易々と飛越す早業。

こゝに較べては恐多いが、傳へ聞く義家卿は、怒うした時に、飛びながら御佩刀を抜打ちに、

敵が企んだ障礙物の基盤を切つた。

奴は躓きもせず、發奮もせず、すとなんと軽く疊に着いた、が、餘りの身軽さに、其のまゝ窓
際に、はつと膝を支いて氣を取られた麗なる夫人には見返りもしないで、其の足で、隣の間の襖

をスツと開ける。

唯、其處には、うしろ向きに銀杏返を見せて、室の暖さに、夜具を乗出し、寢衣の肩さへ居汚

く、年増の女中がぐつすり寝て居る。

ちつと見透し、

「内にや、此切だな、可し、次の間の新造は熟く寝て居る。……最うひげ過ぎだ。」

とニヤリとすると、密と閉めた。襖の合せ目を背で壓へて、くるりと向直ると、兩方立膝に腕組みしながら、少し反身に凭れかゝつて、頭巾の中から、雙つギロリと光を射た。

夫人の衣紋、帯のゆるやかだつたのも道理こそ、向つた床わきの壁に寄せて据置いた瓦斯暖爐、鮮けき紅の炎を嚙んで、百日紅に夕日が燃ゆる。……

ト汗ばんだらしい夫人の膚に、颯と霜を結ぶ、伊達巻が冷くキウと鳴つた。

奴は徐に頭巾を刎ねた。が、何と、恰も、其の鼠色の裏に破れた汚點のあるやうな、鉛色の髻だらけな面を出して、

「華魁、華魁。」と云つて、其の黒ずんだ唇で冷笑ふ。

夫人は身動きもしないで、凝と視た。

「大層、お澄ましたねえ。」

と腕を解くと、懷中を搜つて、凡そ出刃くらるな、切味のつしりと重い大小刀を、黙つて疊へ。殺氣の毒を引いて、暖爐がパツと呼吸を伏せて、紫色に成る影に、夫人の頬は蒼白い。

「華魁……おい、堅く成つてら、突出しか、手のねえ女だ。可哀相に恐怖なからう。……毒蛇の口へ玉子だぞ。斷念めねえ。……おい、何とか口を利きねえな。」

「はい。」

と片膝を浮かしたが、座をもとへ、机の前の友染の蒲團に直して、袂を引いてきり、と合す。下搔は緊つたが、寝ん寝子の肩は緩やかである。

机の上には、巻紙を繰擴げて、そして折手本があつて、硯の墨に、まだ閉めぬ窓の影、電燈は上に明るいが、月はそれよりも冴えたのである。

手紙か何ぞかきものをして居た。居つ、先刻に、窓を覗いた半身は、枕に着いて居たのではない。床は背後に、夜具の錦が、暖爐の影に宛然の牡丹の室、蝶になりさうな枕が浮いて、散斑の櫛の沈むを待つ。

今の返事と、其の様子に、奴は、焦れたやうに足を刻んだ。

貝 櫻
「可厭に落着いてるぢやねえか、切れものでも持つてやしないか。尤も、そりや抵抗ひしたつて、石を穿く針だけれど……手出しをされるトタンに自分で死なうとか何とか云ふ。……それぢや血を嘗める獸だ。……俺あ、花を吸ふ蜜蜂よ、恚う見えても。おい、刃物がありやしねえのか。」

「有りますわ。」

と、其の巻紙と筆の間から、青貝柄の華奢な、しかし鋭い小刀を取つて、身を蒼く抜いたまゝ、疊の上を袖と一所にすつと摺らして、

「さあ。」

と出すと、彼奴の小刀にカチリと觸つた。

六

「お前さん。」

夫人に、ふと呼掛けられて、二つ重なる小刀を見て、うつかりした彼奴は、驚いたやうに顔を上げる。

「何だ。」

「お金子が欲しいんですか。」

「そればかりぢやねえ。」

「他に？」

「濟みませんがね、奥さん、もう華魁なんて失禮な事は言はねえ、奥さん、貴女の身體が借りて

えんだよ。へ、へ。」

と笑つたが、獰猛なものであつた。

摺り下る寝ン寝子を、ざろりと上げて、

「然う……そりや不可ません。」と氣の籠つた威のある顔を、凛と向う向きに、襟脚白く机に凭る。奴は猛然と起つた。……少時猶豫つた後、

「先づ、屏風を立てよう、羨しがる奴があると不可ねえ。」

怪しき運命の襲ふが如く、夫人の黒髪の上に蔽はれ掛つて、硝子戸を落すと、窓帷を颯と引く。

「何をするんです。」

其の手が夫人の袖に掛つたのである。ト詰る間もなく、寝ン寝子は肩を迂つた、——媚かしい軋むが如き音を立てて——それが聲には出さぬ、婦の悲鳴のやうに聞えた。あゝ、紅裏が翻る、……皮を剥ぐより無慙らしい。

「身體中、針の鱗だ。餘り、お氣の毒様だから、切めて膚觸りばかりでも、滑くして上げようと思ふんでね。」

と奴は、羅紗の上へ、其の引剥いた斧、琴を、菊の友染で。

「寝ねえ。」

「……………」

「慙う成つちや仕方がない。寝ねえ。」

「私が寝るの。然うですか。」

しかしながら、見る間に、其の寢衣の藍縞ばかりに、身も姿も痩せたのが、居直つて、片手を後ろに、腰を支いて、夜具の襟を取りつゝも、胸が撓に揺れる、と見る間に、すらりと隠れて、薄もみぢの厚衾、枕の蝶は櫛を支へた。夫人は面を背けもせず、寝ながら強盗を吃と視る。

奴は、じり／＼と襖際に退つて、じろ／＼と覗きながら、瞳を射返され氣味に、瞬きして、少時して苦笑した。

「申戯ぢやねえぜ、奥さん、夜具の中に短銃があるんだらう。」

「卑怯もの。」

と夫人は、するりと音を、——美しい血の膚に通ふ音を、厚衾の裡に立てて、くるりと背後向きに寝返つた。が、膝を支いて、彼奴が小刀に手を掛ける途端に、夫人は衝と抜けて起直つた身動きに、曳いた褌のかさねが亂れて、襲衣を切つた蹴出の紅。暖爐の炎に照映えつゝ、ト蒲團に居直る隙もあらせず。

蛇が腹を摺らして畝るが如く、一伸しに蛇轉り蒐つて、

「生意氣だ、婦。」

と横抱きに肩を掴むと、膝へ仰向けに夫人は倒れる。

「往生しろい。」

痩せた大きな掌が、土蜘蛛の脚の如く、胸に節を立てて擴がつた時、夫人の襟はいよ／＼白く、おくれ毛の中に佛は澄んで、姿は、裳は、弱竹雪に折れむとす。世にたゞ呼吸あるものは暖爐である。

「罪滅した、え、慙う。」

片手を、仰向けの其の襟に潜らしながら、月明に大なる眞珠を抱ける如く、夫人の顔を膝に支へつゝも、重たさうに肩を落して、浮彫した白蠟の如き色を、見る目を亡らしては、亡らしては慌しく見直す。

「随分罪を造つた顔だぜ。見ねえ、今時、玉章など書きやがつて、何うせ、人殺しの文句だらう。……密夫の許かな、畜生め、じやらして黠れ。」

で、掌を、摺らして扱帯に掛けながら、机の上の巻紙を、擦つたさうに、じろりと視る。
刈萱の穂の千鳥を、優しく月に散らした筆の運びで。

——かきおきの事——

(遺書の事。)と重ねて讀む。——面影の玉に通つて水莖も薫る文字の、其の腫に映るまで、仰向けにされて隣きもしないで従容としたのを、彼奴は上下に見較べたが、フト、其の夫人の手の、片腕を眞直に、白い小刀の青い柄に置かれたのに心付いて、愕然として手を放した。

七

「否、些とも世を果敢なんで、それで死ぬのぢやありません。」
櫻貝の夫人は端麗なり。——机の前。

「あ、急に寒く成つて來たい、御免なせえ。」

彼奴は其の時、暖爐の前に踞つて、落窪んで險のある目のふちへ、今は却て酔つたやうな赤味を帯びた、が、地獄の釜に火を焚いて居る娑婆氣な兄哥に似て居る。

這個藍面朱雲の鬼に對して、胸に、腕に守護符もなしに、肅然として夫人は語る。

「反對に未練澤山なんです。御覽なさい、藥罎のある事。——吸入器まで……毎日血を吐いて居るんだのに。」

あ、白金の針の尖の一滴も、身内の何處かに染めては居すや、膚は愈々白かつた。

「些とでも生きて居たいんです。ですから怒うやつて、主人にも、世間にも離れて、靜に養生に來て居ます。それですがね、こゝに書いたのは、」

と巻紙を軽く壓へて、

「此處に書いたのは徒事ぢやありません……」

「呀、眞個に自殺するんで?……」

威しながら、劫しながら、先刻から潛めてた聲も、此の時が一番低かつた。

「覺悟をして居るんですとも。」

「其奴あ……へい、遺書とあるのを見て、急に何だか手足が寒く成つて來た、私の心よりか、餘程何うも分らねえね。へい?」

「そりや私にも分らないの、でも何うしても死ぬつもりなんです。……何うしてツて、それはね、つい半月ばかり前だつた。」

貝 櫻
不斷あまり出掛けないのが、其の朝に限つて、ふとね、海岸を歩行いて見たく成つて、まだ朝御飯前でしたわ。一人で浪打際の靜な處を、ぶらついて居ますとね、向うの岬の洲の上に、黒く一團、人集りがして居たの。……傍へ行つて見ると巡查が交つて居て、——私、それぢや行くのでは無かつただけれど——朝日は射して居るし、波は青し、砂は美しいし、海の中から觀音

様の御像でもおあがんなすつたのぢやなからうか知ら、そんな心持がしたもんですから。——
最う筵を掛けてありました。……身体は何う成つて居るんでせう。紅い切が、血の染んだやう
に幽に絡つて、可哀相に、水々とした白い足が、揃つて長く筵の下から出て居たの。房々とした
髪がね、まるで櫛の齒を入れたやうに、すんなりと浪の目の立つた砂に着いて。

はツと思つた。けれど、あの、見ないうちなら知らぬ事、一度目に掛けて、急に、顔を背けた
り、遠くへ退いては、然もく汚らはしがるか、蔑むか、忌はしがりでもするやうで、……あは
れな人に悪いでせう。

遁げた、除けた、と人の目に着かないやうにして歸らうと、心ぢや、佛様を念じて居ました。
あれ、それが悪いから私は自分ぢや、わななく震へるのをさへ我慢して、密と立つて居たんだ
のに、酷いわね、然もく汚らしく唾を吐散らしながら見物して居る、少づくりのお婆さんが一
人居る。

大年増の學者でね、土地で評判なものです。……鯉の乾ものに牛乳を掛けたやうなお化粧をし
て、しゃくれッ面の顔が出て、出額でねえ。あるみ縁のめがねを掛けて、……でも鼻だけ隆いの
よ、思召の通——どうして田舎ものは、あんな生際なんぞでせう、好かんぢやない、つるりと面
なりに輪取つて、眞直に成つて、其處へばかり、膏がかつて、てらくして居る、磨くんでせ

うよ……鼻の頭と、其の額が赤ツ茶けて。因果とね、近視眼らしいから、仰向いて、鼻で人を見
て、うむと云つて一寸其の額で睨んではものを言ふの。……そんな業を造るくらゐなら、何も學
者になんか成らずと可い——其處にあつた死骸のやうに美しく死ぬもしようのに——薄ッぺらな
服装を仰山らしく、肩裾を膨らまして、銀鎖をぶら下げて居るんだつけ。

其の言ぐさが口惜かつたの。

——無教育だの、墮落だの、工女か何か、——（あゝ、貧民ですな、うむ、うむ、然うでせう、
瓦斯絲、はぎく、唐縮緬の服装で知れます、はあ、うむ）——てツちや額で睨んで、鼻の上に
めがねを躍らして——お聞きなさい。

——（癡情の果、然うでせうツて、旅役者に、迷つて棄てられた、——自業自得、だが、歎す
べきですね、憐むべきですね、寧ろ呪ふべきですかね、其の愚や及ぶべからずです……うむ、ば
ら錢ばかり、何にも持たない、然うでせう、此でも小遣がありや死なないかも知れません、色の
戀のと云つても要するに生活問題ですよ。うむ、然うですとも。——面は？……打棄られたくら
るぢや……しかし悪くないんですつて？ 貴方は、それだから。——と其處に立會ひのお爺さん

の醫師の背を打つよ。

——（何にしろ、教育は大切です。少くともだわ、私たちが經營する一列の、なにがしと言ふ

學校の、それこそ門を潛つたら、小使だつて、こんな眞似はしやしない。詰りです、低能なんですよ。馬鹿ですとも、其が證據には、遺書を御覽なさい——乳の下へ赤い紐で結へたつて、あら可厭な、妊娠してるのね……益々低能、寧ろ白癡だわよ。字を御覽なさいよ。塵がみに消炭がこぼれてる形ぢやありませんか。——又唾を吐いて、——(兎に角可い材料を得ました。……)然う云つて、ずらりと、居た人を漁師やなんか呷して、——(鑑むべきですね、女子教育は大事です。……はい、可い材料を得ました。……朝起は三もんの得ですね。)

——死んだ娘さんの心持はどんなでせう。——

夫人は、其處に、天井に、其の娘を見るやうな、恍惚と……然も氣の緊つた端正しい顔。……彼奴は割膝に成つた。

八

「一度だつて、口も利いた事はないけれども、顔を見ればかりで澤山。もう氣障つたらぬ。私には、日本中の憎らしさを一人で背負つてる、其の學問年増が、唾を吐きく然う云ふのを聞いて、我慢が出来ない。口惜しくつて、癩に障つて。」

ですからね、陰ながら其の娘さんの死骸を何う庇ふよりか私が死骸に成るんです。——そして、

瓦斯絲はぎく唐縮緬でない、貧民でない、工女でない、私の死んだ姿を見せて遣るの。嗚、無教育だと云ふだらうから、それで、私、手習を、……手がよくないんですからね、女中に内證で、お消しをしいく、手本に縄つて寝ないで一生懸命なんです。でも些とは出来て来ました。自分だけにも、これで可いと思つたら、綺麗に、すらくくと書いて、

夫人は細り胸を抱く。

彼奴は引込まれて、肩をぶるく。

「しつかり其を膚身につけて、岬の巖に腰を押かけて、すつと波へ沈むんです。」

氣が沈んで、影の添ふ、姿が浮出て、而して壘が深く成つて沈んだ。

「そして、あの娘さんと同じ所へ死體を置きたい。其のくらゐな我まゝは、死んだあとでも佛様が聞届けて下さるでせう。見たが可い、學問年増。——

娘さんは浮んでくれるでせうねえ。」

「浮びます。」

夫人の言ははまだ途絶えず、敢て問れたのでもなかつたのに、彼奴は掌を握つて、堅く成つて言つた。

貝 櫻
「浮ばねえで、奥さん。思召を伺つただけで私も浮んだ。え、もう何にも仰有らねえで。私の

やうなものが泣いちや濟まねえ。折角大事な思召を、此の空涙で嘘にするやうなもんだ。」と云ひながら、ぼろ／＼と涙を落す。

「奥さん、私あ(法螺の貝)と言はれら。山ぬけをして野を荒らすんだつて。へい、けちな悪黨なんで、悪黨はけちだけれど、人を殺すくれえ、殺すより尙だ酷いや、いま、お前さんを引摑まうとした事なんざ、空腹へ茶めしなんだ。

此の間もね、地潜りで夜中歩行いてて、……娑婆に飽倦ながら、死場所に迷つてる爺に逢つてね、宵から何うしても死ねねえと言ふから、干鰈の良を教へて、薬に海鼠で、だらりと首を縊つて、ぶら下る奴を鼻突合せて見届けた豪傑なんだ。あ、可い功德をした、此の功德で、俺もまだ娑婆があらう。爺さんは俺の身代りに、しばり首に成つてくれた、と一人で嬉しがつたくれえな大和尙なんです、今の其のお優しい、お情を伺つたら、私あ、私あ、奥さん、」と歎歎して、聲もしどろに、

「お前さんのお姿の、其處に在らつしやる、此處で、此のま、消えてなくなりたく成つた、ぐツたりと往生がしたく成りました。死んだ面を、一目、奥さんに見て頂きや成佛する。今すぐ舌でも噛切りてえが、可愛い娘なら知らねえこと、こんな外道ぢやはじまらねえ。はじまりませんや!……あ、不可え、口を利くうちに涙が出やがる。……こんな涙にや足が生えて、そこらを

蜘蛛に成つて這ふと悪い。……鼻紙にでも撮まれてえ。が、それも榮耀だ。己が身で、未練らしく、お暇を申します。飛んだ、お騒がせをして濟みません。よく、お前さん、こんなものの手が掛つた時、其處から、縁錆が出ずに居ておくんなすつた……退いて下さいまし、そら動き出しやすぜ、へい、何うも。へい、御免ねえ。」

と言ひつゝ、じり／＼と窓下へ行膝つて出て、夫人に身近く成つたので、又しりごみした。

「勿體ねえが、眞人間だった時の阿母、死んだ姉か、女の佛様のやうに思はれます。奥さん、一思ひに、こゝから飛出して消えてなくなりませすまで、お前さん、後生だ、些との間、雲に隠れねえで、拜まれて居て頂きてえ。一生に一度の願えだ。いや、申戯ぢやありません。お金子なんて、……否、また私に下さると後で御迷惑に成る事があるんだ。不可え。……不可えと云へば然うだ。寢息で大丈夫だとは分つてますが、女中衆にね、何うぞ何にもおつしやらねえで——此方人等が行きかけの極つた言種ぢやありませんが、誰にも言つちや成りませんぜ。お別れに、もう、一目、其の遺書を。」

「まづいんですよ。」

貝 櫻
と仇氣ないまで、巻紙を、伊達巻摺れに、さらりと引くの、窓に立つて熟々視た。
頭巾が、松に潜ると一所に、夫人は立つて、銀貨入を落した。

「拾つて頂戴。」

一文字に影を引いて、やゝ霧の立つ浪打際へ、鯨の背の如く、隠れるのを見て、月影を胸に抱いてイみつゝ、櫻貝の夫人は空が呼吸するやうな浪を視た。

「あゝ、私たちのすることを、海は何と思ふだらう。」

窓帷を、はらりと引く。

其の味爽に、町も村も摺半鐘の音に驚かされた。

森にも、屋根、海、山、岬を見通しても、一縷の煙の影もない。

ぞろ／＼と出會ひ、立會ひ、唯一ヶ所其を鳴らす村端れの踏切を越した所、山の半腹に立つた火見梯子へ、のんのと駈着けて、田舎は暢氣な、口々に、

「火事は何處だ？」

「汝等の足許だ。」

と梯子の天頂で、三角頭巾の、烏のやうな黒いものが喚いた。

「ひやッ。」

飛上つた群集の足許に、ごろんと轉がしたのは、めがねを掛けた、年増の死骸、紀州ネルの腰の周圍、就中薄汚い、どろ／＼衣服を――後で知れたが、――學問年増を裸體にして、わざ／＼

着換へさせたものだとの事である。

奴は、呵々と虚空で笑つて、林が揺れる如く手足を振つて一同が立騒ぐ上を、澄まして跨ぐやうに、梯子から山懐へ。……浦や、白浪、朝嵐に尾花が戦いだ。

新通夜物語

松吉は、絹夜具掛けた置炬燵に居直つて、袂から葉書を出して従姉に見せた。

—— たつた一人の叔父さんが亡く成つた。

すぐ、おいで、——

亂暴な大な字、裏に朱を入れた附箋がしてある。

「お米さん。そら一昨日の晩、夜半に之を出したんだよ。」

「あ、然う。」

と従姉は、青山の齋場から、一緒に桐ヶ谷に柩を送つて歸つた、白襟黒縮緬、五七の桐の紋着と云ふ極つた服装でも、羽織を着ないから撫肩の悄れたやうな細い姿で、火鉢の縁へ請取つた。膝は炬燵に寄添ひながら、

「松さん、何だか、恚うやつて更めて拜見すると、今朝ツからの事は皆夢で、今はじめて叔父さんのお亡ななすつたのを聞いて、吃驚するやうですね。でも之があつて私……」

お米は言淀んで、

「今朝、はじめて、新聞で知つて、ハツと思ふと、お亡ななすつたのは一昨日の朝でせう。まあ濟まない、些とも知らない、お見舞にも御無沙汰して居て、何うしたら可いだらう。お葬式に間に合へば可いが……何しろ、直ぐに駈着けようと、煙管を放棄つて、箆笥の抽斗に手を掛けたけれど、ふつと氣に掛つたのは、訃音が来て居ないでせう。葉書でも下すつたのなら、東京と横濱の間、どんなに後れても最う着かなければ成らないのに。……又、然うでもない、此方に都合がおあんなすつて、故とぢやないか知ら。何時か、叔父さんの機嫌を損じて、叱られた事のある私だから、もしかすると御勘當にでも成つて居て、……」

「いや、其の儀は拙者とても御同然。」と、松吉は笑ひながら顔を見た。寒い所へ、大分飲んで居たのである。

其時、敷居を隔てた長火鉢の前に小さな咳が聞えて、

「何が拙者だね、御同然もないものだ、お米さんに何の咎があつて？ 松さん、お前さんぢやあるまいし。」と掠れた笑ひを一寸交せて極めつけたのは、當家の總領娘で同じく年上の従姉に當る。が、屢々懷中を痛めつけた覚えがあつて、なか／＼以て返濟に及ばないから、松吉が恐を抱く大姐である。

篤と云ふ、藝も家も、當上杉家の嫡々は、更めて二階に飾つた祭壇の靈前に、同じく、桐ヶ谷戻りの近親の客が八九名で、寒さ凌ぎの膳が揃つて、待遇に其處に出て居る。

此處の次の室、其の長火鉢の銅壺には、むく／＼と銚子が浸つて、鐵瓶と一所にむら／＼と立つ湯氣の中に女が三人、圓鬘なのは篤の細君でお悦さん。櫛巻に引束ねたのが、件の大姐でお常と云ふ。も一つの銀杏返しは、其は松吉の家内のお光である。

「お聞きなさい。」と、お常が其方から聲を掛けた。

「何です。」と松吉が炬燵で訊く。

「否、濱のお米さん。」

「はあ。」

「其の人はね、不可くつて困るんですよ。一昨日の晩もね、酔つぱらつて、飛込んで来て、息を引取つた父の顔を見ると、それでも神妙に目を擦つた中は可いけれど、やがて大胡坐を搔込んで、(葬式は何時です。……いづれ叔父貴の遺言で、さし荷ひでせうから片棒いきます。)ツて、ふらふらするぢやありませんか。

俱樂部や會の人、お弟子さんたち大勢の居る中で、

落着いた態度をしてお米が應じて、

「困りますね。」

向うで、お光が、徳利の肌を小指で當りながら、

「お察しなさいまし。」

二

「それから篤の手を取つて、(さあ、遣らないか、湯灌をしよう。そんな服装ぢや不可い、衣服を脱いで、襦袢に禪でなくつちや駄目だ。……僕も脱ぐ。)と帯を解きさうにするんぢやないか。

御當人、酔つてて威勢が可いし、餘程何うもね、あれなのよ。飲むと脱ぐ癖が付いて居ると見えてね、自分の裸に成るは可いけれど、ひとのまで剥がうとするのは酷いのね。」

と蜜柑の皮の灰に落ちたのを火箸で寄せて、あり合せの十能へ落とし込む。

「心ある身にして之を見ると、同じく挟んで棄てられさうで擦つたいな。お手柔かに願ひます。

篤さんに、そんな事を言つたか、何うか、そりや覺えては居ませんがね、……自分ぢや脱ぐ氣で居たかも知れないよ。」

「拜見がしたかつたわね、精々膚合の可い處かなんか。」と口の悪い事に掛けては御多分に漏れな

お嫁さん、婚禮の時に、文金で、ぼつと成つて、俯向いた初々しさを忘れたらしい。

松吉のお光が、もう一度、

「お察しなさいよ、困りますわ。」

濱のお米の、濱米が、箱迫の亡者と云ふ附箋附、朱入りの葉書を、白襟に挟んだ處は、一寸詰腹を切らせる御上使と云ふ形で、手を懐中へ、肩を落して袖を投げた。十八九から有る癖の、まだ留まないので何となく可憐しい。

「まあ、眞個に、舊はい、兒だつたんですのにね。」

唯、向うの火鉢で、芬と蜜柑の皮の燻つたのが、雪國の冬の、ものの身に染む香を傳へて、花桶の薰よりも、置炬燵の袖に透つて……

（正月は何處まで、から、山の下まで、土産は何ぢや、蜜柑、柑子、橘。——）

——と、故郷の暗い霞の中で、春を待ちつゝ、小さな手を敲きながら唄つたのを思出す。……

松吉は、我ながらだらしない、酔醒めの襟を搔合せた。

「雨、霞、雪や氷と押寄せますね。大晦日は近し、敵は大軍と成つた。決して未練がましく申譯をするんぢやありません、が、其の何ですよ。襦袢で湯灌と云ふのは、自分が威勢の可い處を、貴女がた御婦人に見せようなんて怪しからぬ野心があつたんぢやありません。實は、以前、叔

父貴が遣つたのを見たんです。……

然も能樂堂の勤務歸りで、勝色の五紋に舞袴と云ふのを、さらりと脱ぐと、それなんですぜ。

青味のか、つた鼠の袖でね。瘦せて浅黒く、引緊つた脛高の腰へ、手拭を三尺がはりに、ぐい、と一つ絞つて緊め、澁苦い口つきをしながら、（さあ、おい、佛様を抱かせる。）と鹽の新筵へ突立つた時は、うっかり私は、（三好屋）と遣りたかつた。——何さ、あの、樞右衛門翁さんのお通夜の晩さ。」

「樞右衛門翁さん……誰方。」と濱米が彼方へ向く。

お常は、長火鉢に兩手を翳して、

「鼠坂に居なすつた、父の叔父に當る人なの。お米さんは御存じはないでせう。……あ、其の眞似がしたかつたんだね、松さん？」

「飛でもない。」

松吉は慌てたやうに、

「其の眞似がしたかつた日にや、誰か其處等、親類の佛に成るのを待つて居るやうなものだ。ぼろッ買、古物買、ランプの破片を通越して、湯灌場買だ、それぢや。……申戲ぢやない、いざと云ふ時は野郎、あの意氣でなくつちや不可いと思つたからさ。つい酔つて居て饒舌つたと見えま

す。

「勿論遺棄ねはしないのさ。」とお常が薄笑の額で見越す。

三

松吉の家内が吸殻を軽く拂つて、

「そりや、叔父さんのは、御紋着に袴だから、すらりと脱いで、引立つんだわ。お前さんのどんつくぢや、……」

「お黙り！」

松吉は一つ肩を揺つて、

「膾は酢で持てツて言はあ。鼻左衛門尉などが、何を知つて。禪さへキリ、として居りや、ねえ、お嫁さん。」

「可厭だ。」

とお悦は笑つたが、急に鼻筋の通つた頬が緊つて、

「あ、今のはお祖父さん(叔父を云ふ)の聲に肖如だつたこと。」と顔を背けたのは、涙ぐんだので、座は肅條であつた。

「お嫁さんて、……でも變ね。」と濱米が言ふ。

「それはね、お聞きなさい、濱のさん。」

「あ、私が横濱に居るから、濱のさん、そんな次第の(お嫁さん)なのかね。」

「然うさ。お嫁さんだから、お嫁さん。古く成つて、左衛門胸悪、嬰兒が出来て阿母で、年を取るとお婆さん。」

「何だね、くだらない。」とお常がたしなめるやうに言つた。

「否、肝心なことです。篤さんが婚禮の晩に、式が済んで膳が並んだ、と角を取つて、叔父が御縁女の隣座へ陣取る。一同續いて居流れたらう。電燈の灯が寂としたとお思ひなさい。いきなり猪口を取つて、(やあ、お嫁さん)一つ獻じませう。」と突附けた叔父も鮮明だつたが、緋縮緬の袖口を拜むやうに合せて頂いた、お悦さんも端麗だつてな。

「澤山よ、ねえ、坊や。」とお悦は抱いた兒に頬を揉込む。

「お銚子。」と廊下で言つて、愛くるしいのと、すらりとしたのと、廂髪が二人、お弟子の細君と妹の手傳ひが、連立つて二階から降りて入る、と其處で、一時に口を利く。

松吉は委細構はず、

「それ以來、何時でも呼んだ(お嫁さん)さ。恐らくね、悴に氣に入つたのなら其で可し、で、多

分「昨日まで(嫁さん)の名は知らなかつただらうよ。」

「一昨日つて？」

「亡く成るまでさ。」

「まあ、氣の通つた方だわね。」と、お米は底澄んだ色の深い其の瞳を睜つたのである。

「其だから情女が出来た。よく若い時の惚氣を云つて聞かしたかね、吉原の晝三に深いのがあつたんだつて。——(お前なぞ、分るめえ。初會にや、遊女が遠くへ入つて、斜違に、すつと来る。裾が觸るのを機會に、つゝと立つて歸るんだ。江戸兒は負惜みだ、負惜みだが出来やしめえ。)なんてツてね。然るほどに通つたが、まるで不待遇、或夜も慨然として仰向けに頭を抱へて、獨嘆息をして居ると、右の遊女、千鳥足で入つて来たが、あとで思ふと情夫と痴話喧嘩で、自棄酒の呷切を遣つたんだらうツてさ。」

大生酔のころんこで、松並木へ行倒れの氣で、トンと翠帳紅閨へ凭れると、其の拍子に、曉の時鳥で、かつと嘔した。……驚破や、鎌倉、寢て居た叔父の顔から胸へ……でも憎くはなかつたところ。——これで深く成つた。其の後朝には、部屋着の袖へ、銀拵への刀を抱へて、素足の袂取り、茶屋の手も借らないで、大門口まで送つて出た。駕籠屋が退つたぜ、何うだ、買ひてえか。ツて、濫い口で笑つたもんです。」

「そして、お小遣を頂戴したの。」と濱米は莞爾する。

「否、然うも参りません。」と松吉は、苦笑して額を壓へた。

「其の癖、若いものの懐中は知つて居るんだよ。叔父はね、自分だつて此の上杉の家になつた十四年から養子なんだからね。思ふやうには行かなかつたのさ、勿論誰でも然うだけれども……しかし其の時分の友達にや頼母しいのが居たんだつてね。」

何とか云ふ兄弟分が、それ、節句に連立ち……浅草です。土手まで行つたが、餘りと云へば近頃家が不首尾だから、叔父が歸らうと云ふ。何でも行けと云ふ。振切つて遁げようとすると、やあ、卑怯ものと、喚くが疾いか、土手の月夜に晁乎と引き抜いた。慌てて、落ちた奴がある。始末が悪から附合つて、あくる日、朝なほしの湯豆腐で、さて貴公さ。眞個斬る氣だつたかい、と聞くと右の兄弟分が、うむ、と言つて豆腐を鵜呑さね。

(何うです、友だちは恠くありたきものだ、……と云ふと、拙將棊が飛車取王手を見附けたやうだ。が分つたか。)

洒落れた世界だつたんだね。」

長火鉢では、挨拶に出たのであらう、お悦は居なくなつて、かはりに嬰兒を松吉の家内が抱き、廂髪の一人が残つて、取合はず話して居る。

「尤も、蟲聞と稱へて、道灌山の暗夜ね、枯野見と稱して向島の吹曝しにお供申附かつて、數獻頂戴に及んだ歸途に、吉原へ引張込まれると、(さあ見立てる、氣に入つた婦があつたら買つて遣る。……下ッ腹へ力を入れろよ。勇氣を付けて格子を覗け。)と言ひます。

下腹へ力を入れて、張店の顔が見られますか、お米さん。」

お米は笑つた。

「然も大音聲です。……隅へ引込むぢやない、彼處に限つちや町の眞中へ後込みすると、(意氣地なし、一刀さしてれば叔父が斬了ふ處だ。さあ、女と刺違へるか、俺と決闘に及ぶか何うだ、返答しろ。)と呵々と笑ふぢやないか。弱切つたぜ。私は、……」

「何かの祟でせう、松さん。そりや、反對に遠くから、御意見をなすつたんぢやないの。」と流眇に掛けてお米姐さん、銀煙管の細い口。

「處が然うぢやないだんよ。近頃に成つて氣が付いたんだ。傍若無人當るべからず、とばかり思つたが、足手が不自由に成つて、うつとひと一人、新聞を——蒲團に擴げても、好きな戦争の記事を読むでもなし、其處の日當りの障子の際に、炬燵に兩手を突込んで端然と坐つて、半分茫然と

成つて、魂ばかり残つて居るやうな姿を見ると、遮るものなしに不斷の心が讀めて、私は涙ぐんだんだよ。(もつと、我儘を言へ。何故隔てる、遠慮する。若いものだし、金は持たず、たまには一杯飲みたからう。)まあね、女郎買もしたからう、何故強請らないと云ふ情合なんだねえ、お米さん。」

「煙草を上げませう。……あい。」

松吉は煙管を取つた。

「お互に、小兒の頃は故郷で育つて、二十歳を越して、はじめてお目通り仕つたから、自分で氣が怯けて遠慮があつた。かけがへの無い叔父だのに、蟲が可いと言つてはそれまでだけれど、些とは我ま、が言ひたかつたね。」

「あ、ね。」

煙草入を膝に視めて、

「それでも、松さんは羨しいわね。一所に旅をした事もあるし、今度お亡くななすつたつて、しらせを下すつたのがお前さんでせう。私は知らせられる方なのよ。それもね、此の葉書を、前に請取つて居たればだつたけれども、新聞を見るまで知らなかつたんでせう。さあ、出ようとすると氣が咎めて、箆笥に凭か、つて考へましたわ。」

「相済まん、私も飛だ不沙汰をして、前の番地しか知らないだらう。此家のうちには、ちやんと控があつたんだがね、何の間違だか、金蘭簿と云ふ、それ知合の所書を記した帳面。其が一冊と、外套を一枚、しかも叔父さんの亡く成る前の日に盗まれたつてね。此方でも方々へ知らせを出すのに大間誤つきと云ふ始末だつたさうですよ。」

「をかしいわね。それ二品。」

松吉の家内が小耳へ挟んで言を入れた。

「眞個に此の葉書があつて嬉しかつた……過般叱られてから私……然うでなくてさへ敷居の高く成つて居た處だから。」

お常が聲を掛けて、

「あれはね、松さんが、讒言したのさ、(お米さんは怪しからない。)つて、眞個に怪しからないんだよ。」

「そりや、私知つてますわ。」と敢て肚も立てないが、ふと寂しい顔をした。

松吉は詰つた煙管を、忙しく、火鉢に吹きつ、咽せたやうに、

「申、申戯ぢやありません。讒言は酷い。……たゞ、故郷に居る叔母さん(お米の母)に、あんな酷い水を飲ませとくと言ふ法はない、と叔父貴に話したばかりです。」

お悦が二階から下りて来て、また其方では話が榮える。

五

「もう、お米さんにや久しく逢はないから、話す間も無かつたがね、私が前に、故郷へ歸つて、叔母さん(お米の母)に逢つた時、砂糖をつけた乾餅だの、椎茸のお汁ね、小兒のうち、好きだつた。そんな御馳走の話は別として、一晚泊つて、朝流元へ出てさ。御存じの内井戸だらう。びしよびしよの土間に、ぐづぐづの井戸側さ。繩がぐつちより、釣瓶に青苔ぢやありませんか。」

水は灰汁のやうで泡が立つ。蛞蝓は這つてるし、戸外が塵埃だらけの大川と来て、おまけに梅雨の糠雨です。昔、佐久間玄蕃頭はこんな水を飲んだか知ら、と思ふと悚然として、傍で干菜の糠味噌を搔廻して居なすつたのに、(叔母さん、こりや引越さなくつちや不可ませんよ。)と言つたんだ。

(二階借家でも、こんな場末で無いと入費が足りないもんだから。……お米の方で、もう些と願てくれると可いけれど。)と、内輪だと思へばこそ、何の氣なしに言ひなすつたらうけれど、キヤ〜と心胸へ来て、何だか、(あんな飲水の中へ置くのは、火の粉を溶びせて置くよりか心細い。)

然う言つてね——東京へ歸つて叔父に話すと、横濱に居る娘は何うしてる。——お米さんの事を叔父が聞くんだよ。」

「あゝ、」と松吉の顔を見詰める。

「金貨をして居るんださうです、一旗擧げる目的ですつて……私が喋舌つた。(はてな、變な旗だな。過般も一寸来たが、指環を兩方の指に嵌めて、金々々たりと塗つてる。)お米さん、氣にしないよ。」

「松さんが言ふとは思はない。」

「可ござんすか。(赤檉滿枝怪しからん。)とへの字なりに口を結んで、猪口を横衛へにした處へ、格子が開いて、あの時さ。——丁ど其處へお米さんが入つて来たらうぢやないか。不思議と言へば不思議だね。」

叔父さん、御機嫌よう、まことに御不沙汰。と云ふ、詞の端をへし折つて、(おい、母親は達者かい、俺の嫂だ。媼さんの鼠ぢやねえ、溝泥のなめものを當てがつて置いて濟むと思ふか。何故手許へ引取らないのだ。金子は天下の湧きものよ、手前が其處で裸で踊れば、十兩くらゐ俺が出す。唯一人の親ぢやないか。一家一門に憚りながら俺をはじめ、仁義忠孝の道に合つた奴は恐らくない。偶には一人孝行の眞似もしろ。お前は美人だから、尙ほ引立つ。夜應にも成り得ない

で、誰のために利を貪る、金貨とは何事です)……」

「私は全で夢見たやう。」

「狼狽をしたのは拙者さ。……今までから〜と沓えのめして、金瓶樓に流連をして居た大盡が、忽ち追剝と變じて辻斬も同然です。返す刀が可恐いから、(おや、半鐘が鳴るやうだ。)と云ふが否や、我輩一散に遁出した。」

あとで——お常さんだの、叔母さん(叔父の連合)が弱つたつて——就中、お給仕について居たお悦さんはまだ婚たての處、餘りお米さんに氣の毒らしくつて涙ぐんださうだよ。——其の後、然うさね、半年も経つたらうか。お米さんの母さんから、僕の許へたよりがあつて、……(水のい、處へ引越し申候ま、よじながら御安心。……此奴あ明礬が利き過ぎた、と我輩大にまるつて、頼杖支くこと半時也。

何だかね、其處等が氣まづく成つて、年始も出さなかつたり、來なかつたり。——更めてお詫もするが、私だつて實の處、そんな氣で叔父に言つたんぢやなかつたんだ。」

「禮を言ふわ……私こそ、否、私、あの時すつかり目が覺めたの。あゝ寒い。」と肩のぶるゝと震ふ拍子に、居ながらよせた袂を這つて、煙草入がばつたり落ちる。

「あたらないの、さあ、可い火だよ。」

「松さん。」

「……………」

「御免なさいよ。」と莞爾しながら、裳を消すやうに、炬燵の半身、三十路を越えたが艶である。

六

「大層御慰めだね。」

「一家の御主人、萱原松吉さんだもの、……でも抱いて寝て上げたつけ。」と蒲團の模様の水仙に、微笑の片頬を當てる。

「お米さん、其の頃は可愛い兒だつたでせう。」

と言ふ……お常は、皆で鮎をはじめた。

濱の姐御は振向いて、目まじろぎもせず、

「え、今でも。」

「些と今夜あたり抱いて見ては何うだね。」

と銚子を載せて通ひ盆、海鼠腸に割箸を、ト兩方へ、お常が起つて持つて来た。

「御飯のあとだから一寸繋ぎに、——お相酌でめしあがれ。」

「まあ、姐さん。皆さんも此方へ入らしつてお話しなさいましな。」

「二階の人たちが歸つてから。でないと睡く成りますからね。……まあ澤山昔話をなさいまし、死んだ父も聞きたいでせう。ですが、餘りお話が持て過ぎると、御新造に悪うござんすよ。」

「否、もう何うぞ、もう、お構ひなく。有合せましたもので失禮ですが。」と目のふちを清く刻んで、松吉のお光は海苔を折つた。

お悦が中繼に小皿へ受けて、

「姐さん。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「あ、真平々々々。」

「此の姐さんのは邪険で不可い。煙管を持つたなり腕を投出して、構はず、すやく寝了ふんだから——其處へ行くとお組さんだ。」

「あれ、あんな口を利くよ、呆れもしない。」とお常は松吉を一寸睨む。

「それはね、手前どもから、御新造さんにも申譯をします。……唯今のお組と云ふのは、(私の姐)なんでもいいます。」

と濱米が眞顔で云ふ。

「あ、然うだつけ。大てれ。」と彼方へ遁る。

「此の方は、私が寝ても、寢着の袖を肩へ掛けて熟と視て居てくれたんです。」

松吉は思はず片手で肩を抱いた。焼海苔が照々と、電燈ばかり輝いたのである。

「あ、然う言へばね、お米さんのと一所の時、お組姐さんの許へも、それと同じ文句で葉書を出したつけ。(たつた一人の)で、(直ぐおいで)では、お組さんが、あの氣だから、どんなに氣を揉むか知れやしない。故郷は遠し、雪の中。お刺に、あ、云つた亭主持だから、とあとで酔が覺めて氣が付くと、さあ心配で堪らないから、今度は細い字で書直した。二度目の早打ち。——昨夜は酔つて居てまことに申譯これなく候。(中略)可いかね、——迎もくおいでに成り候儀にはまゐり申すまじく、とみなく申しあひ、且つは御心の中お察し申上げん。——」

「うまいわね。」

「いや、恐縮です。」

「そりや姐に取つては、眞個によく、思遣りを行届かせておくんなすつた。……實際出られない身體ですからね。ですが、松さん、何だつて然う申わけが無いほど飲むんですえ。……況して叔父さんのお通夜の晩に、そんなお前さん、前後の分らないほど飲まないでも可いちやありませんか。」

「は、は、恐入り奉る……従つて今夜の處も、お酌と云ふわけには相成りますまいでせうか。」

「そりや、今夜は可いけれども。」

と手はしなやかなものであつたが、襟裏が幽に燃える、と小さな聲で、

「聊か……ほ、海鼠腸酒は生意氣だよ。」

姐御は濱にも千年である。

七

「でも、姉に見せたいわね。」

お米は掛蒲團に、顔をつけて莞爾して、

「驚くか知ら。それとも喜ぶか知ら。(松ちゃんはおとなに成つたつて)……」
「申戯ぢやない。」

「一寸、お前さん、姊にも、矢張り、こんな風におしかい。」

「こんな風とは。」

「酒を飲んだりさ。」

「む、何ういたして、僕は安倍川を食るね、……それから蜜柑を剥いて貰つて、あんとおしよ
で頂戴する。」

「また近藏さんに打たれようと思つて。」

「近藏さんつて。」

「姊の亭主さ。……いま此形ぢや出刃庖丁だよ。」

「あ、其の事。何、あの時か、打たれやしないよ。……その時分はね、拙者武術の嗜があつた。
没羽箭と號して礮を飛ばし、毛野胤智と名告つて居合ひを抜いたもの。でも驚いたにや驚いたよ。
出刃庖丁處ですか、鐵棒ぐらゐの鐵の火箸を逆手に取つて、近藏め、(小僧覺悟しろ)と來た。十
四の小兒を生命がけにするんだから、お組さんも、あの人ぢや苦勞をしたね。」

「今でも同一よ、いざこざは絶えやしない。つい一昨年も濱へ遁出して來たぢやないの。」

「お組さんが。……あ、其の時だらう。一寸、此家へ來て叔父に逢つて、生れてから、初めて
顔を見るのに、三時とも居ないで、すぐ歸つたつて、——だつて、故郷の城下に居なさる、叔母
さん(お組の母)の許へ行くつもりで、お組さんが、自分の住んでる、あの龍野の温泉から停車場
まで出て見ると、東京行とある汽車がとまつた。……北陸線の開通した當座だつてね……山の中
ではじめて見たんだ。二百里足らず、これに乗れば一飛だ、と思ふと矢も楯も堪らなく、叔父の
顔が一度見たく成つたと云ふんぢやないか。しかし母さんの驚きやうつてない。電報が一日に七
度も來たからつて、夢を見たやうに飛んで歸つたと云ふ、話したつたと思ふ。……」
「それがね、然う言はないぢや此方へも極りが悪かつたからなのよ。……實は喧嘩してもう歸
るまい、で駈出したし、私も、もう歸すまい、で意氣張つたんだけれど、氣が弱いんだからね、
擱んで引立てられるやうに歸つて行つたのよ。」

「氣の毒だねえ。ぢや二百里越しに例の又、たぶさを取つて引摺つて行かれた次第だ。」

「然うなのよ。」

「でなけりや、今夜あたり、一所に恠う遣つて炬燵に居られたんだつて、あ、と猪口を放して
額に手を置く。」

「松さん。」

「何。」

「なかよくしようね。」

「え。」

「滅多にないもの、こんな事は……姉でなくつて悪いけれど。」としんみり言ふ。

「お米さんのやうでもないぢやないか。」

「知つてますよ。私は姉より冷淡でした。」

と優しく睨んだ、が、炬燵を抱くやうに、軽く柔かな手を伸べつゝ、胸を寄せて、極めて低聲に、

「そりや、親類縁者より、外におもしろい事があつたもの。……誰だつて然うでせう、ほゝ。」

松吉は、炬燵に挫若として其の白い面を見た。

「一盞頂戴。私は飲けないけれども。……あゝ、難有う。……姉はね、あれで却て些と飲めるのよ……」

「……思出すでせう。松さん、可憐いでせう。御返杯。」

「我いまだ飲まざりけるなりだ。重ねて下さい。もう一つ。もう一つ。全く喧嘩ぢや敵はない。もしか、色戀なら、そりやお米さんの方かも知れないけれど。」

「おつしやいよ。」

「否、だが、實際、お組姉さんは可憐い。」

八

「何しろ、祭禮の中を、手を曳いて飴を買つてくれた姉さんだからね。十一から二くらゐだつたが、あの人は、まるで私を小兒の氣さ、尤も小兒は小兒だけれども。」

其の頃だつた……故郷の豊國神社と云ふの、矢張り祭の時だつて。お組さんが見世物を見せかね、お小遣を十錢くれたよ。何の見世ものだつたか、それは忘れたがね、(さあ、これから入らうかね。)と云つた姿で、小屋の前に、私と一所に、二人で立つて居た島田鬚に結つた後姿を覺えて居る。

たゞし、其の視めて立つた繪看板も忘れたくらゐだのに、奇態に其の姿が目に着いて居て、今でも此處に立つて居て何か口を利きさうだよ。」

松吉は偶と四邊を視めた。正面の壁の、晝頃まで其處に叔父の柩の据ゑられたあとを、疊四五疊、冷たく残して、一雙の六枚折、屏風は一面菖蒲の花、翡翠が一羽飛んで、影が流れる。

「社の池には杜若が咲いてね。」

「可厭な、松さん。」

お米のともに視る白い頬に、其の花の影が映つた。
長火鉢の周囲は賑である。二階から降りた歸りがけの客が交つて、恰も高い石段の下の町を祭
の練ものが通る。

「何故かね、餘程、それが目に着いて居たと見えて、あと二三年経つてから、下町の方に火事があつて、小兒の彌次め、山の手から飛出して、あの高臺の神社の中を近道で駈抜けた事がある。月はあつたが薄暗い晩。……境内に梅がある、其の咲いた時で、中にも紅梅が一株、眞盛に咲満たのに、——火事は遙に目の下の川岸の遊女町だつた。——其の火が颯と、其の紅梅にばかり輝くやうに映つて、緋の色とも何とも美しいつたらない。

火事を見ると、綺麗だね、と私を抱いて居て母さんの言つたのを忘れない所爲か、其の紅梅の燃えるやうなのを見ると、茫乎と成つて凝視めて立つた。風は氷のやうだつたつけ……樹の下ばかり、ほんのりとして、紅く霞むらしく暖い。と雪の積る中で、母さんの懐に抱かれて居るやうな氣がして恍惚とした。そしてね、其の咲亂れた紅梅の枝の緋色なのが、黒い大な幹に擲んで咲いたのが、夜をかゞつて見上げるほど大な鼓に見える、母さんも、家も、急に戀しく成つて、身體が溶けるやうな我知らぬ涙がさめ／＼と出た。……

其の時です、廣間を隔てた、むかうの額堂の池のめぐり、丁ど、見世もの小屋のあつたと思ふ

前に、姉さんが島田で立つて居た。

それがね、母さんのやうにも見えたんだよ。……ちらりと振向いたのが呼ばれるやうに思つて、駈出して行くと暗かつた。紅梅も消えて、火事は薄い煙に成つた。」

鐵瓶の蓋を除つたが、煮え立つ湯煙の横さまに敷居に磨いたのである。

松吉は仰向いて、

「其の時、戀しさ、可懐しさと云ふものを、繪に描いたやうに、染々見た。何處かに、そんな人が居さうで成らない。第一お組さんをはじめとして。」

「姉はね、松さんの母さんには、そんなに似ては居ないさうだよ。」

「何でも肖たやうに見えるんです。花の色を覺えたんだらうね、……春に成つて、雪が溶けてでも、まだ寒い頃だつたんだよ。あの騒動で、お組姉さんが私の内へ遁げて来て、二階の炬燵に、綺麗な島田で隠れて居たのは。」

九

「綺麗だか、何だか、松さん、島田鬚は嘘、目の迷ひだよ。」

「否、今思ふから然うだけれど、お組さんは三十幾歳ぢやありませんぜ。たしかお米さんに三ツ上だから！」

「其の私が、もう圓鬚に結つてたもの。」

「あ、お部屋様、お米の方で。」

「憚り様だわね。」

「お次手に。」

松吉は盃を受けて一呼吸した。

「尤も、お米さんが中に居るから、お組さんは若い叔母さんくらゐに、私にや思はれたがね、今考へると嘘のやうだ。二十そこくの頃だらう、近藏と夫婦に成つて間もなくだつた時だから。」

私は其の頃、和、英、數學の私立へ通つた。友だちの許へ路寄りをして、日暮方に家へ戻ると、(松や二階へ行つて見さつしやい、お雛様を飾つたが大きな雛ぢやぞ。)と祖母さんが言ひます。父親は藝を持つたま、毗に皺を寄せて、莞爾々々して居る。

母上がなくなつてから何年にも出した事がない、萬吉に小幾と云ふ、大な人形が二個、緋毛氈の下段にもたれ合つて並んだものさ。あ、それを言ふんだ。成程節句前だ。嬉しい。久しぶりで飾つたんだ。豆煎を……お米さん、豆煎の事を故郷ぢや何とか云つたね。」

「……忘れて? 炒米さ。」

「む、然う。(炒米を装つといておくんな、お米澤山。)か何か云つて、梯子段を駈上つて、あの取附の、眞黒に成つて裂けたが、何か彩色した繪が描いてあつた一枚開の襖を開ける、と、やあ表紙の繪が抜出したのかと思つた……炬燵につけて、草双紙を読んで居たのがお組姉さん。

……忘れもしない、北雪美談時代鑑と云ふんでね。紙のこげた釣洋燈も明るかつたよ、色が白くつて髪が、い、から。

唯、顔を上げて、」

と云ふ時、炬燵で二人が目をは合せた。

「(松ちやん、いまお歸りかい。)と云つたがね、何だか内の人のやうな気がしたんだよ。道理こそ、ずつと私に許に居るんだと云ふ。仔細あつて、近藏とは別れたんだが、母親の手許に歸ると、鶉の目鷹の目で、大勢探してるから直に見附けられる。それにも事情があつて、身を忍んで居なけりや成らなかつたんださうで、……様子を聞くと、其の日、叔母(お米、お組の母)さんが連れて来て、私に許へ頼んで預つたんださうです。自分が居ては目に立つからつて、お組さんを置く、すぐに歸つたんだつて、言はばお尋ねものだね。かくまはれて居ようと云ふ筋だ。

私は尙ほ嬉しかった。小兒心に……芝居ぢやないか。